

山梨県韋崎市  
坂井遺跡

送電線鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

韋崎市教育委員会  
韋崎市遺跡調査会  
東京電力株式会社山梨支店

山梨県韮崎市  
坂井遺跡

送電線鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

韮崎市教育委員会  
韮崎市遺跡調査会  
東京電力株式会社山梨支店

## 序 文

坂井遺跡は、故志村滝蔵氏の情熱によって世に広く知られるようになった縄文時代中期を中心とした垂崎市を代表する遺跡です。自宅近くに建てられた坂井考古館には遺跡から出土した貴重な遺物が所狭しと展示され、また桑畠には発掘された住居跡が復元されており、地域の歴史や考古学を学ぶために多くの人が訪れる場となっています。しかしながら滝蔵氏が発掘をしていた頃は一面の桑畠であった当該地域も、養蚕の衰退や開発の進展とともに順次その姿を変えつつあります。今回ここに報告する遺跡は、そのような坂井遺跡をとりまく環境の変化のひとつとして行われた開発に伴う埋蔵文化財発掘調査によるものです。

発掘調査された坂井遺跡は東京電力の送電線建設にともない、平成9年度に調査が実施され、3つの地区に別れており、それぞれ面積的には小規模なものでしたが、縄文時代前期の竪穴住居跡や中期の土坑、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代前期の竪穴住居跡などが発見されました。詳細は本報告書の本文以降に譲りますが、本遺跡から発見されたものは当時の生活や文化を知る上で貴重なものとなっています。発掘調査によって得られた資料は、文化財として永く後世に伝えて行かなければならぬものです。本報告書が原始・古代に生きた我々の先人の生活と歴史をときあかすための史料になればと願っております。

最後ですが、遺跡発掘調査並びに報告書作成に関係して、多大なる御理解と御協力を賜った関係諸機関及び関係者の皆様方に深く感謝を申し上げる次第です。

平成10年6月30日

垂崎市遺跡調査会

垂崎市教育委員会

会長 秋山幸一 教育長 口野道男

# 例　　言

- 1 本書は、山梨県韮崎市藤井町坂井字村ノ前692-1番地、藤井町坂井字茅林860-1番地、藤井町駒井字天神前343番地に所在した坂井遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、東京電力株式会社の送電線鉄塔建替工事に伴い行われた。
- 3 遺跡は3カ所に分散していたが、坂井遺跡の埋蔵文化財包蔵地域内であるため坂井遺跡とし、調査区域別に村ノ前地区・茅林地区・天神前地区と小字名を付けた。
- 4 発掘調査は、東京電力株式会社山梨支店から委託を受け韮崎市遺跡調査会が実施した。調査組織は別に示すとおりである。
- 5 本書の執筆は、総説I章・II章3節、各説I章1節、II章1節・2節3)・3節2)3)、III章1節・2節3)・4節古墳時代、おわりにを山下孝司、各説I章2節1)2)・3節1)3)、II章2節1)、III章2節1)・4節縄文時代1)3)を閔間俊明、総説II章1・2節、各説I章2節3)4)・3節2)、II章2節2)、III章2節2)・4節縄文時代2)を秋山圭子が分担して行った。また、各説III章3節はパリノ・サーヴェイに委託分析の報告である。付編については、櫛原功一氏（帝京大学山梨文化財研究所）と秋山圭子が執筆した。
- 6 整理作業及び報告書作成にかかる業務は韮崎市遺跡調査会が実施した。調査担当・調査員以外の整理業務参加者は、阿部由美子・石原ひろみ・岩下雅美・上野理江・小野初美・清水由美子・深沢真知子である。
- 7 炭化材の樹種同定は、パリノ・サーヴェイで行った。
- 8 写真測量は株式会社バスコに委託して行った。
- 9 発掘調査及び報告書作成に当たっては、多くの方々から御指導・御協力・御鞭撻をいただいた。一々御芳名をあげることは避けるが厚く御礼を申し上げる次第である。
- 10 発掘調査、整理によって出土並びに作成された遺物及び資料は、韮崎市教育委員会において保管している。

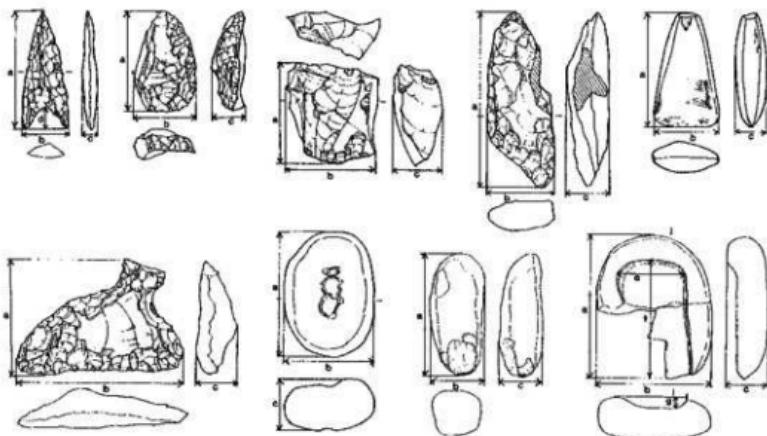
## 調査組織

- 1 調査主体　　韮崎市遺跡調査会
- 2 調査担当　　山下孝司・閔間俊明・秋山圭子（整理）（韮崎市教育委員会社会教育課）  
調査員　　伊藤正彦（試掘）（韮崎市遺跡調査会）
- 3 調査参加者  
岡本嘉一・小沢高恵・小沢千代子・小沢治代・小沢久江・小田切昭子・岡本保枝・志村冴子・五味ゆき子・小沢栄子・乙黒きくゑ・大柴欣子・保坂実香子・守屋敏子・深沢真知子・石原ひろみ・小野初美・上野理江・阿部由美子
- 4 事務局（韮崎市教育委員会社会教育課）  
教育長　口野道男、課長　山本雄次、課長補佐　深沢義文、係長　藤巻明雄、野口文香・水上和樹

## 凡　例

- 1、遺構・遺物の縮尺は原則として各図ごとに示す。
- 2、石器計測の基準は以下に図示した通りである。

a. 長さ	b. 幅	c. 厚さ	d. 挟り長
e. 血部長	f. 血部幅	g. 血部深さ	
- 3、遺物実測図には各図ごとに番号を付した。本文中の番号はこの番号による。なお、各地区の出土石器一覧表中の番号も同様である。
- 4、遺構断面図内に斜線で示した枠は石をあらわす。
- 5、石器実測図の斜線は節理面、網掛け部分は磨り面をあらわす。



# 目 次

序 例	文 言
凡 目	例 次
挿 表	圖 目
写 真	版 目
次	

## [緒 説]

I章 発掘調査の経緯と概要 .....	1
1節 発掘調査にいたる経緯 .....	1
2節 発掘調査の概要 .....	1
II章 遺跡の立地と環境 .....	2
1節 遺跡の立地 .....	2
2節 周辺の遺跡 .....	2
3節 坂井遺跡の沿革 .....	5

## [各 説]

I章 村ノ前地区 .....	7
1節 遺構 .....	7
2節 遺物 .....	16
1) 土坑内出土土器 .....	16
2) 包含層出土土器 .....	26
3) 土坑内出土石器 .....	33
4) 包含層出土石器 .....	34
3節 遺構・遺物の検討 .....	41
1) 遺物の接合関係について .....	41
2) 出土石器について .....	43
3) 坂井遺跡における調査土坑群の位置付け .....	44
II章 茅林地区 .....	45
1節 遺構 .....	45
2節 遺物 .....	47
1) 繩文時代の土器 .....	47
2) 繩文時代の石器 .....	47
3) 弥生時代の土器 .....	47

3 節 遺構・遺物の検討	48
1) 土器について	48
2) 周溝墓について	48
3) 遺跡の景観	48
III章 天神前地区	49
1 節 遺構	49
2 節 遺物	58
1) 縄文時代の土器	58
2) 縄文・古墳時代の石器	63
3) 古墳時代の土器	71
3 節 坂井天神前遺跡から出土した炭化材の樹種	73
4 節 遺構・遺物の検討	78
縄文時代	
1) 2号住居跡について	78
2) 出土石器について	78
3) 志村氏調査区と本調査区の関係	81
古墳時代	
1) 土器出土状況	82
2) 土器について	82
3) 住居形態と遺跡の景観	83
【おわりに】	85
〔付 篇〕	
坂井遺跡における表面採集品について	86

## 写真図版

## 挿 図 目 次

第1図	坂井遺跡と周辺の遺跡及び地形概念図 (1/25000)	3
第2図	調査地区位置図 (1/12500)	4
第3図	村ノ前地区調査位置図 (1/750)	8
第4図	村ノ前地区全体図 (1/100)	8
第5図	1号土坑平面・断面図 (1/40)	10
第6図	2号土坑平面・断面図 (1/20)	10
第7図	3号土坑平面・断面図 (1/20)	10
第8図	4号・5号土坑平面・断面図 (1/20)	11
第9図	6号土坑平面・断面図 (1/20)	12
第10図	7号・8号土坑平面・断面図 (1/20)	12
第11図	9号土坑平面・断面図 (1/20)	13
第12図	10号土坑平面・断面図 (1/20)	13
第13図	11号土坑平面・断面図 (1/20)	14
第14図	12号土坑平面・断面図 (1/20)	14
第15図	13号土坑平面・断面図 (1/20)	15
第16図	14号土坑平面・断面図 (1/20)	15
第17図	1・2・3号土坑出土土器	17
第18図	3・4号土坑出土土器	18
第19図	5号土坑出土土器	19
第20図	6号土坑出土土器	20
第21図	7号土坑出土土器 (1)	21
第22図	7号土坑出土土器 (2)	22
第23図	8号・10号土坑出土土器	24
第24図	10~12号土坑出土土器	25
第25図	12・14号土坑出土土器	28
第26図	包含層出土土器 (1)	29
第27図	包含層出土土器 (2)	30
第28図	包含層出土土器 (3)	31
第29図	包含層出土土器 (4)	32
第30図	グリット別包含層出土土器時期別重量 (1/3)	32
第31図	土坑内出土石器	36
第32図	グリット出土石器 (1)	37

第33図	グリット出土石器（2）	38
第34図	グリット別包含層出土剝片重量	38
第35図	村ノ前地区石器種別出土量	39
第36図	出土遺物接合関係図（遺構1/40, 土器1/8, 石器1/16, 全体図1/80）	42
第37図	坂井遺跡遺構配置図（1/5000）	44
第38図	茅林地区調査位置図（1/500）	45
第39図	1号・2号周溝墓平面・断面図（1/90）	46
第40図	出土縄文土器（1/3）	47
第41図	2号周溝墓出土土器（1/4）	47
第42図	天神前地区調査位置図（1/750）	51
第43図	天神前地区全体図（1/100）	51
第44図	1号住居跡遺物出土状況・1号住居跡平面・断面図（1/60）	52
第45図	2号竪穴住居跡遺物出土状況・土層断面図（1/60）	53
第46図	2号竪穴住居跡平面・断面図（1/60）	54
第47図	集石土坑平面・断面図（1/20）	55
第48図	1号土坑・2号土坑平面・断面図（1/20）	56
第49図	1号溝平面・断面図（1/90）	57
第50図	2号溝平面・断面図, 3号土坑平面・断面図（1/60）	57
第51図	2号住居跡出土土器（1）（1/3）	60
第52図	2号住居跡出土土器（2）（1/3）	61
第53図	2号住居跡出土土器（3）, 1～3号土坑, 包含層出土土器（1/3）	62
第54図	2号住居跡出土石器（1）	66
第55図	2号住居跡出土石器（2）	67
第56図	2号住居跡出土石器（3）	68
第57図	1号住居跡, 1号・2号溝出土石器	69
第58図	1号住居跡出土遺物（1/4）	72
第59図	2号住居跡柱穴配置図（1/60）	79
第60図	2号住居跡遺物出土状況平面図（1/80）	79
第61図	2号住居跡出土遺物垂直分布図（1/40）	80
第62図	志村氏調査区と本調査区の位置（1/10000）	81
付 編		
第1図	坂井遺跡表面採集品の採集地点	86
第2図	坂井遺跡表面採集の尖頭器（原寸）	87
第3図	坂井遺跡と周辺の草創期遺跡	88
第4図	坂井遺跡表面採集の土玉	90

## 表 目 次

- 第1表 坂井遺跡周辺遺跡一覧
- 第2表 村ノ前地区出土石器観察表
- 第3表 天神前地区出土石器観察表
- 第4表 1号住居跡出土土器観察表
- 第5表 樹種同定結果

## 写 真 図 版 目 次

- 図版I 炭化材（1）
- 図版II 炭化材（2）
- 図版1 村ノ前地区発掘風景、1号・2号土坑
- 図版2 村ノ前地区3号・4号・5号土坑
- 図版3 村ノ前地区6号・7号・8号土坑
- 図版4 村ノ前地区10号・11号・12号土坑
- 図版5 村ノ前地区13号・14号土坑、近景
- 図版6 茅林地区発掘風景、近景、周溝墓
- 図版7 天神前地区発掘風景、1号住居跡遺物出土状況、1号住居跡
- 図版8 天神前地区2号住居跡遺物出土状況、2号住居跡石器出土状況、2号住居跡
- 図版9 天神前地区集石土坑、1号・2号・3号土坑、1号・2号溝、遺跡近景
- 図版10 村ノ前地区7号・10号土坑出土土器
- 図版11 村ノ前地区4号・6号・包含層出土土器
- 図版12 天神前地区2号住居跡出土土器（1）～（3）
- 図版13 天神前地区2号住居跡出土土器（4）～（5）、1～3号・集石土坑出土土器
- 図版14 天神前地区2号住居跡出土石器
- 図版15 天神前地区2号・1号住居跡、1号・2号溝出土土器
- 図版16 村ノ前地区出土石器、7号土坑出土石皿
- 図版17 茅林地区2号周溝墓・天神前地区1号住居跡出土土器
- 図版18 坂井遺跡表面採集品 尖頭器 土玉 土玉X線写真

## [総 説]

### I 章 発掘調査の経緯と概要

#### 1節 発掘調査にいたる経緯

平成9年2月に東京電力株式会社山梨支店より送電線（穴山線No22～No33）鉄塔建替工事に関して、韮崎市教育委員会に埋蔵文化財の有無確認依頼が出された。これにより市教育委員会では同年3月に現地踏査と遺跡の有無確認の調査を実施した。その結果を踏まえて、本市教育委員会と会社側で協議を行い、周知の埋蔵文化財包蔵地内にあたるNo31～No33に関して、遺跡名を坂井遺跡、調査主体を韮崎市遺跡調査会として、工事に先立って鉄塔建設予定地3カ所の約350m<sup>2</sup>を対象として発掘調査を行い、記録に留め永く後世に伝えることとした。

#### 2節 発掘調査の概要

発掘調査期間 平成9年10月1日～平成10年1月8日

調査地は畑であり、耕作土を重機によりはがし、ローム土層面で遺構の確認作業を行った。基本的に調査区域はほぼ10m四方の範囲であり、調査区域内を田の字形に分けて南東隅から時計とは逆回りに1・2・3・4とグリッドを設定した。測量には任意に杭を設定したが、全体図は写真測量によって実施した。



遺跡有無確認調査



遺跡有無確認坑土層観察



報告書作成



整理作業



発掘調査

## II章 遺跡の立地と環境

### 1節 遺跡の立地（第1・2図）

坂井遺跡は山梨県韮崎市藤井町に所在する。昭和20年代の志村滝藏氏による調査以来、遺跡は当時の調査地をふくめて周辺に大きく広がる遺物包含地として知られている。今回の調査では、昭和29年の調査の周辺3地区が対象となった。

坂井遺跡のある七里岩台地は、八ヶ岳の山体崩壊とともになう韮崎岩屑流を、釜無川（富士川）と塩川が浸食することによって形成されたものである。七里岩西側を流れる釜無川（富士川）による浸食は激しく、坂井遺跡付近では約70mもの浸食崖を作り出している。また台地東側を流れる塩川は、広大な氾濫原を形成し、藤井平と呼ばれる肥沃な平野を作り出している。台地上には、韮崎岩屑流によって作り出された小円頂丘と凹みが断続的にみられ、湧水地が点在している。坂井遺跡はこの七里岩台地の南西先端部近くに位置する。遺跡西側は約60mほどで七里岩の崖になり、東側はなだらかに低くなり坂井集落にむかっている。

今回の調査対象地区はこの広大な遺跡内に点在し、それぞれ藤井町坂井字村ノ前地内、藤井町坂井字茅林地内、藤井町駒井字天神前地内に所在する。

村ノ前地区は、昭和20年代の調査における第一地点と同じ小円頂丘の、東向きの緩やかな傾斜地に立地する。標高約450m。第一地点の東側に位置し、本地区の東側から浅い谷頭になっている。また茅林地区は、村ノ前地区的北側にある小円頂丘の、微高地から谷に向かう南側の緩やかな傾斜地に立地する。標高は約452m。村ノ前地区的小円頂丘と茅林地区の小円頂丘は、東へ開ける谷をはさんで連続している。この浅い谷には、以前志村滝藏氏によって発見された湧水地がある（志村1965）。そこは現在も竹林のままになっており、志村滝藏氏の発見当時の風景をしのばせている。この2地区は、なだらかな地形で周囲に日光をさえぎるもののが全くななく、湧水が隣接する好条件の立地であるといえよう。

いっぽう天神前地区は、茅林地区的さらに北側で、広くやや深めの谷をはさんで高くせりあがった円頂丘の北側傾斜地に立地する。標高は約451m。この円頂丘の北側は急激に低くなってしまい、天神前地区は北側に向いた微高地の際にあることになる。しかし、遺跡北側の谷部には湧水地があったらしく、現在も細い水路が流れている。このことから天神前地区の立地は、日照を重視した東側や南側への占地志向よりも、むしろ湧水を意識した占地がなされた結果である可能性が指摘されよう。志村滝藏氏調査の天神前地区は、湧水の北東側にあたり、湧水から北へは、新府城跡に向かってゆるやかに上っている。

### 2節 周辺の遺跡（第1図・第1表）



第1図 坂井遺跡と周辺の遺跡及び地形概念図 (1/25000)

No.	遺跡名	時代区分	備考
①	坂井	縄文・古墳・平安	志村庵藏『坂井』 地方書院 昭和40年
②	坂井南	弥生・古墳・平安・中世	昭和57・58・60、平成6年度 茂崎市教育委員会調査 平成4・5・7年度 茂崎市遺跡調査会調査
③	山影	縄文	平成5年度 茂崎市遺跡調査会調査
④	北下条	弥生後期・奈良・平安	昭和57年度 茂崎市教育委員会調査
⑤	下横屋	弥生・奈良・平安	平成元年度 茂崎市遺跡調査会調査
⑥	枇杷塚	古墳	平成7年度 茂崎市遺跡調査会調査
⑦	後田第2	縄文・弥生・古墳・平安	平成7年度 茂崎市遺跡調査会調査
⑧	後田堂ノ前	弥生後期～平安	平成9年度 茂崎市遺跡調査会調査
⑨	坂井堂ノ前	弥生・古墳・奈良	平成8年度 茂崎市遺跡調査会調査
⑩	三宮	縄文・平安	平成8年度 茂崎市遺跡調査会調査
⑪	火雨塚古墳	古墳後期	
⑫	堂ノ前	弥生・平安	昭和60年度 茂崎市教育委員会調査
⑬	後田	縄文・古墳・奈良・平安	昭和63年度 茂崎市教育委員会調査
⑭	北後田	縄文・奈良・平安	平成元年度 茂崎市教育委員会調査
⑮	宮ノ前	縄文・弥生・奈良・平安	平成元～2年度 茂崎市遺跡調査会調査
⑯	宮ノ前第2	奈良・平安・中世	平成2年度 茂崎市教育委員会調査
⑰	宮ノ前第3	奈良・平安	平成4年度 茂崎市遺跡調査会調査
⑱	宮ノ前第4	奈良・平安	平成6年度 茂崎市遺跡調査会調査
⑲	宮ノ前第5	縄文・奈良・平安	平成9年度 茂崎市遺跡調査会調査
⑳	駒井	奈良・平安	昭和60年度 山梨県埋蔵文化財センター調査
㉑	立石	弥生・古墳・平安	平成5年度 茂崎市教育委員会調査
㉒	金山	中世～近世	昭和60年度 茂崎市教育委員会調査
㉓	前田	平安	昭和62年度 茂崎市教育委員会調査
㉔	中田小学校	縄文・弥生・奈良・平安	昭和59年度 茂崎市教育委員会調査
㉕	新府城跡	中世	国指定史跡

第1表 坂井遺跡周辺遺跡一覧



第2図 調査地区位置図 (1/12500)

### 3節 坂井遺跡の沿革

全国的に著名な坂井遺跡は、石器や土器に興味を持ち戦前から戦後にかけて畠から出土する遺物を収集し、やがて自ら調査を行うまでになった考古学者志村淹蔵によって発掘された遺跡である。坂井遺跡の発見は淹蔵によれば「この坂井に於て、先史遺物発掘の端緒は、明治十二年、道路工事の際に、アイヌ式土偶を發見せるに依る。」と記している（「七里岩南部の先史遺跡及遺物に就いて」『武藏野』18-3 1932）とおり、明治時代の前半、今から一世紀以上も前のことであるけれども、本遺跡が世間に知られるようになり、考古学の歴史に名を残すようにまでなったのは個人的な業績に負うところが多大であり、坂井遺跡発掘の歴史はそのまま淹蔵の考古学研究の歩みでもある。現在のように開発にともなう緊急的遺跡発掘調査が隆盛を極める以前にあって、淹蔵は県内考古学の曙に活躍した先駆者のひとりであった。

志村淹蔵は明治34年（1901）北巨摩郡駒井村（現在韮崎市藤井町坂井780番地）に父八百歳、母りんの次男として生まれた。大正2年（1913）藤井尋常高等小学校5年生のとき歴史の時間に先生から石器時代の話と石器を見せてもらったことにより考古学に興味を抱く。12才の淹蔵は、畠仕事に際して石器をみつけたり土器を集めるという今で言う考古学少年のはしりであった。大正7年には炉石を同8年には自宅裏手において縄文土器を掘り上げる。このようななか大正10年には長野県から遺跡・遺物調査の帰路に考古学者八幡一郎が志村家に立ち寄り、考古学に関する最新情報や学問的刺激を淹蔵にもたらすこととなった。さらに八幡の師でもある考古学・人類学の権威であった鳥居龍蔵博士の指導を受け、良き指導者を得て淹蔵は益々研究に熱を入れるようになる。

いよいよ考古学への探求心を深める淹蔵ではあったが、この間長兄の死により家の農業経営をまかされることになり、大正12年頃から耕作地の改良を企て、同14年から老朽桑畑の天地返しを行う。1年間で五畝（5アール）を行い20年間で一町歩（100アール）の改植を計画したが、仕事に励み努力した結果、昭和2年（1927）に終了した。この一大事業は「百姓らしい百姓になろうと決意した」淹蔵の意志の強さ勤勉さを物語るものであるが、彼にはもうひとつ別にもくろみがあった。「この私の農業精勤は同時に私の研究と両立して行われたことは興味深い、即ちこの副産物として土偶、高台土器、石器、埴跡、土器製作の台石、土器の原料などを多数発見することを得たのである」（志村淹蔵「坂井遺跡と私」『郷土研究』第1号 1948年）と明記しているように、畠を深掘りすれば必ず遺物を掘り当てることができるとの見通しがあったのであり、仕事と研究を両立させた一挙両得の方策であった。

淹蔵は昭和4年には「七里岩の上から」（『武藏野』14-1）、同7年には「七里岩南部の先史遺跡及遺物に就いて」（『武藏野』18-3）を発表し、坂井遺跡は中央の学会に知られることになる。昭和初期には坂井遺跡以外にも北巨摩郡内で遺跡の発見と報告が相繼ぎ、同じ頃北巨摩郡教育会郷土研究部会は先史時代研究を開始しており、これまでに発見され蓄積された遺跡や遺物の成果を昭和7年に『先史原始古代調査』にまとめあげた。地域研究が盛んとなるなか、淹蔵

との縁で島居が北巨摩郡教育会の招きにより、北巨摩の地で講演をしたのもこの年であり、島居の来峠は北巨摩のみならず山梨の考古学会に大きな影響を与えた。

しかし、北巨摩郡内の考古学の盛況さとは裏腹に、政治が軍国主義へと強まっていくなか、天皇家の由来に触れるような考古学研究や活動は次第に制限され、日本は昭和16年12月第2次世界大戦へ突入する。坂井遺跡の調査も一時空白の時代をむかえる。

昭和20年（1945）の日本敗戦とともに、遺物・遺構という目に見える形で古代の歴史を復元できる考古学は歴史学のなかに重要な位置を占めるようになる。昭和23年1月6日から、滝藏はジャワ島から復員した長男富三とともに発掘にとりかかった。土器や炉跡を次々と掘り当て、昭和25年には県の補助金を受け遺物の保存・展示を行う坂井考古館が完成。同じ年の3月には竪穴住居の完掘がなされ、郷土研究や学校教育の場として活用され、坂井遺跡は活況を呈する。昭和31年3月8日滝藏は畑の耕作中に炉石と土器片を発見した。早速、当時東京大学講師となっていた八幡一郎に発掘調査を依頼し、国学院大学の考古部員6人が発掘に来ることになった。3月28日から炉石を中心にトレーナーを設定し掘り下げ壁の検出と柱穴の発見を行った。住居跡は円形で直径5m60cm程の大きさであった。4月3日には実測と写真撮影を終了した。4月25日には八幡が遺跡に訪れ出土遺物と住居跡を視察し、縄文時代中期加曾利E式期と年代決定している。この発掘をひとつの区切りとして、その後は坂井遺跡の本格的な発掘は行われなくなる。滝藏は遺跡発掘に対する業績が認められて、昭和35年には国から文化財保護功労者、昭和37年には県教育功労者の表彰を受け、昭和40年には報告書『坂井』を刊行する。およそ170ページにわたるこの本は自費で印刷されたが、発掘の経過や遺構・遺物の詳細な観察、土偶や土器などのレントゲン写真を載せるなど、高度で当時としては最先端の技術が駆使され内容の濃いものとなっている。

滝藏は昭和46年4月3日その生涯を閉じた。享年70歳であった。

坂井遺跡における発掘調査は戦前から昭和31年にかけて5回ほど実施され、22箇所の縄文時代中期竪穴住居跡や炉跡などが発見されている。住居跡は直径5メートルあまりの大きさで、平面形態は円形・隅円方形を呈し、内部には石囲炉が構築され壁際に柱穴がめぐっている。出土した遺物は、縄文時代中期初頭の五領ケ台式土器から後半の曾利式の深鉢形土器・浅鉢形土器・器台・吊手土器などをはじめ、土偶・土鉢・耳飾り・土製円盤・有孔土製円盤といった土製品も数多く収集され、打製石斧・磨製石斧・石礫・磨石・石匙・石皿・蜂巣石・石棒・石錐などの石器・石製品もみられる。このほか弥生土器や古墳時代前期の壺・台付甕・甑・高坏・器台等が採集されている。

現在、出土した遺物は志村家の屋敷地内に建てられた坂井考古館に収蔵展示され、発掘調査された竪穴住居跡のうちのひとつは竪穴のまま復元されており、滝藏の遺志を継いだ長男富三氏により坂井遺跡は守られている。

## [各 説]

### I 章 村ノ前地区

#### 1節 遺構

調査区域は約13m四方の正方形の範囲であり、約8m四方で内側に既存の送電線鉄塔を囲い込んでいる。土坑が14基発見された。本地区は畑であり良く耕したらしく耕作土が深く、結果として遺跡は搅乱を受けることになり、土器片が散乱していた。

#### <1号土坑> (第5図)

3グリッド中央北寄りに位置する。当初径80cm前後の暗褐色土の円形の落ち込みを確認し掘り下げた。暗黄褐色土がまわりに広がり、確認面からの深さ55cmで、長径1m60cm、短径1m35cmの楕円形を呈した穴となった。断面観察では直径75cm確認面からの深さ55cmの土坑が中心にある。

#### <2号土坑> (第6図)

3グリッド西端に位置する。規模は直径90cm~1mで、平面形は不整円形を呈する。底面はドンブリ状で、壁は外傾しながら立ち上がり、確認面からの深さ48cm。土器片は底面から若干浮いて出土している。

#### <3号土坑> (第7図)

3グリッド西端に位置する。規模は長径1m35cm、短径1m20cmで、平面形は楕円形を呈する。底面は東側が若干凹む。壁は直立気味に立ち上がり、確認面からの深さ30cm。土器片等は中位から出土している。

#### <4号土坑> (第8図)

3グリッド北西側に位置する。規模は直径90cm前後で、平面形は不整円形を呈する。底面は平坦で、底面からやや内湾しながら壁となり、壁は外傾しながら立ち上がり、確認面からの深さ43cm。南側には5号土坑があり、遺構のプランが不鮮明であったため、掘り下げの段階でつなげて掘ってしまい、土層断面において壁の立ち上がりを確認した。凹み石や土器の把手、完型に近い小型の深鉢などが中位以上から出土している。

#### <5号土坑> (第8図)

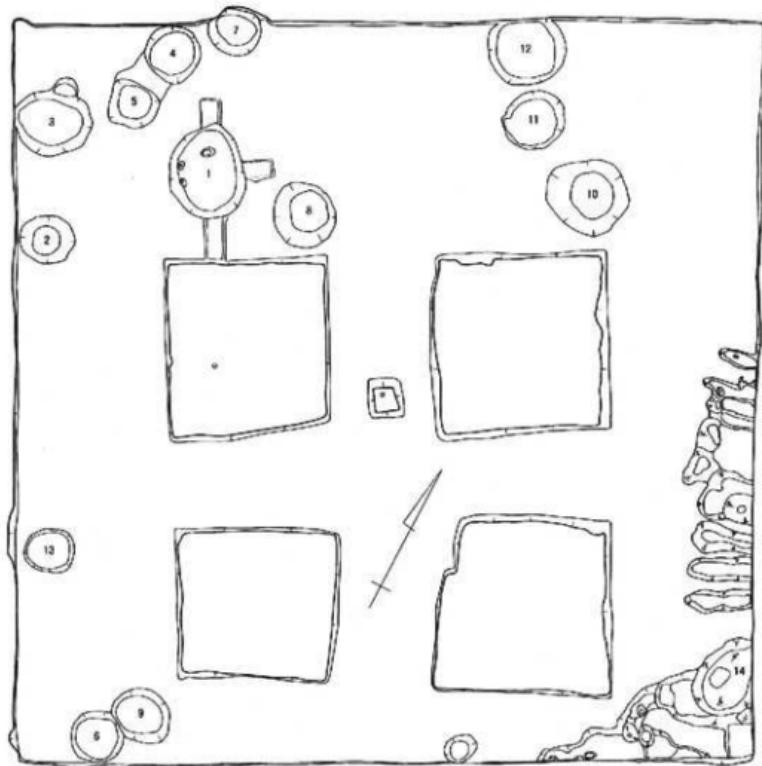
3グリッド北西側に位置し、北側には4号土坑がある。規模は直径約97cmで、平面形は円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾しながら立ち上がり、確認面からの深さ42cm。土器片や凹み石が壁際の中位から出土している。

#### <6号土坑> (第9図)

4グリッド南端に位置する。規模は東西95cm、南北85cmで、平面形は不整な楕円形を呈する。底面は平坦で、壁は直立気味~若干外傾しながら立ち上がり、確認面からの深さ22cm。横位に近いかたちで大型の深鉢型土器が出土している。



第3図 村ノ前地区調査位置図 (1/750)



第4図 村ノ前地区全体図 (1/100)

#### <7号土坑> (第10図)

3グリッド北端に位置する。規模は直径90cm前後で、平面形は不整の円形を呈する。底面はドンブリ状で、壁は少し内湾しながら立ち上がり、確認面からの深さ30cm前後。本土坑には多量の土器片や石皿破片・石が入れ込まれており、出土位置は底面よりも浮いた状態で中位に集中していた。

#### <8号土坑> (第10図)

3グリッド中央東側に位置する。規模は直径1m10cm前後で、平面形は不整円形を呈する。底面は平坦ではなくやや凸凹している。壁は直立気味～若干外傾しながら立ち上がり、確認面からの深さ75cm前後。

#### <9号土坑> (第11図)

4グリッド南端に位置する。規模は直径90cm～1mで、平面形不整の円形を呈する。底面は平坦であるが小穴がみられる。壁は外傾しながら立ち上がり、確認面からの深さ30cm前後。時期の特定できる遺物は出土しなかった。

#### <10号土坑> (第12図)

2グリッド中央北側に位置する。規模は長径1m50cm、短径1m30cmで、平面形は楕円形を呈する。底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がり、確認面からの深さ40cm。土器片は確認面よりも上で出土している。

#### <11号土坑> (第13図)

2グリッド北西側に位置する。直径1mの規模で、平面形は円形。底面はほぼ平坦で、壁は若干外傾しながら立ち上がり、確認面からの深さ20cm。底面から10cm程浮いて土器片が出土している。

#### <12号土坑> (第14図)

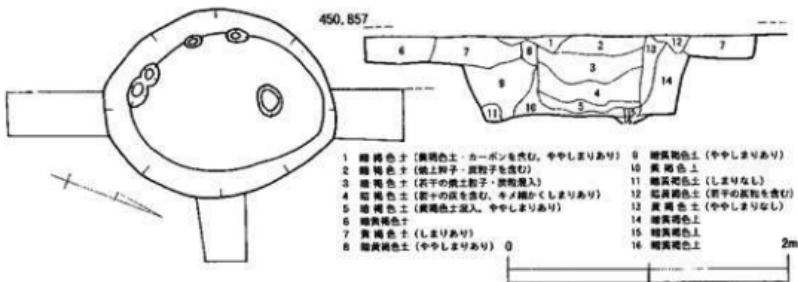
2グリッド北西端に位置する。長さ1m35cmの規模で、平面形は不整円形を呈すると思われる。底面はほぼ平坦で、壁は少し内湾しながら立ち上がり、確認面からの深さ25cm前後。中位で土器片が出土している。

#### <13号土坑> (第15図)

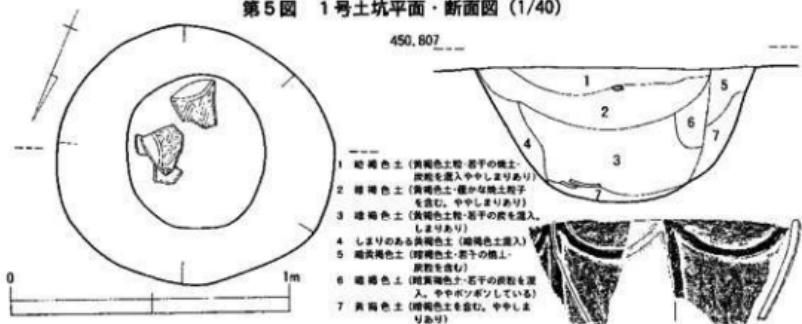
4グリッド西端に位置する。規模は長径88cm、短径76cmで、平面形は不整楕円形を呈する。底面は平坦で、壁はやや外傾しながら立ち上がり、確認面からの深さは20cm。遺物は出土していない。

#### <14号土坑> (第16図)

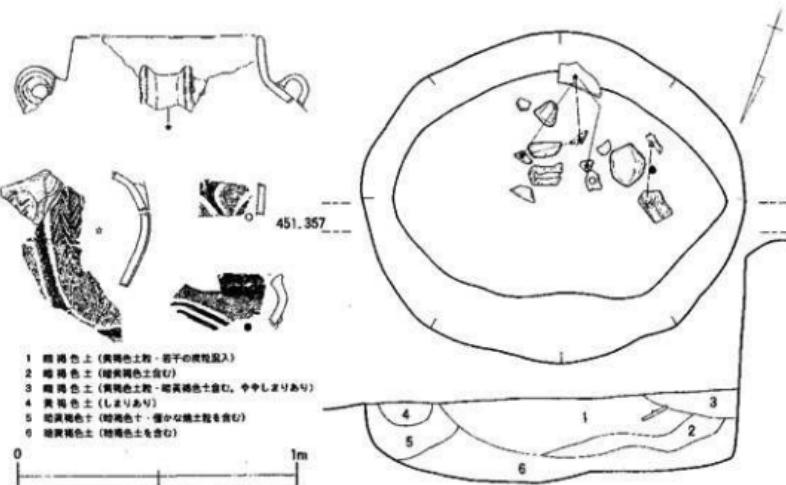
1グリッド東端に位置する。規模は直径1m前後で、円形の平面形を呈すると思われるが、東側に別の掘り込みがありその部分は不明瞭であった。底面は凹んでおり、確認面からの深さは80cmで、断面U字形の穴となっている。中位に土器片が出土している。



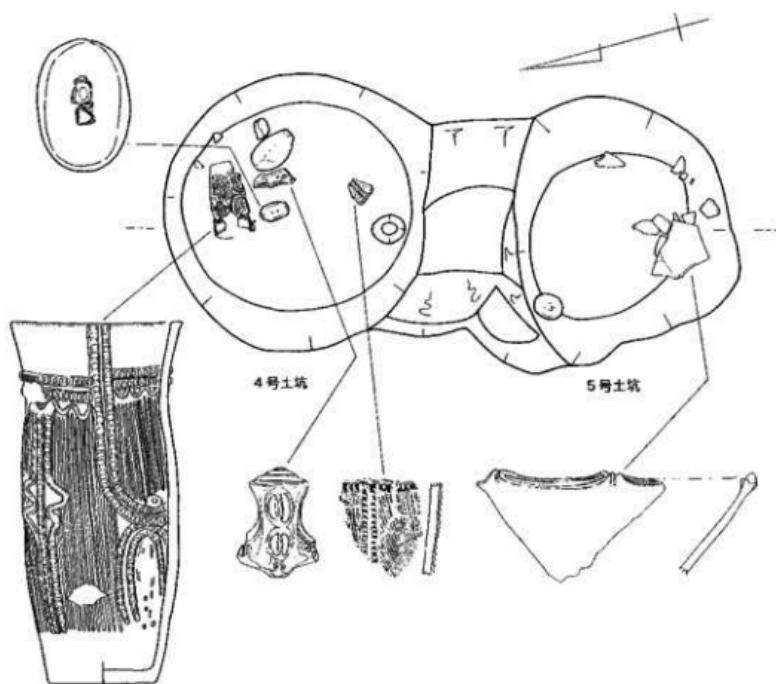
第5図 1号土坑平面・断面図 (1/40)



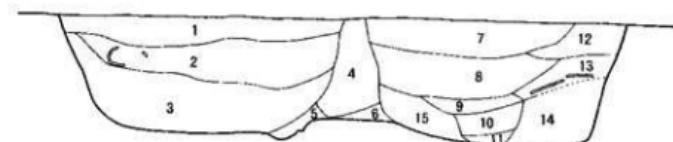
第6図 2号土坑平面・断面図 (1/20)



第7図 3号土坑平面・断面図 (1/20)



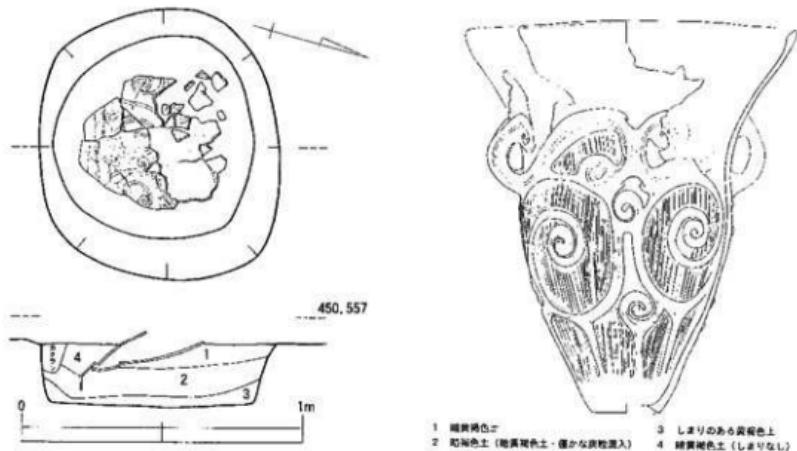
450.857



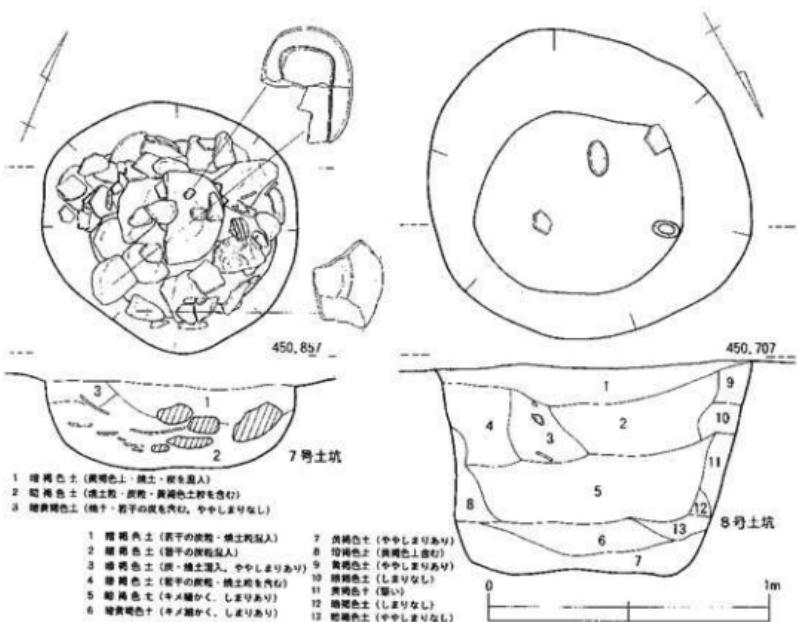
- |                             |                                 |
|-----------------------------|---------------------------------|
| 1 黄褐色土 (若干の燒土質・灰粒を含む)       | 9 細青色土 (若干の燒土質を含む。キメ細かい)        |
| 2 細青色土 (若干の灰粒・僅かな燒土質を含む)    | 10 粗褐色土 (燒褐色土質を含む。ザラついた土質)      |
| 3 烧褐色土 (若干の灰粒・黄褐色土・小石粒を含む)  | 11 黄褐色土 (高色灰子土を含む。しまりあり)        |
| 4 烧褐色土 (燒褐色土質・僅かな燒土質・灰粒を含む) | 12 細青褐色土 (燒褐色土・灰を混入)            |
| 5 黄褐色土 (しまりあり)              | 13 粗青褐色土 (しまりあり)                |
| 6 黄褐色土 (ややしまりあり)            | 14 細青褐色土 (細青色土・若干の灰を混入。ややしまりあり) |
| 7 烧褐色土 (燒褐色土質・燒土質・灰粒を僅かに含む) | 15 黄褐色土                         |
| 8 細青褐色土 (細青褐色土を混入)          |                                 |



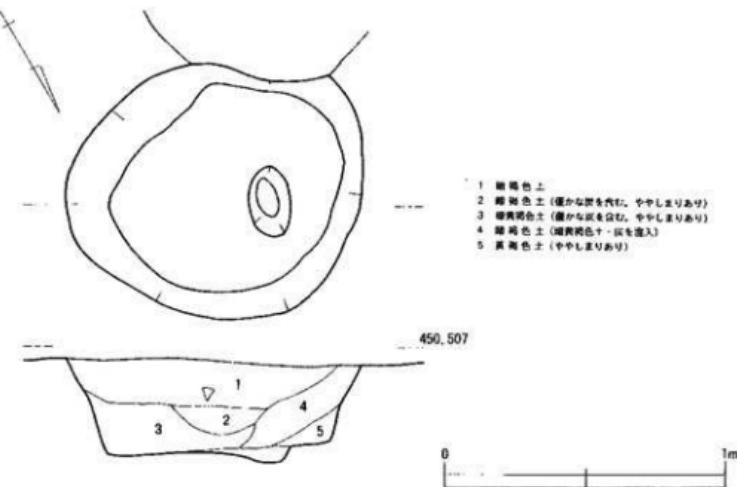
第8図 4号・5号土坑平面・断面図 (1/20)



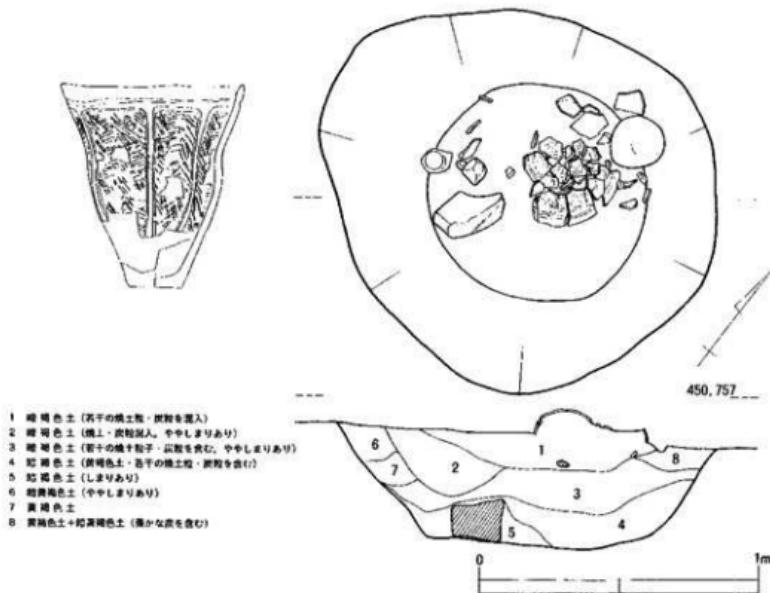
第9図 6号土坑平面・断面図 (1/20)



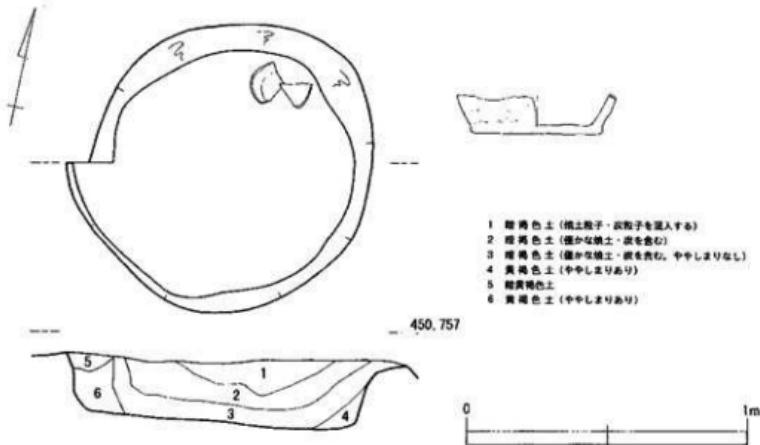
第10図 7号・8号土坑平面・断面図 (1/20)



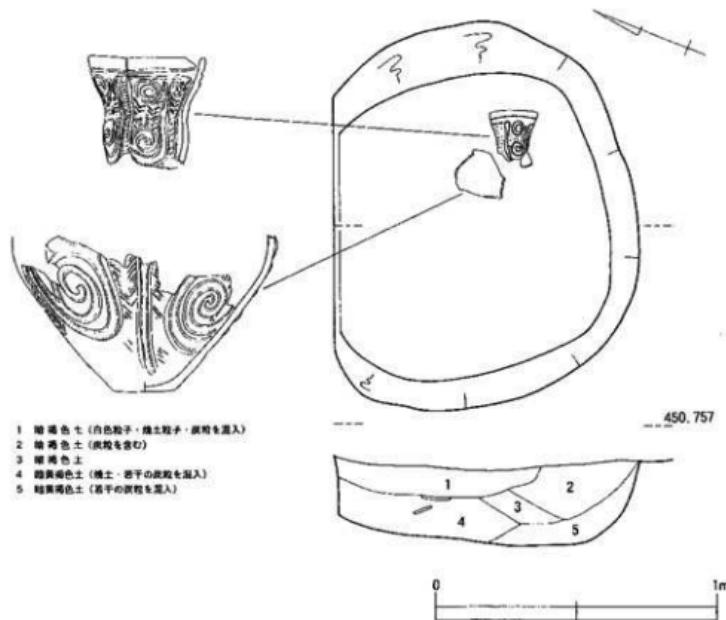
第11図 9号土坑平面・断面図 (1/20)



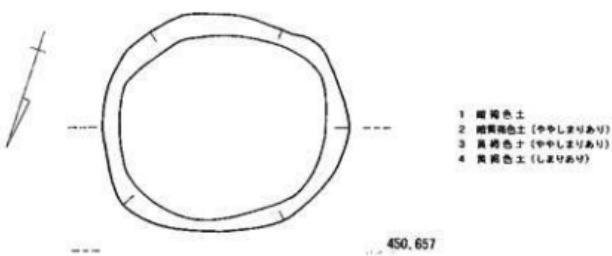
第12図 10号土坑平面・断面図 (1/20)



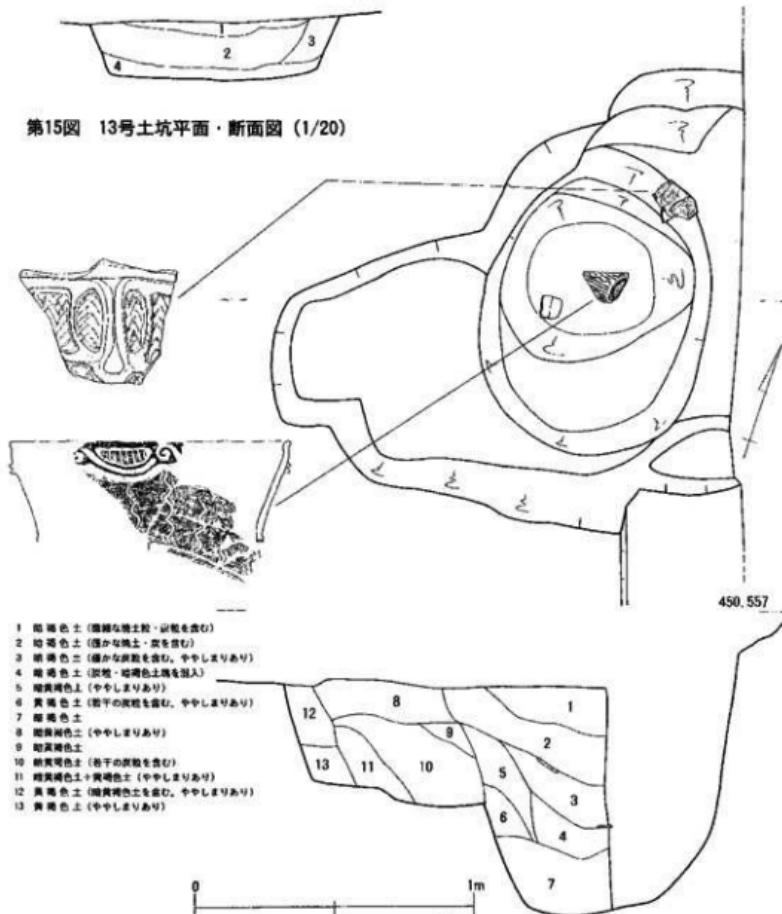
第13図 11号土坑平面・断面図 (1/20)



第14図 12号土坑平面・断面図 (1/20)



第15図 13号土坑平面・断面図 (1/20)



第16図 14号土坑平面・断面図 (1/20)

## 2節 遺物

### 1) 土坑内出土土器

#### <1号土坑> (第17図1・2)

土坑覆土内より数点の土器が出土している。1は櫛齒状工具による条線文の施文された胴部片である(40g)。2は単節RL繩文が横位回転施文され、内面が赤彩される胴部片である(40g)。図示していないが、おそらく中期であろう無文の土器片が4g出土している。

#### <2号土坑> (第17図3~6)

土坑底面から3が出土している。口縁部に低隆線により4単位の弧状文が施文され、張状文の接点から垂下直状隆線が施文されている(640g)。胴部には、ヘラ状工具によりやや長いハの字文が施文されている。4は櫛齒状工具による雨垂列点ハの字文が施文されている胴部片である(190g)。5は低隆線による渦巻文及び地文に櫛齒状工具による条線文の施文された胴部片である(40g)。6はおそらく1と同一固体であろう(40g)。その他に曾利式前半の土器が20g、曾利式後半の土器が60g出土している。

#### <3号土坑> (第17図7~10、18図1)

覆土中出土の破片資料を中心である。7は口縁部に隆線による文様を、地文に撓糸1の施文されたものである(150g)。8は地文に単節RL繩文の施文されたものである(110g)。9、10は胴部に渦巻文の施文されたものである。9は地文に半截竹管による条線文(60g)、10はハの字状文が施文されている(300g)。第18図1は両耳壺である(460g)。以上3点は曾利式後半である。その他に勝坂式後半の土器が620g、曾利式後半の土器が310g出土している。

#### <4号土坑> (第18図2~5)

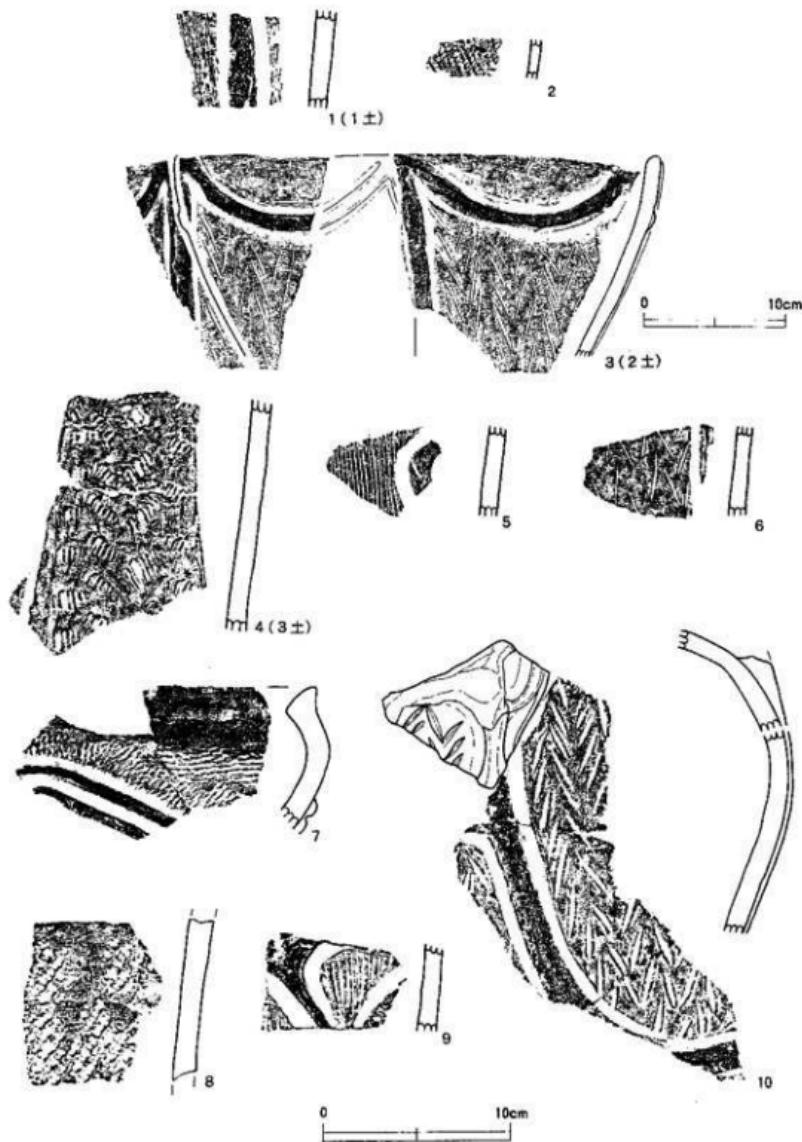
2は土坑覆土下層上面から出土した円筒形深鉢形土器である。胴部には刻みのある隆線によりいわゆる人体文を、地文に半截竹管1本単位の条線文が施文されている。土器表面は被熱によるものと考えられるあばた状の剥落が顕著である(870g)。3(50g)・5(220g)は土坑覆土下層中から出土したものである。4の把手は先端部が渦巻状になっている(540g)。その他に勝坂式後半から曾利式前半の土器が90g出土している。

#### <5号土坑> (第19図1~2)

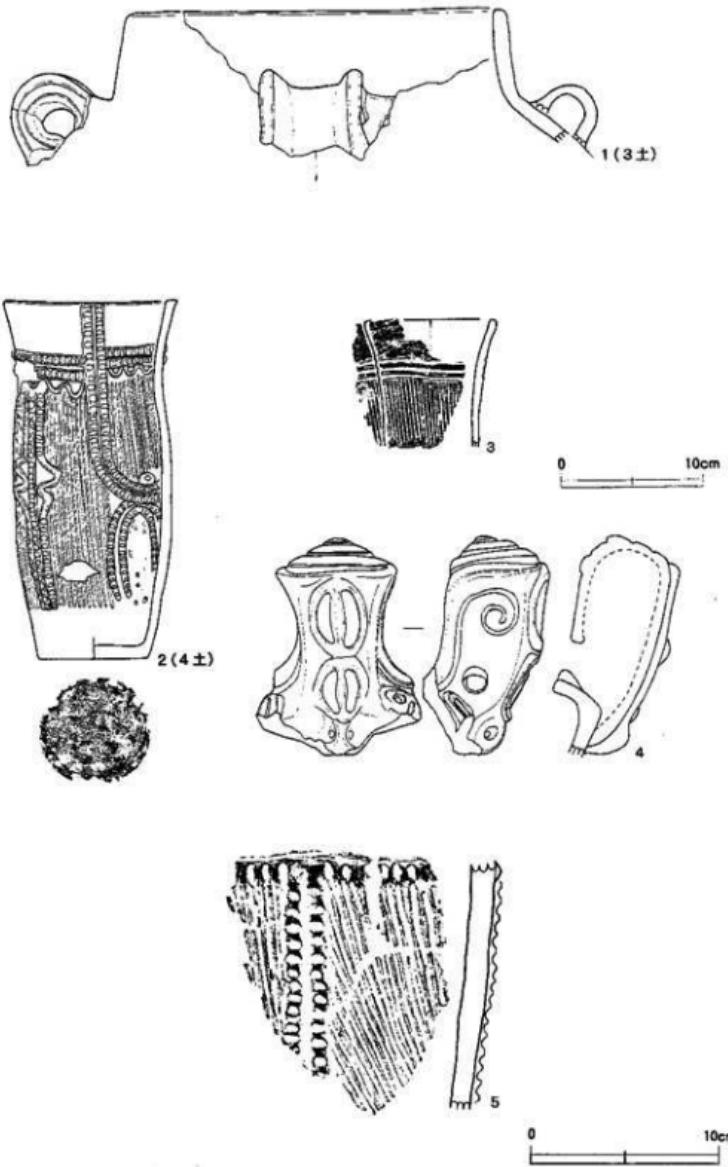
1は口縁部が無文で胴部に条線文の施文されるものである(40g)。2は土坑覆土中層から出土したものである。5単位の波状口縁となる浅鉢形土器である(1020g)。その他に曾利式前半の土器が90g出土している。

#### <6号土坑> (第20図1~4)

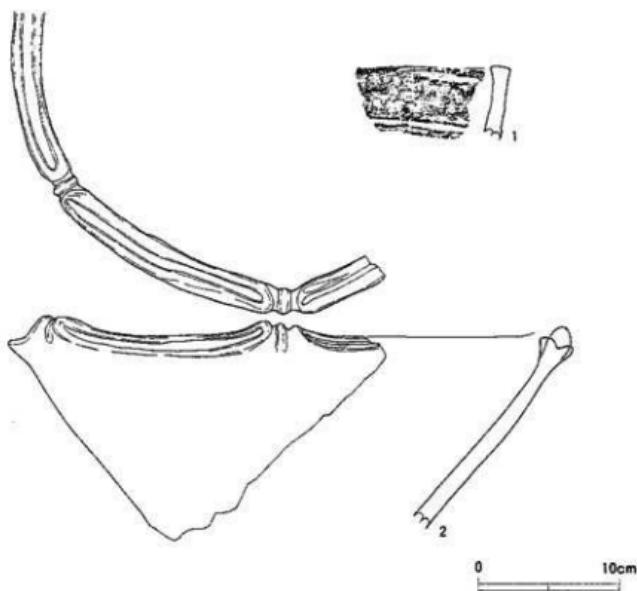
1は土坑内に横位に埋設されたと考えられるX字状把手付深鉢形土器である。1本隆線による渦巻文が、地文に櫛齒状工具による条線文が施文されている(6100g)。2はおそらく渦巻つなぎ張文の施文された口縁部であろう(60g)。3は地文に刺突文の施文されたものである(10g)。4は1本隆線による渦巻文の施文された胴部である。半截竹管による2条単位の条線文が施文されている(160g)。その他に曾利式前半の土器が10g、後半の土器が10g出土している。



第17図 1・2・3号土坑出土土器 (1・2・4~10 1/3, 3 1/4)



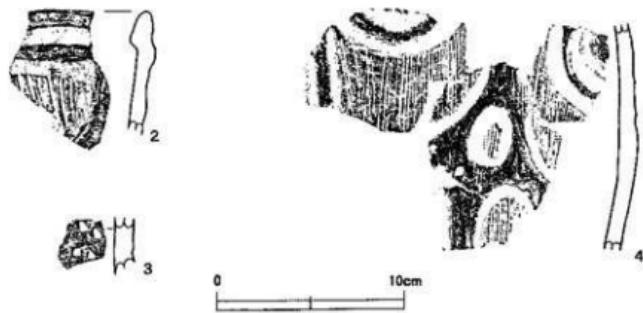
第18図 3・4号土坑出土土器 (1~4 1/4, 5 1/3)



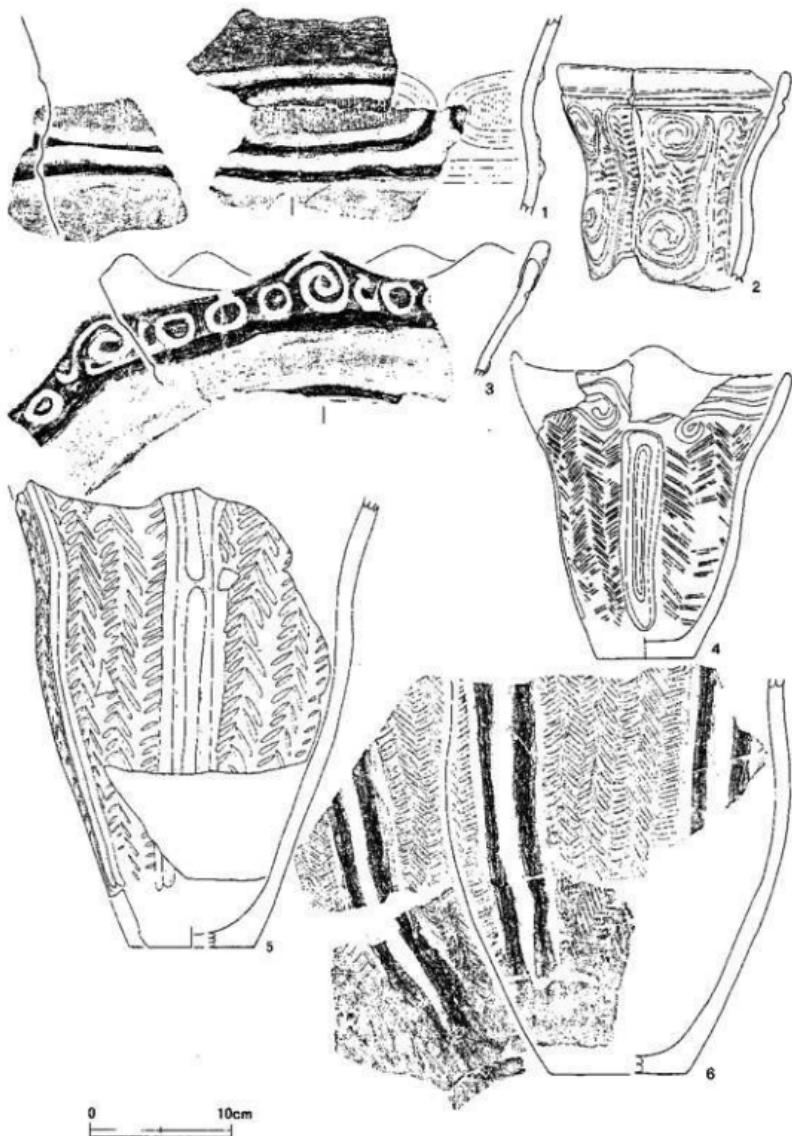
第19図 5号土坑出土土器 (1/4)

<7号土坑> (第21・22図)

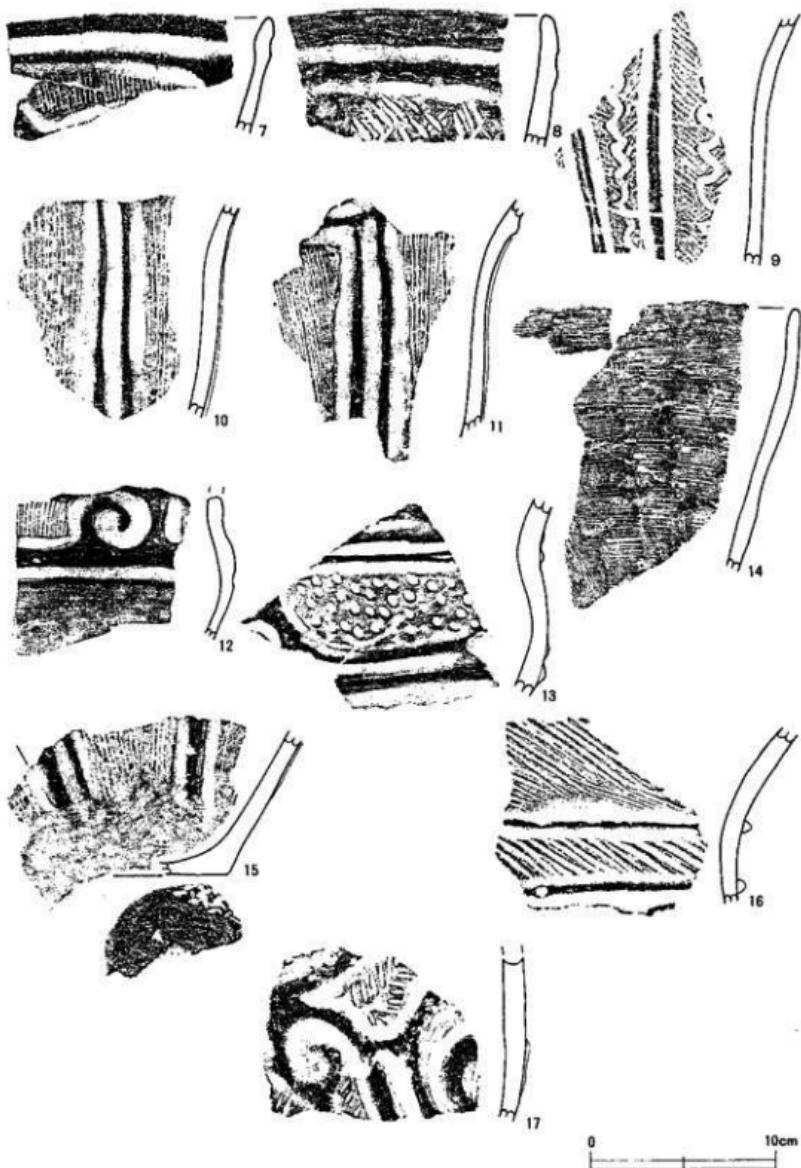
1・12・13は把手付鉢形土器の破片である。1(500g)・13(180g)は下層から出土したものである。2は下～上層にかけて出土し、12号土坑のほぼ底面から出土したやや大型の破片と接合関係にある。沈線により縦長区画及び渦巻文が、地文にヘラ状工具によるハの字状文が施文されている(580g)。3は上層から出土したものである。肥厚底口縁であるが扁平化が進んでいる(430g)。4は底面を中心出土したものである。沈線による長楕円の区画文が、地文に櫛齒状工具による綾杉状文が施文されている(860g)。5・6・8(140g)は隆線により縦長区画が、地文にヘラ状工具によるハの字状文が施文されている。5は下層を中心出土したものである(1700g)。6は土坑内に散逸して出土したものである(1930g)。7は加曾利式的な口縁部文様が、地文に櫛齒状工具による条線文が施文されている(70g)。9は上層から出土したものである。胴部を隆線により区画し、区画内に櫛齒状工具による綾杉文を施文後に蛇行懸垂沈線文が施文されている(100g)。10(120g)・11(120g)・15(200g)は隆線により縦長区画が、地文に櫛齒状工具による条線文が施文されている。15には1本越え、1本潜り、1本送りの網代痕が認められる。11・15は下層から出土したものである。14は櫛齒状工具により横位に条線文が施文されている(150g)。16は下層から出土したものである。口縁部及び頸部に斜行沈線文が施文されている(150g)。17は胴



第20図 6号土坑出土土器 (1 1/4, 2~4 1/3)



第21図 7号土坑出土土器 (1) (1/4)



第22図 7号土坑出土土器 (2) (1/3)

部に大型渦巻文の施文される大型深鉢形土器であり、地文にヘラ状工具によるハの字状文が施文されている(180g)。その他に勝坂式後半の土器が40g、曾利式前半の土器が50g、曾利式後半の土器が300g出土している。

#### <8号土坑> (第23図1~14)

1 (60g)は肥厚帶口縁であり、胴部に櫛齒状工具による条線文が施文されている。2 (60g)・7 (130g)・8 (100g)は地文に櫛齒状工具による綾杉文を施文後に垂下波状沈線文の施文されたものである。3 (30g)・4 (30g)・5 (60g)・6 (40g)は地文に櫛齒状工具による条線文の施文されたものである。9は口縁部に沈線による渦巻文及び長椭円文が、胴部に地文としてヘラ状工具によるハの字状文が施文されている(280g)。その他に勝坂式の土器が800g、曾利式後半の土器が1900g出土している。10(40g)・11(40g)・13(20g)はヘラ状工具によりハの字状文が施文されている。12は竹管状工具により兩垂れ文が施文されている(10g)。14は刻みのある隆線による区画文内に棒状工具による兩垂れ状の刺突文が施文されている(170g)。

#### <9号土坑>

勝坂式と考えられる土器が20g出土している。

#### <10号土坑> (第23図15~17、第24図1~3)

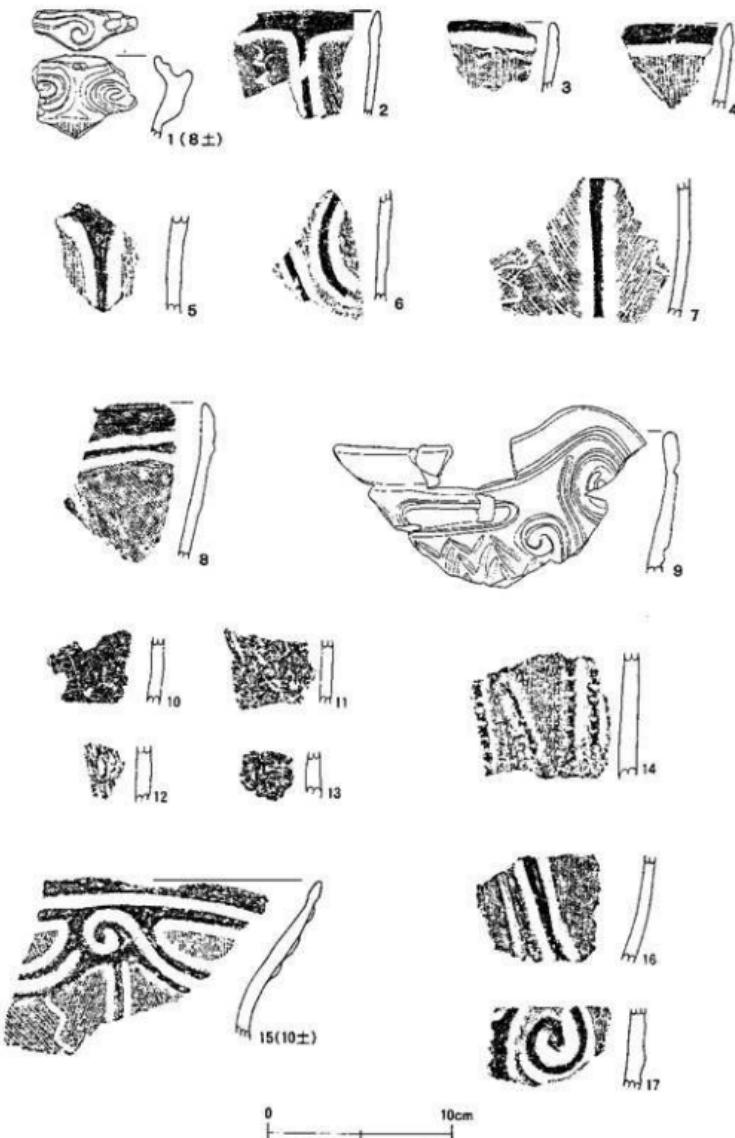
第24図1は土坑確認面で出土したものである。口縁部の一部が7号土坑の底面近くから出土し、接合している。隆線により縱長区画施文後にやや浅い沈線によりハの字状文の施文されたものである(2000g)。第23図15は口縁部に渦巻つなぎ彌文、胴部に垂下直状隆線の施文されたものである。地文には櫛齒状工具による綾杉状文が施文されている(280g)。16(80g)・17(80g)は地文に櫛齒状工具による条線文の施文された、胴部に渦巻文の施文されたものである。第24図2は、口縁部に1条の横走する沈線の施文された浅鉢形土器である(200g)。3は土器片製円盤である(30g)。その他に勝坂式土器が280g、曾利式前半の土器が390g、曾利式後半の土器が2440g出土している。

#### <11号土坑> (第24図4)

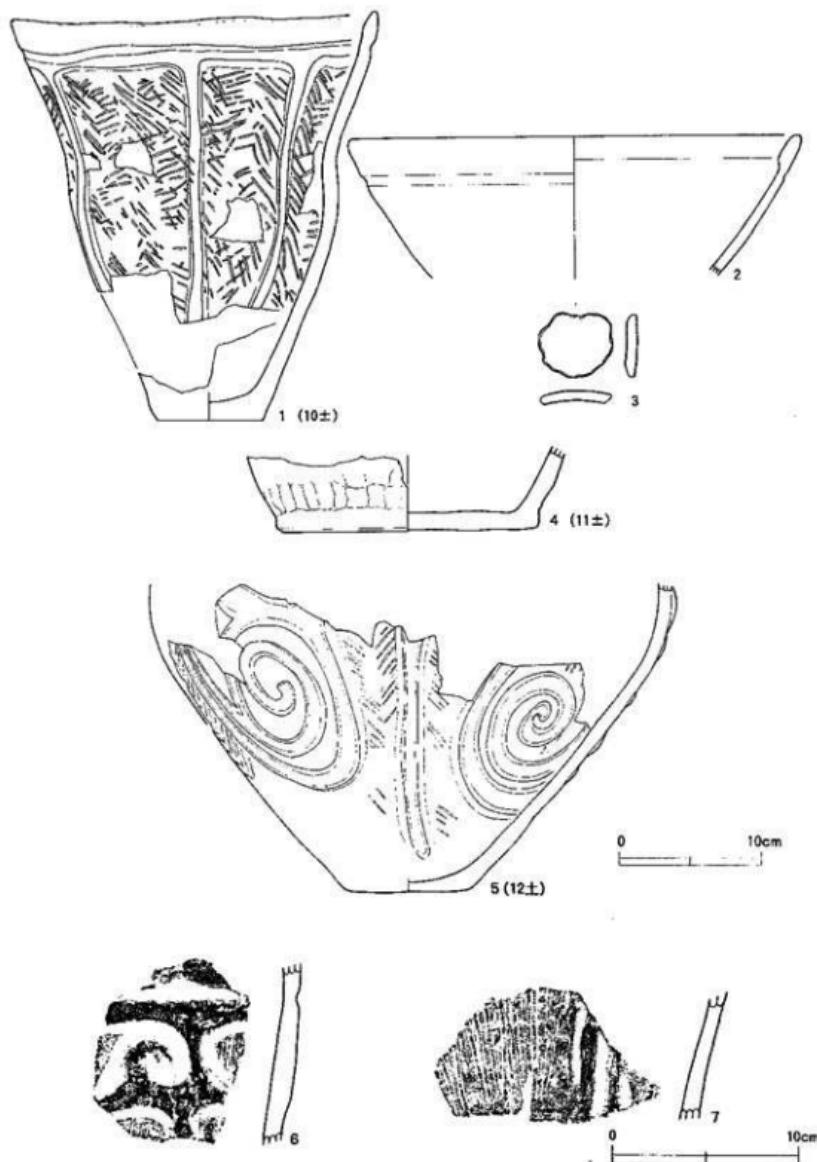
土坑壁際の底面近くから出土したものである。指頭圧痕文が明瞭であり、胎土に金色雲母が大量に含まれている(580g)。その他に勝坂式後半の土器が130g、曾利式後半の土器が70g出土している。

#### <12号土坑> (第24図5~7、第25図1~5)

第24図5は1本隆線により大型渦巻文が、地文に櫛齒状工具による綾杉状文が施文されたものである(1360g)。6 (100g)・7 (80g)は地文に櫛齒状工具により条線文が施文されたものである。第25図1 (50g)・2 (30g)は単節RL繩文施文後に垂下波状沈線文の施文されたものである。3は口縁部に平行沈線文と刺突文がされたものであり、連弧文系の土器である(20g)。4は単節RL繩文施文後に垂下直状沈線文が施文されている。沈線間の繩文は磨消されている。加曾利E3式であろう(40g)。5は隆線により大型渦巻文が、地文にヘラ状工具によるハの字状文が施文され



第23圖 8號·10號土坑出土土器 (1/3)



第24図 10~12号土坑出土土器 (1~5 1/4, 6~7 1/3)

たものである(430g)。7号土坑で図示した2の土器が土坑底面付近から出土している。その他に勝坂式後半の土器が390g、曾利式前半の土器が110g、曾利式後半の土器が1850g、加曾利E式後半の土器が730g出土している。

#### <13号土坑>

出土遺物はない。

#### <14号土坑> (第25図6~10)

6は壁際から出土したものである。X字状把手付きの深鉢形土器である。地文にはヘラ状工具によりハの字状文が施文されている(760g)。8(20g)・9(20g)は地文に雨垂れ状文の施文されたものである。10は中層から出土したものである。口縁部に渦巻つなぎ弧文、胴部は括れ部に隆線を付し上半と下半に分割されており、上半には櫛齒状工具による条線文施文後に垂下波状沈線文が施文されている(460g)。その他に勝坂式土器が30g、曾利式前半の土器が70g、曾利式後半の土器が1080g出土している。

#### 2) 包含層出土土器 (第26~27図)

縄文時代中期の土器を中心に大量(約44000g)に出土している。勝坂式後半から曾利式前半期のものはグリッド3に集中している。曾利式後半期のものはグリッド2ではやや少ない。

##### ・縄文時代

###### 早期後半~前期前半 (第26図1・2)

1は、内外面に条痕文を有する口唇部片である。2は胎土に纖維を含み、単節LR縄文が横位回転施文された胴部片である。

###### 中期前半 (第26図3~14)

勝坂式前半(猪沢・新道式期、多摩・武藏野編年5~6期)は少なく、勝坂式後半(藤内・井戸尻式期、多摩・武藏野編年7~9期)を中心に出土している。

3は幅狭の角押文が施文されている。4~6は隆線側に三角押文が施文されている。7~9は半隆起状沈線によるパネル文が施文されている。10はキャタピラ文が施文されている。11は多条RLLL縄文施文後に波状沈線文や磨消円孔文が施文されている。12はいわゆる「温泉マーク文」の施文されたものであるが、本来爪形文の部分が間延びして沈線状である。13は隆線上に矢羽状の刻みや櫛齒状文等が施文されている。14は口唇部が外側に肥大し刻みの施文されるものである。胴部には多条RLLL縄文が施文されている。

###### 中期後半 (第26図15~26、第27図1~42、第28図45~49、第29図50・51)

曾利式が各段階にわたり出土するとともに、連弧文系や加曾利E式が若干出土している。

15は褶曲文が施文された、キャリバー形深鉢形土器口縁部である。16は頸部に中空の突帯をもつものである。地文には半截竹管による1本引きの条線が施文されている。17は半截竹管による刻みの施文された隆線により文様が施文されている。18~20は頸部に波状隆線が施文されている。21は単節RL縄文施文後に隆線を貼り付けている。22は単節RL縄文施文後半截竹管により波状文

を施文している。23は渦巻文施文後単節LR繩文を施文している。24～27は口縁部に渦巻つなぎ弧文を持つものである。28は口縁部に隆線貼付により文様施文し、胴部に単節RL繩文が施文されている。29は半截竹管により垂下直状沈線施文後に区画内に斜位に同一工具により条線文を施文している。30は低隆線による区画文施文後に単節LR繩文を充填している。31は撚糸1施文後垂下波状沈線文が施文されている。32は地文に半截竹管によるハの字状文の施文されたものである。33は地文にヘラ状工具により鋭いハの字状文の施文されたものである。34～39はおそらく同一個体である。口縁部に沈線によるU字状文、胴部に2条垂下直状沈線文が施文されている。地文としてヘラ状工具により鋭いハの字状文が施文されたものである。40・41は地文に櫛齒状工具による雨垂れ状列点文が施文されている。42は細沈線により対向U字文が施文されている。45は口縁部は無文で、胴部に地文として半截竹管外皮による沈線を施文後、頸部に2条の刻みのある隆線を胴部にJ字状文を施文している。46は頸部には隆線を格子目状に貼り付け、胴部には隆線を三つ編み状にしたもので懸垂文が施文されている。地文には半截竹管内皮による1本引き条線文が施文されている。47は、隆線貼付により口縁部には渦巻文等が、胴部には半弧状文が施文されている。胴部には単節RL繩文及び撚糸1が施文されている。48は内外面ともに丁寧な調整が行われたものである。49は沈線によりH字状文が施文され、地文にはヘラ状工具による鋭いハの字状文が施文されている。50は沈線により縦長区画が施文され、地文には半截竹管外皮によるハの字状文が施文されている。51は1本越え、1本潜り、1本送りの網代痕のある底部である。

・弥生時代（第27図43）

口唇部下に櫛描波状文の施文されたものである。

・近世以降（第27図44）

火鉢の把手部である。鬚子の顔を模写している。

・土製品など（第29図52～55）

52は台面直径が推定32cmある器台形土器である。体部に円孔文が4単位ある。内面の一部に赤彩が認められる。

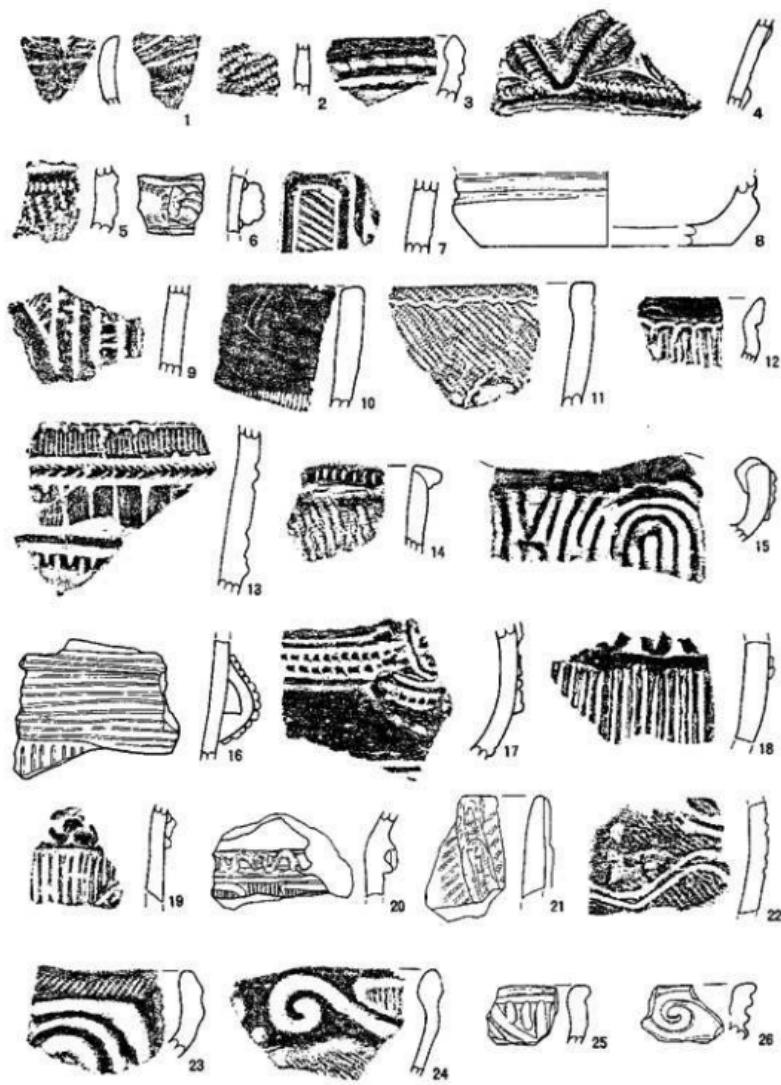
53は土器片製円盤である。周縁は3/4程度磨滅している。

54は三角形状を呈する土器片を穿孔したものであり装飾品であろうか。

55は土製紡錘車である。



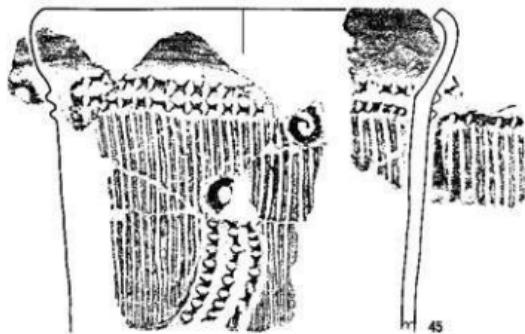
第25図 12・14号土坑出土土器 (1~9 1/3, 10 1/4)



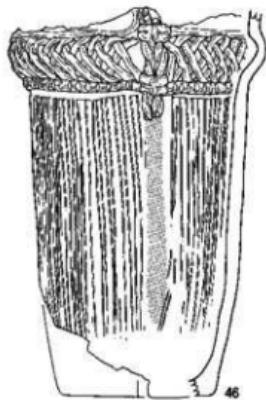
第26図 包含層出土土器（1）（1/3）



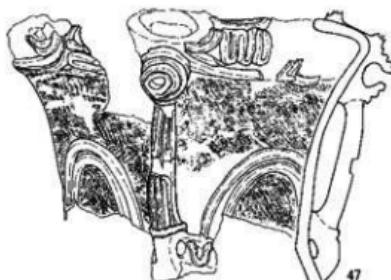
第27図 包含層出土土器 (2) (1/3)



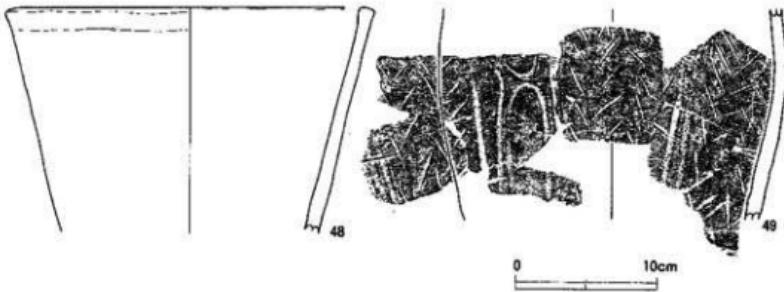
45



46

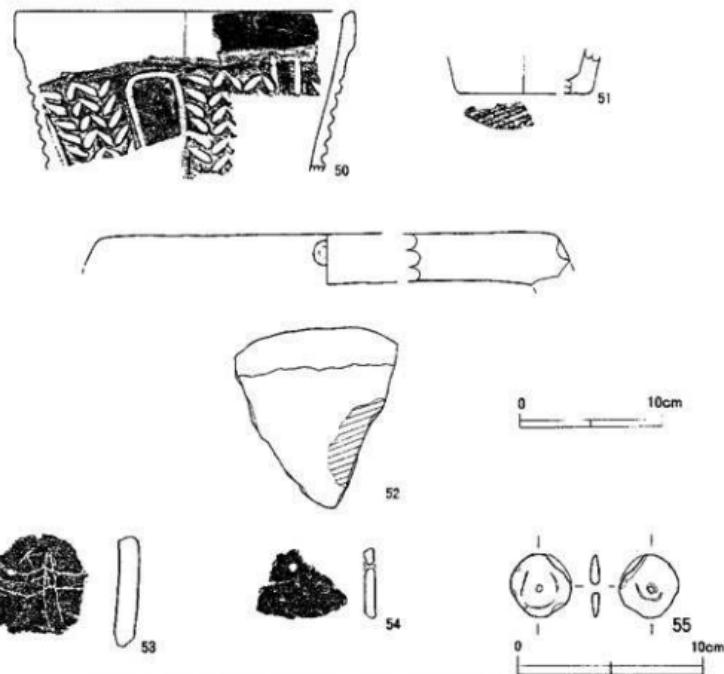


47

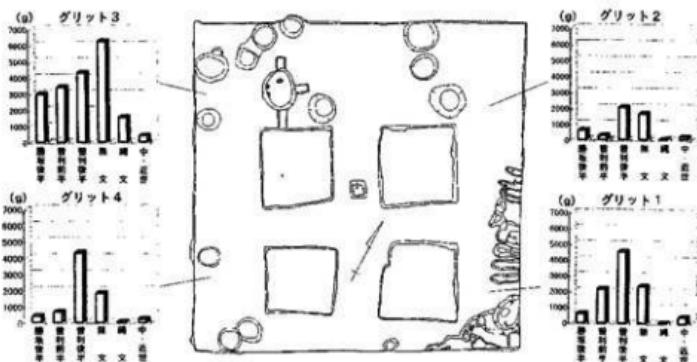


0 10cm

第28図 包含層出土土器（3）（1/4）



第29図 包含層出土土器 (4) (50~52 1/4, 53~55 1/3)



第30図 グリット別包含層出土土器時期別重量 (1/3)

### 3) 土坑内出土石器（第31図・第2表）

#### <1号土坑>

定形的な石器は出土していない。黒曜石製の剥片3点・加工痕ある剥片2点が出土している。

#### <2号土坑>

石器は出土していない。

#### <3号土坑>（第31図）

2は黒曜石製のビエスエスキューである。3号土坑から出土している。やや厚めの剥片を素材とし、素材打面を上下方向に据えて利用している。剝離は上下端から入っている。

このほかに、黒曜石製の剥片1点・加工痕ある剥片6点・安山岩製の加工痕ある剥片1点が出土している。

#### <4号土坑>（第31図）

3は安山岩製の礫器である。4号土坑から出土している。裏面には縦面を残す。表面に粗い調整を加えたのち、周辺に細かい調整を加えている。刃部は縁辺部すべてということになろう。表裏両面に調整の入っている部分のほかは、幅2mm程度で著しい磨滅がみられる。

4は安山岩製の凹石である。4号土坑から出土している。表面に3つの凹みがある。凹みの深さは平均約3mm。凹みの周辺に磨り痕はなく、裏面下端部・右側面に磨り痕がみられる。

4号土坑からはこのほかにホルンフェルス製の不明石器が1点、安山岩製の剥片1点、ホルンフェルス製の剥片1点が出土している。

#### <5号土坑>（第31図）

5は緑色凝灰岩製の凹石である。5号土坑から出土している。凹みは表面に5つ、裏面に4つある。凹みの深さは最も深いもので5mmある。また、上端部・左側面にも楕円形の凹みがみられ、右側面には敲打痕がある。磨り痕は表面の凹み周辺と裏面全体に見られ、特に裏面の磨り痕は著しい。

5号土坑からはこのほかに、安山岩製の加工痕ある礫が1点出土している。

#### <6号土坑>

定形的な石器は出土していない。黒曜石製の剥片1点・加工痕ある剥片1点が出土している。

#### <7号土坑>（第31図）

8は安山岩製の石皿である。2つにわかつて、ともに7号土坑からやや離れて出土した。この2点の接合面をみると、石皿の裏面に打点が残っており、裏面から故意に割っていることがうかがえる。皿部長は334mm、皿部の深さは26mm。皿部の内面には長軸方向の磨り痕がみられる。また裏面先端部にも斜め方向の磨り痕がみられる。

9は安山岩製の石皿の一部である。前述の8とともに7号土坑から出土している。この石皿と確実に接合する破片は見つかっていない。現存する部分での皿部の深さは20mm。皿部内部には、図中の左右方向に磨り痕がみられる。

#### <8号土坑> (第31図)

6は砂岩製の磨石である。8号土坑から出土している。断面はカマボコ状で、平坦な表面だけに長軸方向の磨り痕が一面にみられる。

7は砂岩製の敲石である。8号土坑から出土している。風化が激しく、磨り痕などの観察はできない。敲打痕がみられる部分は平坦になっていて、面を形成している。敲打の際に生じたと思われる剥離が、敲打痕の周辺に残る。

8号土坑からはこのほかに黒曜石製の剥片4点・加工痕ある剥片4点が出土している。

#### <9号土坑>

9号土坑からは、石器は出土していない。

#### <10号土坑>

10号土坑内出土の石器は、頁岩製の打製石斧が1点、黒曜石製の剥片2点が出土している。

#### <11号土坑>

11号土坑からは石器の出土はしていない。

#### <12号土坑>

12号土坑からは定形的な石器は出土していない。黒曜石製の加工痕ある剥片4点・使用痕ある剥片1点が出土している。

#### 4) 包含層出土石器 (第32・33図、第2表)

##### <1グリッド> (第32図)

10はホルンフェルス製の磨石である。表面先端部にわずかに敲打痕がある。両側面は長軸方向の磨り痕がみられる。

1グリッドからはこのほかに、ノッチ状の刃部を2つもつ黒曜石製の搔器1点が出土している。

##### <2グリッド> (第32図)

10はヒスイ製の垂飾である。一面に丁寧に磨かれてはいるが、表面孔部の周辺と裏面左側縁部に磨かれていない部分が残る。中央よりやや上にあけられた孔は貫通していて、表面での径が大きく、垂飾の内部にいくほどに径が小さくなっている。表裏面の両方から穿孔作業をした結果とおもわれる。

11・12は黒曜石製の石鎚である。11は凹基の石鎚で、極めて小さい。右脚部を表面からの加熱、左脚部を左側からの加熱により欠損している。両脚部を欠損しているため、抉り長の測定はできない。裏面には素材面が残っている。12は11に比べて極めて長身である。凹基の石鎚であるが、抉り長が5mmと長身のわりに小さい。側縁部は、先端から側縁部中央にかけて鋸歯状になっている。

2グリッドからはこのほかに、黒曜石製の剥片2点・使用痕ある剥片3点、ホルンフェルス製の加工痕ある剥片1点が出土している。

15・16は磨石である。15は砂岩製で、磨石の一部である。表面左半分と側面に長軸方向の磨り

痕がみられる。16は安山岩製で、表裏面の下端部と、側面の上下端部にわずかに磨り痕がみられる。

17は片岩製の乳棒状石器である。風化が激しい。下端部に大きな剥離がみられる。明確な敲打痕はみられない。

#### <3グリッド> (第32図)

13は黒曜石製のビエスエスキューである。剥片素材で、裏面には素材の面が大きく残る。また、左側面は礫面で、素材作出の際の打面になっている。素材の打面を横にして利用していることがわかる。

18・19は磨石である。18は多孔質安山岩製で、上部を欠損している。右側面に長軸方向の磨り痕がみられる。19は安山岩製で、全面に磨り痕がみられる。表面には3つの凹みがみられる。凹みの深さは最深部で4mmと深い。

20は安山岩製の磨石である。いわゆる稜磨石で、側面は全面にわたって短い磨り痕がみられる。表裏面は礫面である。

21・22は打製石斧である。21は安山岩製で、上部を表面からの加撃により欠損している。偏平な礫を素材とし、調整を加えている。形態は短冊形で、表裏面ともに礫面を残す。

左側面は、断続的に4ヶ所磨滅している。22は砂岩製で、上部を裏面からの加撃により欠損している。厚みのある大形の剥片を素材としており、表裏面とも素材面を残す。左側面は断続的に2ヶ所磨滅している。

3グリッドからはこのほかに、黒曜石製のビエスエスキュー3点、安山岩製の石匙1点、黒曜石製の剥片25点・加工痕ある剥片14点・使用痕ある剥片6点、ホルンフェルス製の剥片1点、頁岩製の加工痕ある剥片1点、黒色片岩製の加工痕ある剥片1点が出土している。

#### <4グリッド> (第33図)

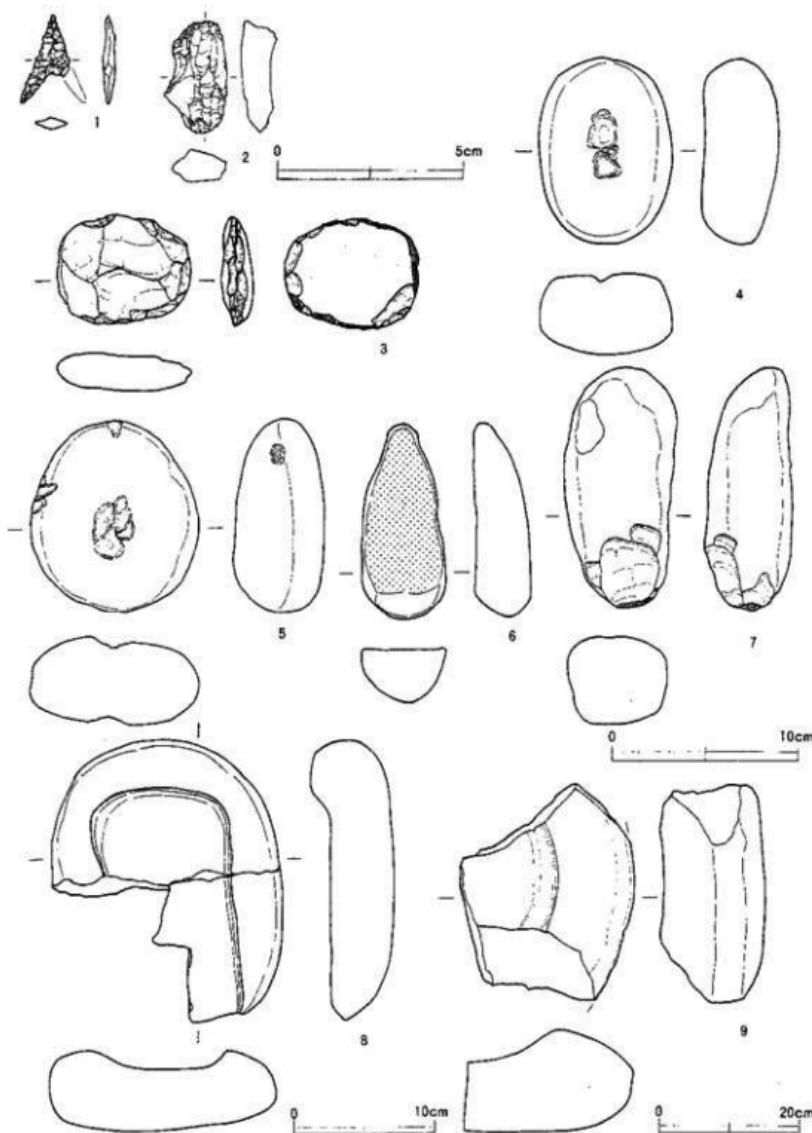
23はチャート製の石鎌である。凹基の石鎌で、右脚部を裏面からの加撃により欠損している。両側縁部は中央で大きく内湾している。抉り長は4mmである。

24は黒曜石製のビエスエスキューである。剥片素材で、素材の打面を上下方向において利用している。表面左側に礫面が残る。

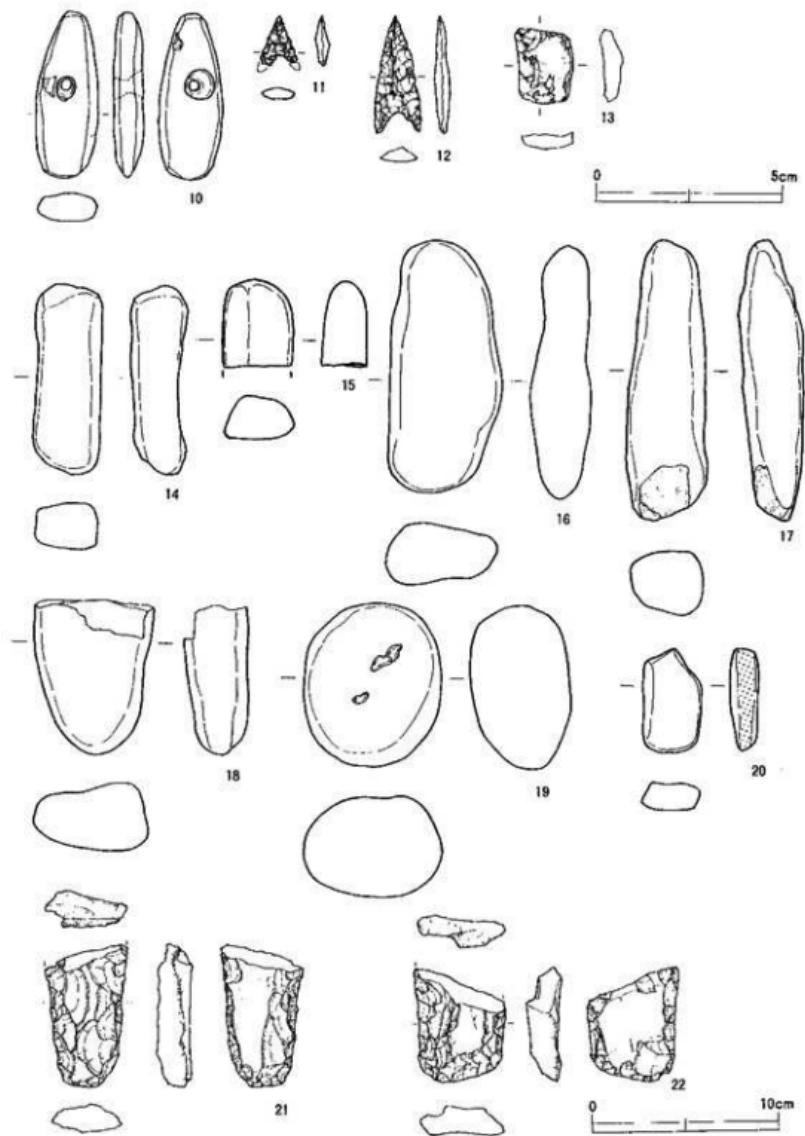
25は黒曜石製の石核である。現存の段階では、上側面を打面として細長い剥片を2つ出したあとがうかがえる。

26は砂岩製の磨石である。上部を欠損している。表裏面に磨り痕がみられる。

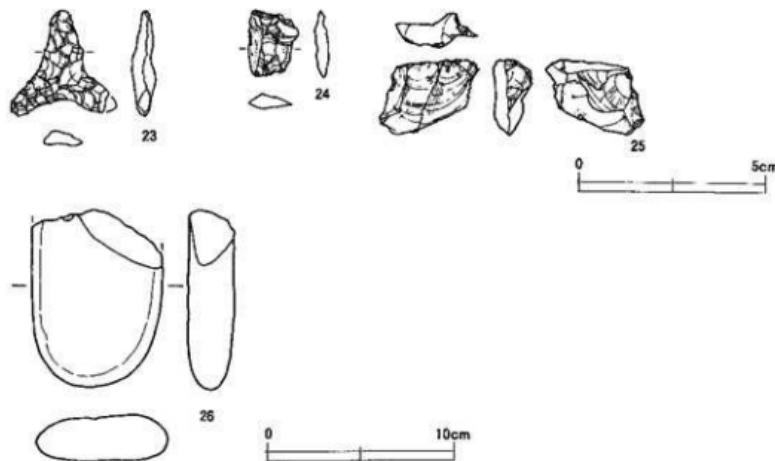
4グリッドからはこのほかに、黒曜石製のビエスエスキュー1点・剥片3点・加工痕ある剥片1点・使用痕ある剥片2点が出土している。



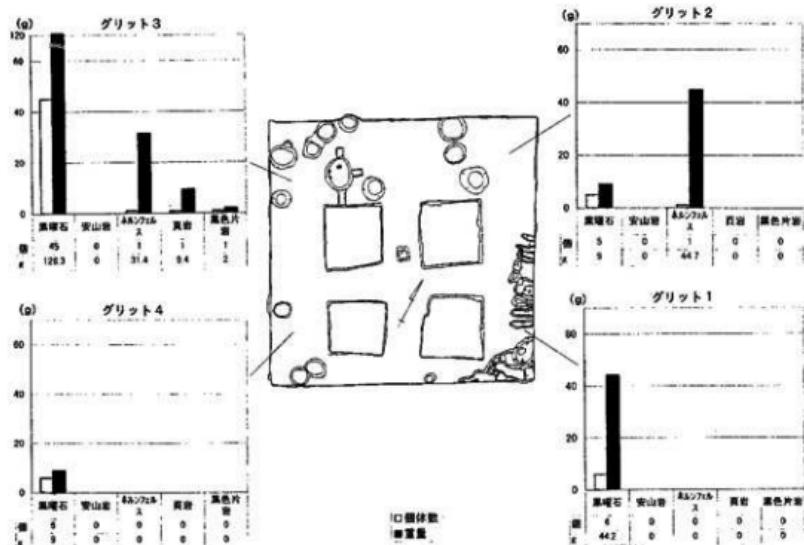
第31図 土坑内出土石器 (1・2 2/3, 3~7 1/3, 8 1/4, 9 1/8)



第32図 グリット出土石器（1）（10～13 2/3, 14～22 1/3）

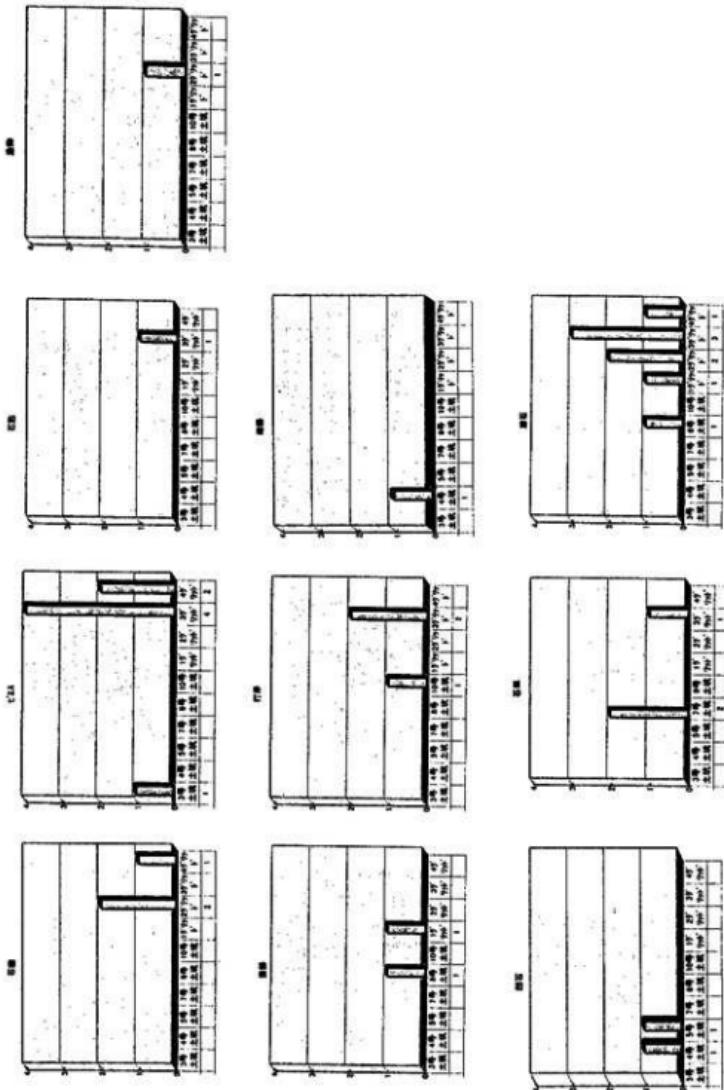


第33図 グリット出土石器（2）（23～25 2/3, 26 1/3）



第34図 グリット別包含層出土剥片重量

第35図 村ノ前地区石器器種別出土量



No.	地盤 No.	石	器	種	石	材	不	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(0.4)	破損状況	備考
31	1	石	器	端	黒	雲母	石	不	明	9	3.5	0.4	左脚脛欠	
2	23	石	器	匕	黒	雲母	石	3号	土坑	30	17	9	3.8	
3	21	砂	器	器	黒	安山岩	山	4号	土坑	59	72	20	109.5	
4	14	回	回	石	砂	安山岩	山	4号	土坑	101	72	42	420	
5	13	凹	凹	石	特	綠色灰岩	山	5号	土坑	104	90	45	660	
6	15	層	-	石	砂	岩	8号	土坑	104	45.5	30	180		
7	S-1	前	-	石	砂	岩	8号	土坑	130	61	47	540		
8	S-1	右	-	石	砂	安山岩	山	7号	土坑	224	320	118	-	S-2と複合
8	S-2	右	-	石	砂	安山岩	山	7号	土坑	232	180	106	4680	S-1と複合
9	S-3	右	-	石	砂	安山岩	山	7号	土坑	326	215	104	160	
32	10	1	重	筋	ヒ	ス	イ	2号	リット	44	17	8	8.9	
11	4	石	器	端	黒	雲母	石	2号	リット	12	9	3.5	0.2	右脚脛欠
12	3	石	器	端	黒	雲母	石	2号	リット	31	12	4	1.1	
13	26	ビエスキュー	-	石	黒	雲母	石	3号	リット	20	15	4	2	
14	10	磨	-	石	木ルンフェルス	砂	1号	リット	103	37	25	290		
15	16	磨	砂	石	砂	安山岩	山	2号	リット	48	39	24	80	
16	18	磨	砂	石	砂	安山岩	山	2号	リット	135	60	33	400	
17	19	乳棒状	石器	石	多孔質	安山岩	3号	リット	150	44	35	300		
18	9	海	-	石	多孔質	安山岩	3号	リット	83	65	37	300		
19	12	磨	石	安	安	山	3号	リット	89	75	55	460		
20	22	特珠磨	砂	石	安	山	3号	リット	56	32	15	38.9		
21	6	打鑿	石斧	石	安	山	3号	リット	77	45	16	78.9	上部欠	
22	7	打鑿	石斧	石	安	山	3号	リット	61	49	18	61.1	上部欠	
33	23	2	打鑿	石	安	山	3号	リット	28	10	6.5	2.7	右脚脛欠	
24	24	ビエスキュー	黒	雲母	石	4号	リット	17.5	13.5	4	0.7			
25	25	石	後	黒	雲母	石	4号	リット	20	26	10	3.5		
26	11	曲	石	砂	砂	物	4号	リット	95	71	25	320		
-	8	石	皿	安	山	3号	リット	-	-	-	-	82.6	塊片	
-	20	加工痕ある	器	空	安	山	5号	土坑	91	73	23	233.8		
-	-	打鑿	石斧	器	黒	雲母	山	10号	土坑	79	52	11	53.5	
-	-	石	載	安	山	3号	リット	77	48	8	50.8			
-	-	ビエスキュー	黒	雲母	石	3号	リット	20	22	7	2.3			
-	-	ビエスキュー	黒	雲母	石	3号	リット	19	15	6	1.2			
-	-	ビエスキュー	黒	雲母	石	3号	リット	15	12.5	6	0.8			
-	-	ビエスキュー	黒	雲母	石	4号	リット	16	19	5	1.1			
-	-	不明	石	器	木ルンフェルス	4号	土坑	-	-	-	-	44.5		

第2表 村ノ前地区出土石器一覧

### 3節 遺構・遺物の検討

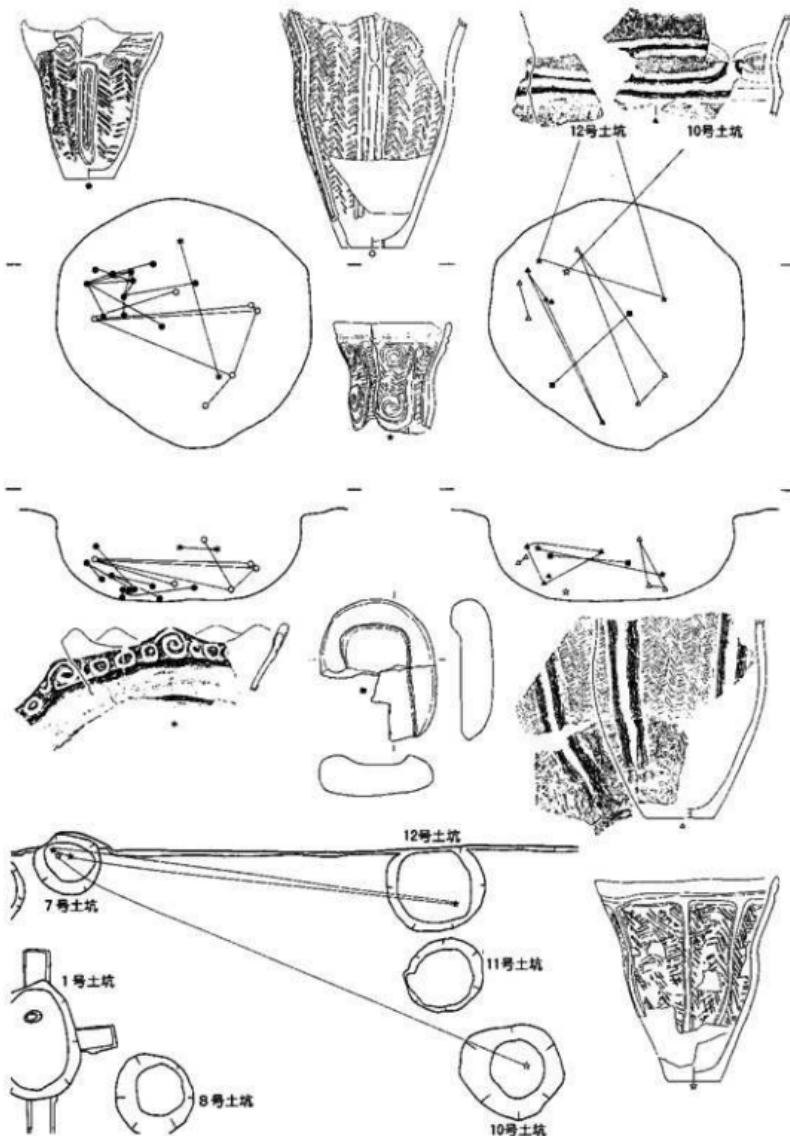
#### 1) 遺物の接合関係について（第36図）

7、10、12号土坑間で遺物の接合関係を確認した。まず、土器の個体数の多い7号土坑の遺物出土状況および接合関係について確認しておく。第10図微細図で示したように、土坑内全体から土器、石器及び礫が出土している。覆土の堆積状況及び出土状況から検討すると、石皿より上位から出土するものは断言できないが、その他に関しては同時に廃棄されたものと考えられる。完形にはならないが5個体に関して土坑内で、2個体に関して10、12号土坑出土土器と接合関係が認められた。また、石器では石皿に接合関係が認められた。

個々の接合状況について述べておく。7土-1(▲)は、1点を除き平面分布では集中し、上層と下層間で接合している。いずれの破片もほぼ同じ大きさであり、どちらの層に主体となって含まれていたかは判断しかねる。7土-3(\*)は、上層内での接合であり、レベル差はないが、平面分布は散逸的な状況である。7土-4(●)は、一部上層に含まれる破片もあるが、そのほとんどは下層出土である。平面分布は集中している。7土-5(○)および7土-6(△)は、一部上層に含まれる破片もあるが、そのほとんどは下層出土である。平面分布は、散逸的な状況である。7土-2(★)は、下層から出土し、12号土坑の底面から出土したものと接合する。10土-1(☆)は、主体となって出土しているのは10号土坑であり、土坑確認面から出土している。7号土坑からは、口縁部破片のみであるが下層から出土している。7土-8(■)は、土坑のほぼ中央で下層上面から出土したものと土坑の壁付近から出土したものとが接合している。石皿の裏面に打点を確認することができたことから、故意に石皿を割った後に土坑内に廃棄したと考えられる。

以上のような出土状況と接合関係が認められたわけであるが、次に、出土土器の型式学的な視点も絡めて7号土坑の埋没経過と、接合関係からみえる土坑間の関係についてふれておく。

7号土坑は大きく上下2層に分層可能である。7号土坑の下層から出土した多くの土器が曾利新3式である。特に、接合関係の認められたもの(7土-4・5・6)は、土器が折り重なったような出土状況であり、同時期に土坑内に廃棄されたものと考えられる。また、石皿はこれらの土器の上にのった出土状況であり、土器の廃棄と時を同じくして石皿も廃棄されたものであろう。これらに対して上層から主に出土したもの(7土-1・3)は、曾利新2式であり下層出土の土器と比較すると古い。このようなことから7号土坑は曾利新3式期に掘られ、曾利新3式土器や石皿等が廃棄された後に土砂等の流入(人為的なものかどうかは判断できないが)があり埋没したものである。7号土坑に連して10、12号土坑で遺構間接合がそれぞれ認められた。10土-1は土坑の掘り込みよりも浮いているが、これは遺構を確認した面であり、当時の生活面はさらに高いと考えられ、土坑内(おそらく上層)から出土していることに相違はない。その出土状況から自然流入とは考えにくく人為的な廃棄行為であり、土坑の構築時期を示すものである。その土器と接合関係にある口縁部破片(接合面等に磨滅痕跡はない)が7号土坑の底面付近から出土していることから、10号土坑は7号土坑と同時またはやや先行して作られたものと考えられる。7土-2は、7号土坑内の石皿の真下から出土したものと12号土坑の底面付近から出土したものとが接合している。いずれの破片も出土状況から人為的な廃棄行為の結果と考えられることから7号土坑と12号土坑には、7土-2の土器を分割したものを同時に土坑内に廃棄したのである。



第36図 出土遺物接合関係図（遺構1/40, 土器1/8, 石器1/16, 全体図1/80）

以上のことから、10号土坑・7号土坑・12号土坑の時間的な流れを想定できよう。

この3つの土坑は土器型式からすれば1型式内に収まり同一時期の土坑で片付けられてしまうが、以上のような接合関係を検討することにより、1型式内の時間差や1型式内よりも細かい意味での同時性を求める事のできる可能性を指摘した。すべての遺構に関して検討することは現状では不可能かもしれないが、可能な範囲でデータを蓄積することにより集落の動態が見えてくるのではないだろうか。

#### 引用・参考文献

山形眞理子1996「曾利式土器の研究(上)」『東京大学文学部考古学研究紀要』14

#### 2)出土石器について

村ノ前地区の出土石器について、大きくまとめてみる。まず、2グリッドから垂飾が出土している。また、小形の定形石器の出土数が少ないなか、石材は黒曜石が圧倒的に多く、器種はピエスエスキューがきわめて高い割合を占めている点も特徴的である。

次に、各グリッドごとにみてみると、1グリッドでは、ホルンフェルス製の磨石、黒曜石製の搔器・剝片類が出土している。

2グリッドは、10・12号土坑から黒曜石製の剝片類が数点出土しているほか、頁岩製の打製石斧が1点出土している。また包含層からは、垂飾・石礫・磨石などが出土し、器種はバラエティーに富んでいる。

3グリッドは、もっとも土坑の集中しているグリッドである。土坑別に石器出土状況を見てみると、いくつかの傾向がある。

まず、黒曜石石材の出土に偏りがみられる。1・3・8号土坑からは黒曜石が出土しているのに対し、4・5・7号土坑からは非黒曜石の石材が出土している。このグリッドは、他のグリッドに比べて黒曜石製の剝片類の出土量がきわめて多い。それにもかかわらず、黒曜石を一切出土しない土坑があることは、注目すべき点であろう。くわえて7号土坑における石皿の出土状況は、明らかに人為的に割られた石皿と、さらにもうひとつ個体の石皿の破片がともに出土している。この土坑からはこの他にはいっさい石器は出土しておらず、本地区における土坑のなかでも特異な状況といえる。

また器種については、非黒曜石製のものは、大形剝片以外に小形の定形石器がみられないという傾向がある。これについては、土坑出土石器だけでなく3グリッド全体の傾向でもある。さらに、1・3号土坑からは大形の石器が出土していないという点、2グリッドでは石礫が出土しているが、3グリッドでは、石礫は出土せずピエスエスキューが多くみられるという点もあげられる。

4グリッドは、黒曜石製の剝片類・ピエスエスキュー・石核、チャート製の石礫、砂岩製の磨石が出土している。黒曜石の定形石器の割合が多い点が注目される。

以上から、本地区において、とくに3グリッドで黒曜石の剝片作出がおこなわれ、ピエスエスキューが多く出土していることがわかる。そのかたわら黒曜石を出土しない土坑がいくつかあり、とくに7号土坑では複数の石皿が意図的に割られて入っていることがわかる。

#### 3)坂井遺跡における調査土坑群の位置付け

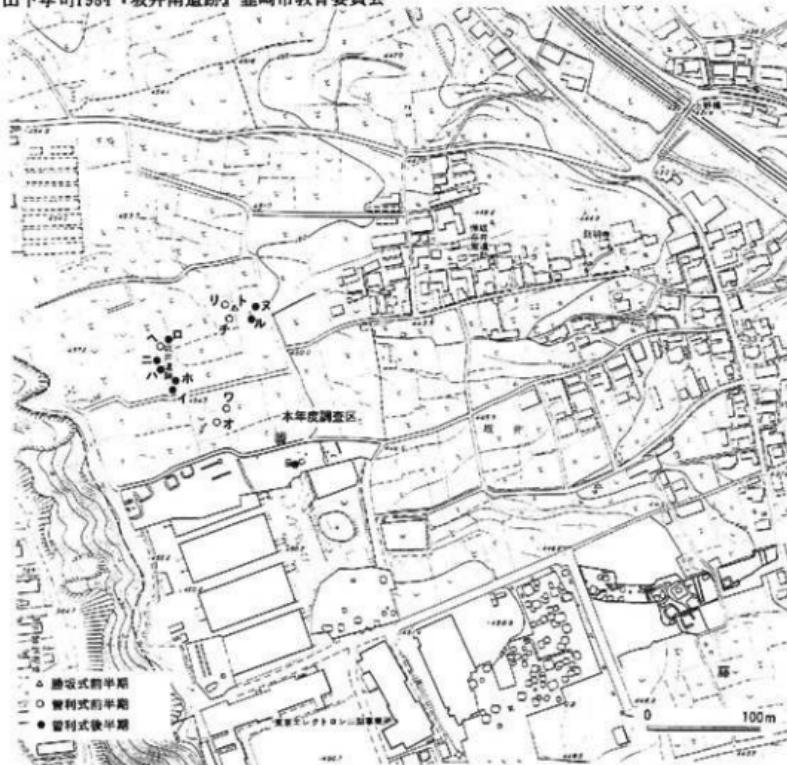
今回の調査区に隣接するこれまでに調査された遺構の配置図は第37図に示したとおりである。今回の調査区は、沢に挟まれた標高455m前後の台地上で志村龍藏氏の行った第1・2・3地区

の南東部分に当たる。志村氏はこの3調査区の中で13軒の住居跡および2基の土坑を確認している。報告書『坂井』から判断した時期毎の住居は、勝坂式前半期（おそらく貉沢期）がト号の1軒、曾利式前半期がヘ・リ・チ・ワ・オ号の5軒、曾利式後半期がイ・ロ・ハ・ニ・ホ・ヌ・ル号の7軒である。以上のように今回の調査区で確認した土坑群の時期とほぼ同時期であることがわかる。さらに、台地の地形を考慮すると、第1・2・3地区および今回の調査区は1つの集落跡の一部であることは容易に想定できる。また、今回の調査区の南側は坂井南遺跡として広大な面積がこれまでに調査され、その結果縄文時代中期後半の竪穴住居跡1軒及び土坑3基のみである。居住活動痕跡は非常に薄いことが明らかになっており、集落跡としての南端が今回の調査で明確になったといえよう。おそらく直径150m前後のいわゆる環状集落跡と考えられよう。今回の土坑群は環状の外縁近くに作られたもので、一般的にいわれている環状の内側に存在する土坑とは異なるようである。

#### 引用・参考文献

志村淹藏1965『坂井』地方書院

山下孝司1984『坂井南遺跡』垂崎市教育委員会



第37図 坂井遺跡遺構配置図 (1/5000)

II章 茅林地区

## 1 節 遺 構

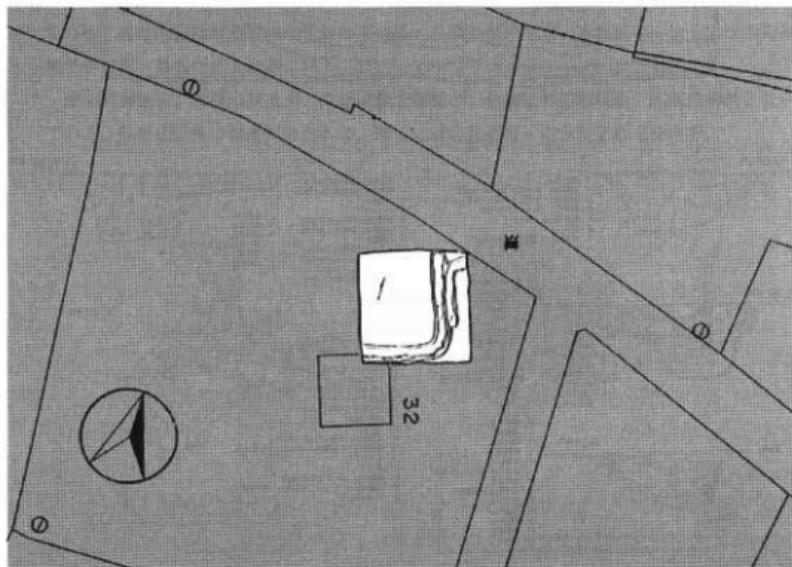
調査区域は10m弱四方の正方形の範囲で、方形周溝墓の溝が2基分発見された。村ノ前地区に比べて耕作土は深くはないが、本地区はかつて長芋の畑で1m程の等間隔でトレッチャによるさくが掘られていた。

**<1号周溝墓> (第39図)**

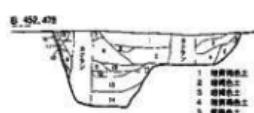
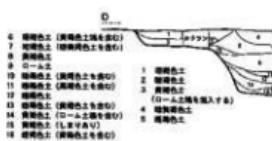
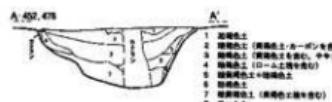
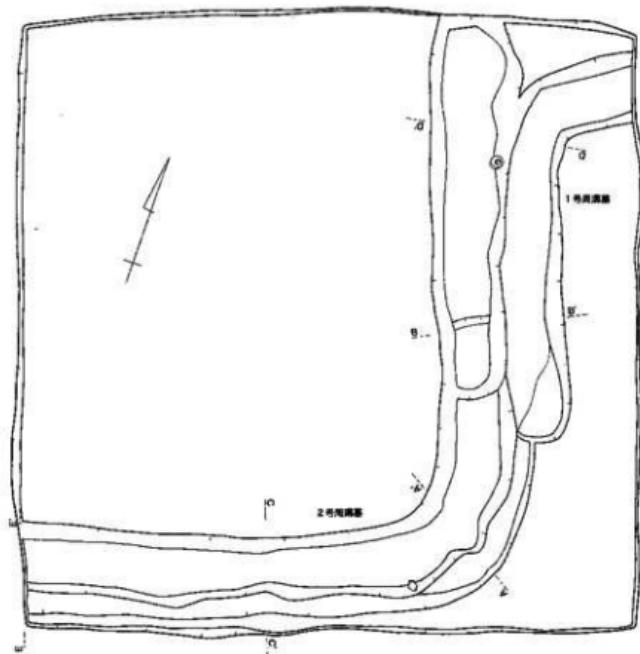
調査区域北東寄りに位置する。東側は調査区域外で完掘できなかった。周溝は南北方向に長さ6m、幅1m50cm～2m程の規模があり、北側で直角に折れ曲がり東側にのびている。形態は南東角にブリッジを持つものと思われ、その部分に溝は無かった。確認面からの深さは、25cm～50cmで比較的浅い。西側での土層断面観察では2号周溝墓を切っており、1号周溝墓の方が新しい。壁の立ち上がりは、内側が急で、外側がなだらかとなっている。

〈2号周溝墓〉(第39図)

調査区域南西から北東にかけてL字形に存在した。北側と西側は調査区域外で完掘できなかつた。周溝の幅は約1m50cmで、確認面からの深さ1m前後～1m20cm。北辺で内側へ溝が入り込んでいくようなので、一辺10m程の周溝墓ではないかと推測される。壁の立ち上がりは、内側が急で、外側がなだらかとなっている。東側溝内には段差がみられる。



第38図 茅林地区調査位置図 (1/500)



第39図 1号・2号周溝幕平面・断面図 (1/90)

## 2節 遺物

遺物の出土は少ない。時代別に紹介する。

### 1) 縄文時代の土器（第40図）

2基の周溝墓の周溝内より若干量の縄文土器が出土している。1は、半隆起状沈線によるいわゆるパネル文が施文されている。2は、底に2本送り、2本越え、1本くぐりの網代痕を有し、胴部に櫛歯状工具による条痕文が施文されている。その他に勝坂式が約105g、曾利式が500g出土している。

### 2) 縄文時代の石器

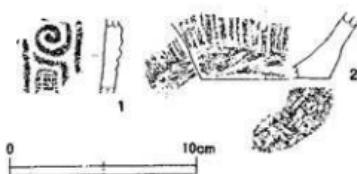
本地区での出土石器はわずか2点と少ない。1号周溝墓から破片が1点、また出土地不明で加工痕のある剥片が1点出土している。いずれも黒曜石製である。図化しなかった。

### 3) 弓生時代の土器（第41図）

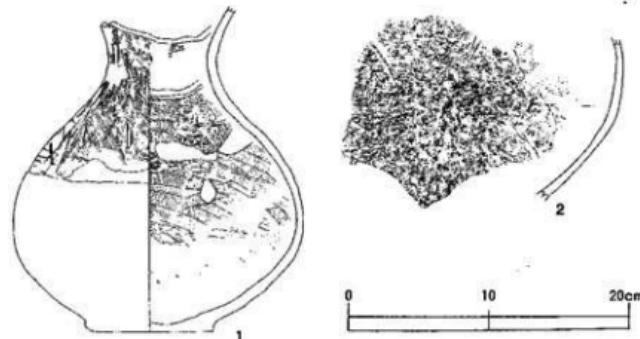
2号周溝墓から弥生時代の壺が出土している。

1 周溝東辺の埋没土のかなり上位で出土しており、口縁部を欠くが頸部以下は完型に近い。外面は刷毛整形の後粗い磨きが施され、刷毛目が残っているが、胴部下半から底部にかけては器面の剥落がみられ調整はわからない。内面は胴部上半までおむね横方向の刷毛目となっている。底部内面は痘状の剥落がみられる。色調はややにぶい赤褐色で、胎土には赤褐色粒子や石英・長石などを含む。

2 壺の胸部破片。外面は刷毛目、内面は撫で調整で、色調は外面暗褐色、内面白褐色となっている。外面には煤の付着がみられる。胎土には金色雲母・白色粒子などを含む。



第40図 出土縄文土器 (1/3)



第41図 2号周溝墓出土土器 (1/4)

### 3節 遺構・遺物の検討

茅林地区から発見されたものは前項まで見てきたように、縄文時代は土器片と石器のみであるので、ここでは弥生時代の遺構と遺物についてやや細かく見てみたい。

#### 1) 土器について

山梨県内における弥生時代後半から古墳時代前期にかけての土器様相は、近年中山誠二氏と小林健二氏の研究により大きな成果がもたらされており（中山誠二「甲斐弥生土器編年」の現状と課題－時間軸の設定－』『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 1993年、小林健二「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993年）、これによって茅林地区の土器の編年上の位置を考えてみたい。

壺1は頸部の屈曲が少なく口縁部は単純口縁と思われ、胴部最大径が下半にある。1点の土器だけで時期の比定は難しいが、古墳時代の壺は胴部が球胴形で頸部から朝顔状に大きく開く器形で、胴部最大径が下半にありなで肩のものはそれ以前の段階と認識され、また中山氏6期A相の壺は刷毛調整後端削り・磨きが施されるものが多いとされるので、中山氏の6期A相、小林氏の2a期に相当すると思われる。弥生時代末期に位置付けられよう。

#### 2) 周溝墓について

周辺部を発掘しておらず、周溝墓の全体像は把握できないが、弥生時代の周溝墓は方形でコーナーにブリッジをもつ形態で、一辺が10m～20mの規模のものが一般的であり、本地区的周溝墓も同様な形態を呈すると思われる。2号周溝墓では溝に囲まれた台状部は平らであり、土坑などは検出されず埋葬主体部は不明となっている。台状部の墳丘が確認された例としては長坂町北村遺跡（『北村遺跡 八ヶ岳南麓の方形周溝墓』長坂町教育委員会ほか 1996年）があり、6基の方形周溝墓のうち3基に墳丘があり、周溝確認面からの高さはそれぞれに50cm・1m・1m50cm前後であるがいずれも埋葬主体部となる竪穴状遺構が検出されている。遺物は墳丘頂上と周溝内から出土しており、時期は小林氏の2a期と3期に比定されている。北村遺跡例は本地区的周溝墓と時期的に一部重なり、本地区的周溝墓も本来は同様な墳丘があったと推測できる。

#### 3) 遺跡の景観

本地区から南東に500m程離れた坂井南遺跡からは古墳時代前期の住居跡99軒、方形周溝墓12基が発見されており（『坂井南遺跡』『山梨県史』資料編I原始・古代I 1998年）、小林氏の編年では2b期～5期に属し、当該時期の集落と墓域を考える上で良好な遺跡となっている。坂井南遺跡では周溝墓は住居跡群の東側墓群と沢を挟んだ北側墓群があり、伊藤正彦氏は坂井南集落は住居跡群と東側墓群のまとまりであり北側墓群はそこから北側に展開するであろう別の集落のものと推測している（「韮崎市の弥生時代後期から古墳時代前期の様相－坂井南遺跡を中心として－」）。集落に付随した墓域のあり方が想定されるが、本地区周辺においても同様な景観が成立するのであろうか。坂井南遺跡に集落が発生する前段階の弥生時代後半にこの地に周溝墓を造営するような集団が集落を形成していたと考えたいが、周辺地域での調査事例の増加を待ちたい。

### III章 天神前地区

#### 1節 遺構

調査区域は12m～13m四方程の不整の方形の範囲で、北側に向かって緩やかに傾斜している。縄文時代前期の住居跡1軒、古墳時代前期の住居跡1軒、集石土坑1基、土坑3基、溝2本が発見された。本地区は桑畠で耕作土の厚さは20cm～30cm程であった。

##### <1号住居跡>（第44図）

調査区域東側の1グリッド～2グリッドにかけて位置する。黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し掘り下げる。規模は短辺3m50cm、長辺4m50cmで、平面形は隅円長方形を呈する。長軸の方向はほぼ南北方向となっている。確認面からの深さは10cm前後で、浅い竪穴となっている。壁は外傾しながら立ち上がる。埋没土には炭や焼土が混入しており、火災を受けたらしく炭化材が遺存していた。床面は平坦で堅くしまっており、厚さ5cm程の張り床となっている。炉は地床炉で床面南側にあり、約50cm×70cmの卵形の範囲で焼土の厚さは約4cmあった。円形の穴が7カ所程検出されたが、不揃いで柱穴とは断定できない。他の内部施設としては、北辺に半円形の凹みがあり、南東側には土手状の高まりが部分的につくられその端に長楕円形の穴が検出されている。貯蔵穴であろうか。遺物は床面直上から出土しており、どちらかというと住居内東側よりも西側に多く散在していた。

##### <2号住居跡>（第45・46図）

調査区域東側の1グリッド～2グリッドにかけて位置する。1号住居跡北側において炭化粒や焼土粒の混入した暗褐色土の落ち込みを確認し掘り下げた。南側3分の1は1号住居跡の下に埋没していた。規模は東西4m60cm、南北5m70cmで、平面形はやや不整な梢円形を呈する。確認面からの深さは50cm～80cmありかなり深い竪穴となっている。壁は外傾しながら立ち上がる。埋没土は暗褐色土でおおきく3層にわかれ、上から二番目の土層は全体に黒く炭や焼土が混入した土でしまりが無かった。床面は壁際から中央部分にむかって凹んでおり、北側半分ではひとまわり小さな円状に段差がみられた。堅い床面は南西側で部分的に検出されたのみで、全体としてローマ土面まで掘り下げた。北側壁際は斜めの三日月形の段差となっており、柱穴はこの三日月形の段差よりも南側に円を描くようにめぐっており、径35cm前後の比較的深い穴と床面の小さな円状の段差に沿って並ぶ径10cm程の小さな穴がある。中央部分には径20cm深さ40cmの穴があった。炉は施設としては検出されなかったが、床面中央部分に若干焼土がみられた。南側壁際・中央部分・北側壁際の3カ所には、南北方向の直線上に長さ50cm前後厚さ13cm程の平石が1個づつ置かれていた。なお竪穴が埋没してから掘られたと思われる径1mの土坑が北東側にある。出土遺物は縄文時代中葉の土器片と石器が主体で、埋没土中位から上位にかけてと床面直上の2カ所に集中がみられた。このほかに炭化材は上から二番目の土層にかかるて西側壁際から中央に向かって斜めに検出された。

#### <集石土坑> (第47図)

2 グリッド南東隅に位置する。遺構確認作業に際して約1m40cm×1m20cmの範囲で石の集中がみられたので掘り下げを行った。土坑の規模は径1m前後で不整円形を呈し、集石を確認した面からは約40cmの深さがあり、壁はやや外傾しながら立ち上がる。底面はやや凸凹しており、中心には径20cm深さ40cmの小穴があった。石の集中箇所の深さは30cmで、石の大きさは長さ20cm大のものがいくつかあるが、拳大のものが大部分をしめていた。遺物は集石に混じって縄文時代前期後葉の土器片が出土している。本土坑西側には深さ15cmで径30cmと径40cm前後の穴があった。

#### <1号土坑> (第48図)

4 グリッド南側に位置する。規模は東西1m73cm、南北1m44cmで、平面形は卵形を呈する。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さ20cm前後、壁は直～やや斜めに立ち上がる。埋没土中からは土器片が出土している。

#### <2号土坑> (第48図)

4 グリッドの1号土坑南側に位置する。規模は東西約90cm、南北約80cmで、平面形は不整な梢円形を呈する。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さ35cm前後、壁は外傾しながら立ち上がる。遺物の出土は無い。

#### <3号土坑> (第50図)

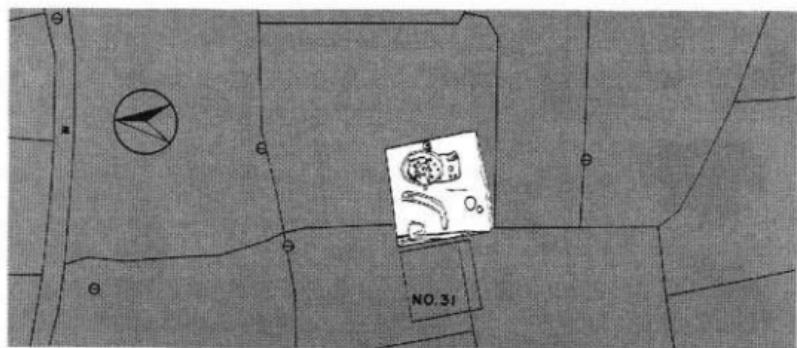
3 グリッド北東側に位置する。上半分には2号溝が構築されている。規模は径75cm前後で、平面形は不整な円形を呈する。底面はやや西に傾斜しており、2号溝底面からの深さ60cm前後、壁はやや外傾しながら立ち上がる。遺物は中位～下位にかけて出土している。

#### <1号溝> (第49図)

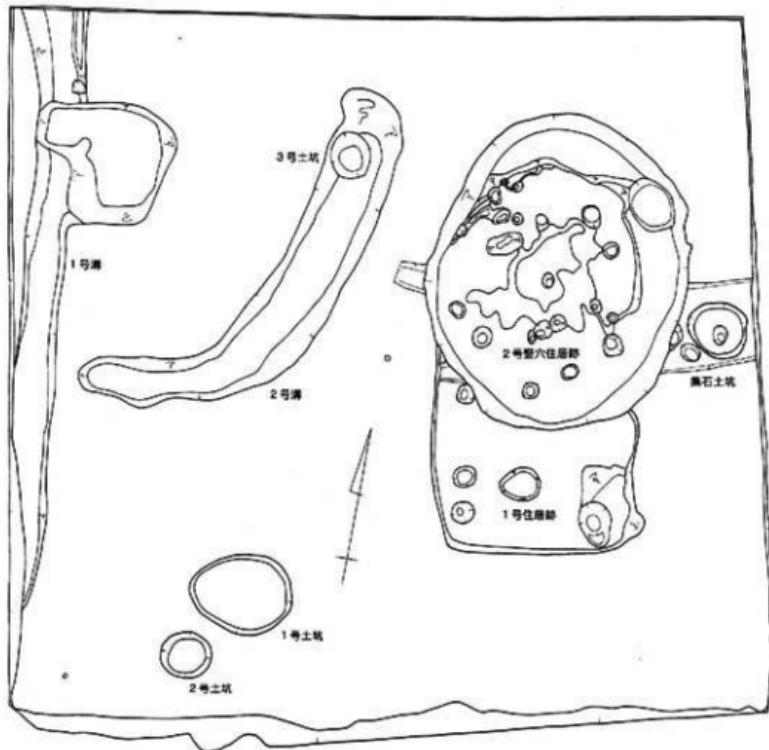
調査区域西辺に位置する。暗褐色土の帯状の落ち込みを発見し掘り下げたが、埋没土は非常に浅く直ぐに堅い遺構面となってしまった。幅50cm程の断面皿形の溝で、北側と南西側は調査区域外で完掘できなかった。遺構面は非常に堅くしまっており、地形に沿って南から北に傾斜している。一部に1m40cm四方の掘り込みがあったが、溝構築以前のものと思われるが不明白。磨石が1点出土しているが、時期の特定できるような遺物の出土は無く、遺構の性格等は不詳と言わざるを得ない。

#### <2号溝> (第50図)

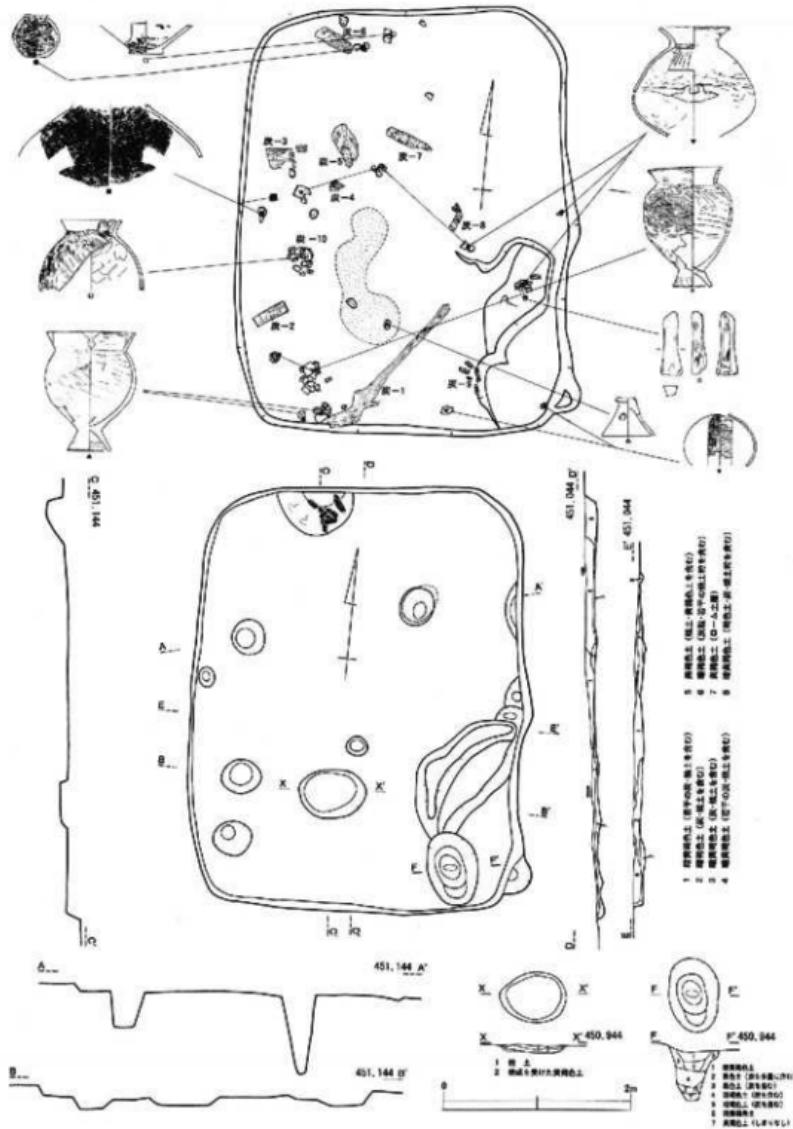
調査区域北西側の3グリッド～4グリッドにかけて位置する。暗黄褐色土の落ち込みを発見し掘り下げた。幅は60cm～1m30cm程、長さ約8mで弧状の溝となっている。確認面からの深さは12cm～35cmと南から北にかけて深くなっている。壁は部分的にではあるが、西側が直立気味で東側がなだらかに立ち上がる。砥石が出土しているほかは遺構の性格を特定できるような遺物はないが、あえて推測すると、弧状の平面形や断面形態からあるいは北西側にブリッジをもつ周溝墓の溝とみることもできるかもしれない。



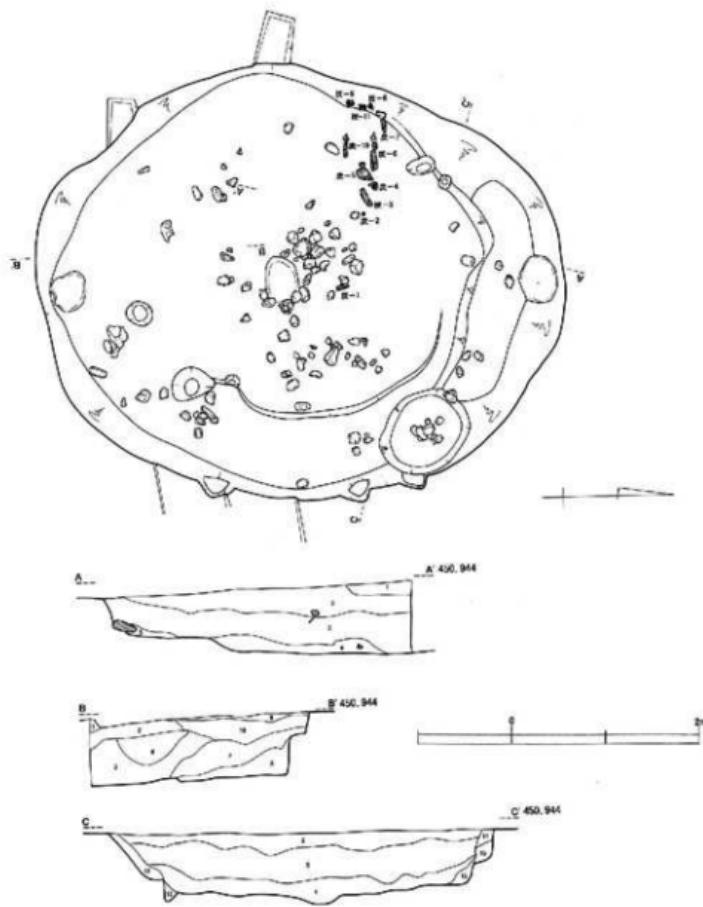
第42図 天神前地区調査位置図 (1/750)



第43図 天神前地区全体図 (1/100)

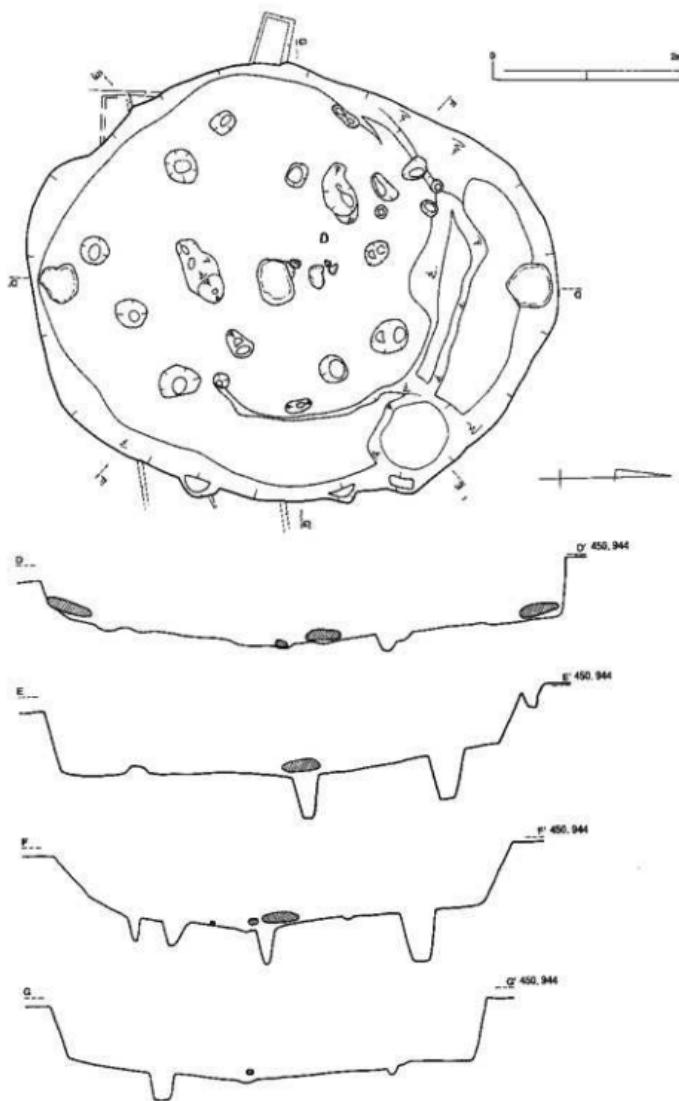


第44図 1号住居跡遺物出土状況・1号住居跡平面・断面図（1/60）

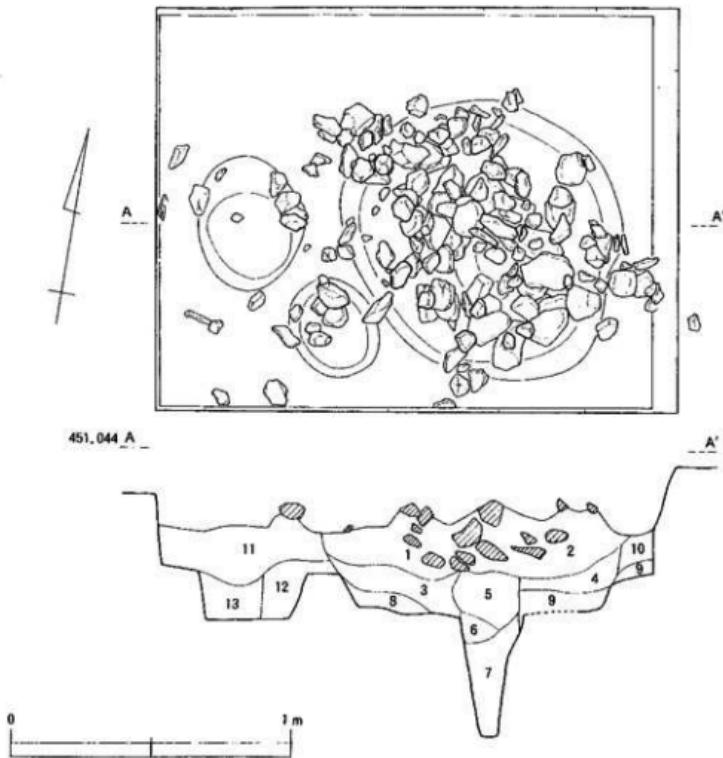


- 1. 黄褐色土 (粘土色土、炭化を含む)
- 2. 球状土 (高粘土質土を含む、ややしまりあり)
- 3. 球状土 (粘土、炭化を含む、ややしまりなし)
- 4. 球状土 (粘土質土を含む、ややしまりなし)
- 5. 球状土 (粘土質土、炭化を含む、ややしまりあり)
- 6. 球状土 (球状土質土、当量、切下の粘土を含む、しまりあり)
- 7. 球状土 (球状土質土、炭化を含む)
- 8. 球状土 (黄褐色土、若干の砂を含む)
- 9. 黄褐色土 (しまりのある黄褐色土を含む、1号柱附近を除く)
- 10. 黄褐色土 (球状土質土、2号柱子・柱跡を含む)
- 11. 黄褐色土 (ややしまりあり)
- 12. 黄褐色土 (黄褐色土を含む)
- 13. 黄褐色土 (球状土質土・僅かな泥炭を含む)
- 14. 黄褐色土 (ややしまりあり)
- 15. 黄褐色土 (粘土質・黄褐色土を含む、ややしまりあり)

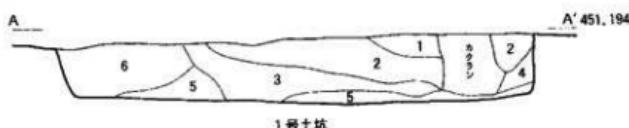
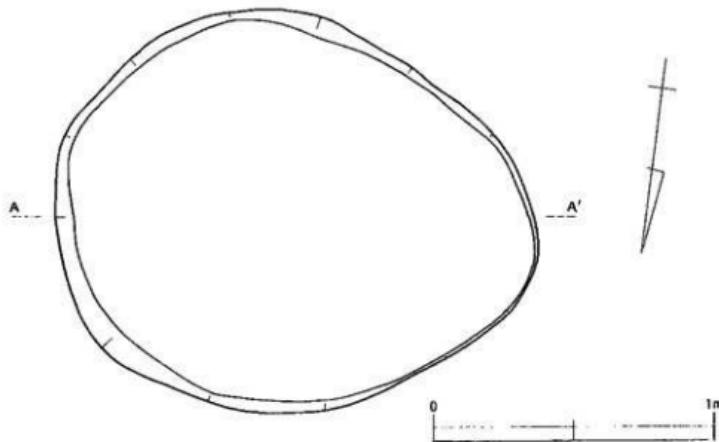
第45図 2号堅穴住居跡遺物出土状況・土層断面図 (1/60)



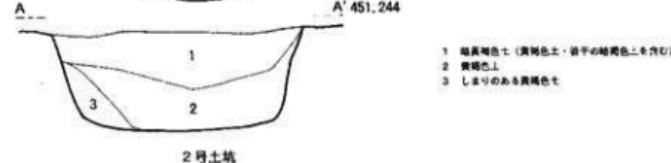
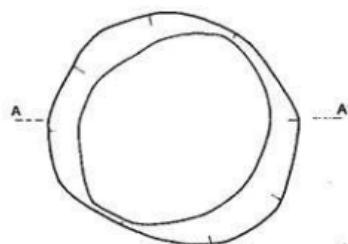
第46図 2号竪穴住居跡平面・断面図 (1/60)



第47図 集石土坑平面・断面図 (1/20)

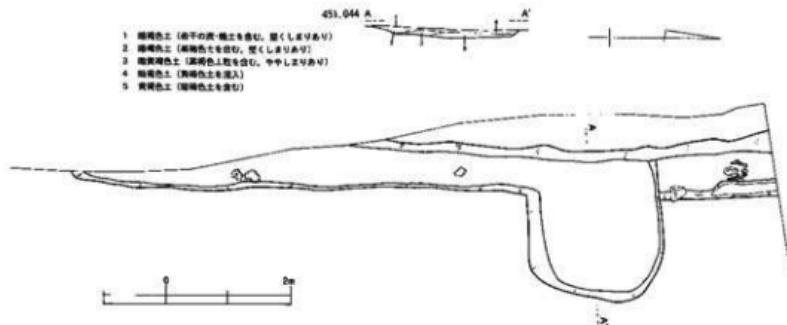


- 1 塗褐色土（基壇色土・塗黄褐色土を混入）
- 2 塗黄褐色土（やかしまりあり）
- 3 塗黄褐色土（黄褐色土塊を含む）
- 4 黄褐色土（塗黄褐色土を含む、やかしまりあり）
- 5 しまりのある黄褐色土
- 6 塗黄褐色土（小さな黄褐色土塊を含む）

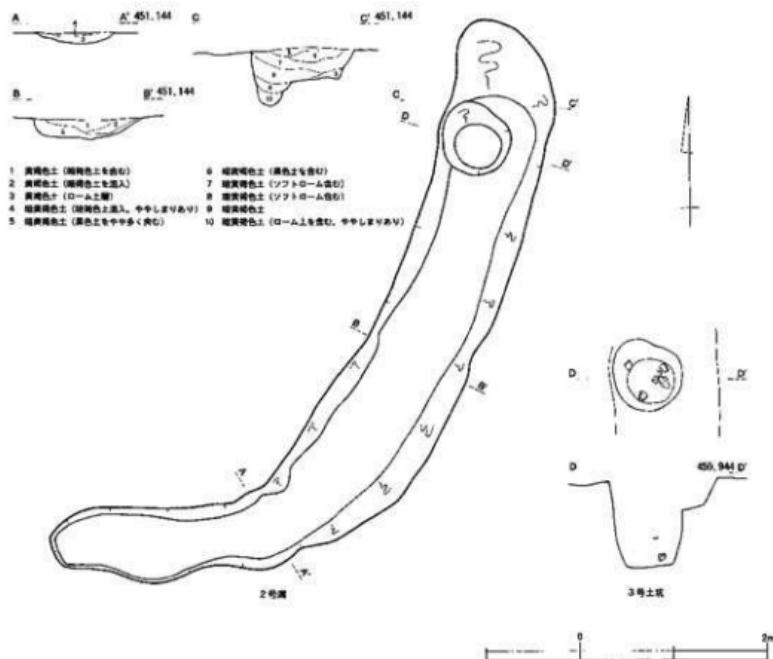


- 1 塗黄褐色土（黄褐色土・若干の塗褐色土を含む）
- 2 黄褐色土
- 3 しまりのある黄褐色土

第48図 1号土坑・2号土坑平面・断面図 (1/20)



第49図 1号溝平面・断面図 (1/90)



第50図 2号溝平面・断面図, 3号土坑平面・断面図 (1/60)

## 2節 遺物

### 1) 繩文時代の土器

<2号住居跡出土土器> (第51~53図1~62)

2号竪穴住居跡縦土中からは縄文時代中期中葉から後葉にかけての土器片が比較的まとまって出土している。

1・2は、4単位(半截竹管2本の組合せ)の櫛歯状工具による蘇手状文及び連続刺突文にボタン状貼付け文の施文されるものである。胎土中に纖維は含まれていない。神之木式に相当する。

3~7は、施文方法、胎土や色調などからおそらく同一個体と考えられる。地文として単節RL縄文が施文され、半截竹管(内皮)により平行沈線文、コンバス文や結節沈線文が施文されている。胎土中に纖維は含まれていない。黒浜式前半に併行する有尾式に相当する。

8~16は胎土に纖維を含み、条痕文の認められるものであるが、条痕文自体はナデ調整により部分的にしか確認できないものが多数である。11は補修孔のある胴部片である。12は口縁部の貼付け文である。14・15は底部付近の破片である。16は竪穴住居跡北壁の床面近くから出土したものである。

17は、底部は上底で、胴部上半でいったん内屈し口唇部に向かってやや外反する小型な土器である。全面にわたり、単節LR縄文及び単節RL縄文により不規則ではあるが羽状縄文が施文されている。胎土中には多量に纖維が含まれており、関山2式あるいは黒浜式の古段階に相当する。竪穴住居跡北側の床面より一段高い部分から出土している。

18・19は、施文方法、胎土や色調などからおそらく同一個体と考えられる。地文として単節LR縄文施文後に、幅4mmの半截竹管による連続爪形文の施文されているものであり、胎土中に纖維は含まれておらず、諸磯a式に相当する。

20~26は、沈線文系の土器であり、諸磯aからb式に相当する。いずれも胎土中に纖維は含まれていない。20は単節RL縄文施文後に幅10mmの半截竹管により口唇部に平行に沈線文の施文されたものである。21は単節RL縄文施文後に幅9mmの半截竹管により米字文の施文されたものである。22は単節RL縄文施文後に幅10mmの半截竹管により沈線文の施文されたものである。23は幅6mmの半截竹管によりおそらく弧線文の施文されたものであろう。24は幅6mmの半截竹管により沈線文の施文されたものである。25は幅6mmの半截竹管により櫛歯状文の施文されたものである。26は幅4mmの半截竹管により沈線文の施文されたものである。

27~29は浮線文系の土器であり、諸磯b式に相当する。地文として単節RL縄文施文後に、浮線により文様施文を行っている。浮線上にはヘラ状工具により刻みが施文されている。

30は浮線文の施文された、口縁部の強く屈曲する浅鉢形土器である。竪穴住居跡中央付近の縦土上層で出土している。31・33は浅鉢形土器である。32は口唇上に粘土紐を貼り付けたものである。口唇下3cmは粗い横ナデ調整、それ以下は粗い縦ナデ調整が行われている。

34～39は単節LR縄文の施文されたものである。37・38は、口唇部直下に指なで調整が行われている。40～45は単節RL縄文の施文されたものである。43は口唇部直下に指なで調整が行われている。46・47は無節R縄文の施文されたものである。48・49は無節L縄文の施文されたものである。

50～60は、器壁厚0.3～0.5mmで薄手の土器であり、内面には指痕が認められ、東海・近畿系のものと考えられる。胎土中に纖維は含まれていない。50は、胴部がやや膨らみ、口縁部が直線的に開く小型土器である。口唇部上には、半截竹管により刻みが施文されている。口縁部には半截竹管により横位波状沈線文が2条施文されている。口縁部と胴部の境には半截竹管によりコの字状刺突文が横走する。胴部には単節RL縄文が横位回転施文されている。51は口唇部下が指なでされているものである。52～55は、羽状縄文施文後に爪形文の施文されたものである。56～58は、羽状縄文の施文されたものである。59は指なで調整のみの認められるものである。60は上底状の底部片である。

61は底部に木葉痕のある底部片である。62は、明確ではないが木葉痕の認められるものである。  
＜1号土坑出土土器＞（第53図1・2）

土坑覆土中から2点出土している。1・2は、単節RL縄文の施文されたもので、おそらく前期後半（諸磯式）に位置づけられる。

＜3号土坑出土土器＞（第53図3・4）

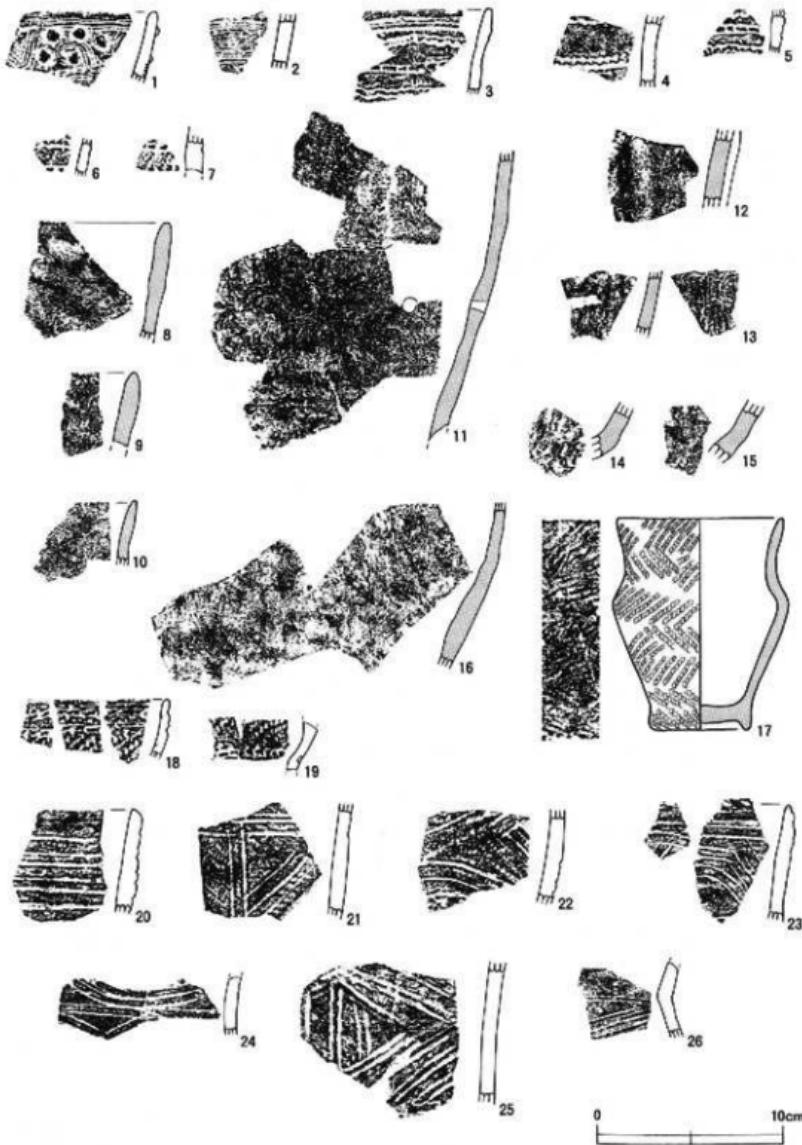
覆土中から前期中葉～後葉5片（136.2g）、中期後半9片（448.6g）が出土している。3・4は胴部区画文のやや崩れた地文に長めのハの字状文の施文されたものであり、これらは土坑底面から中層にかけて出土している。曾利新3式新段階に位置づけられる。

＜集石土坑出土土器＞（第53図5）

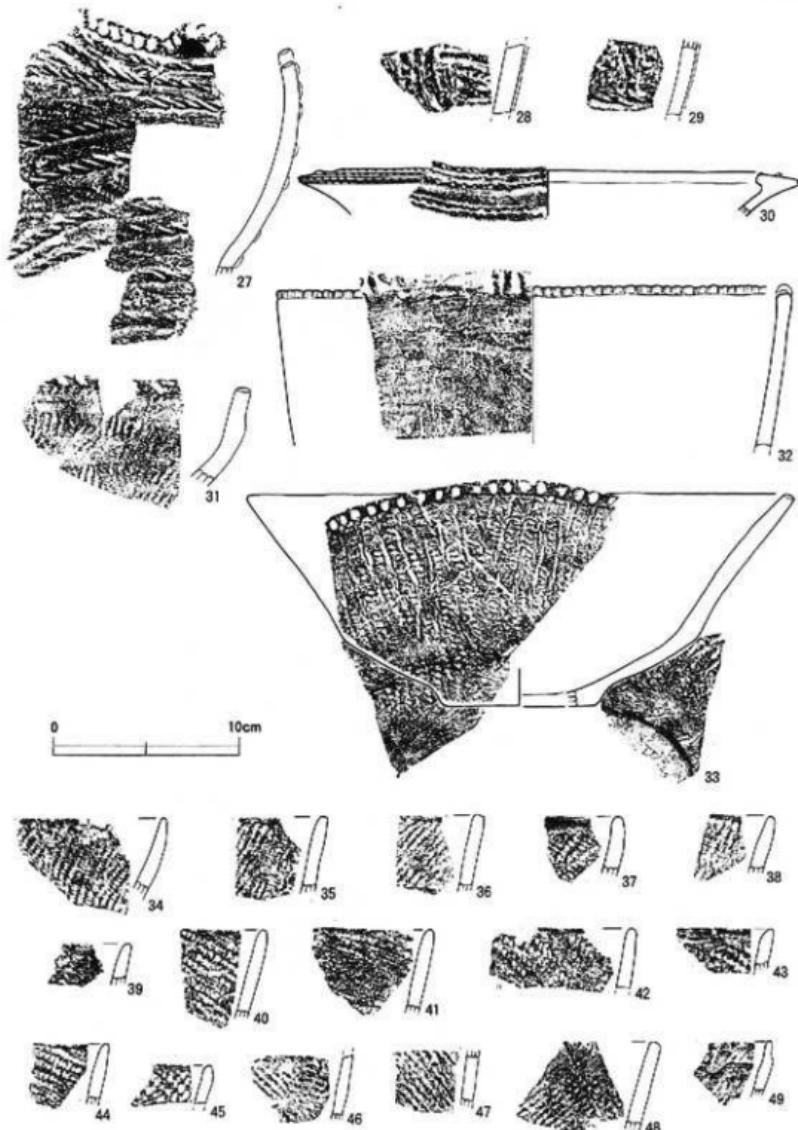
覆土中から8片（129.2g）が出土している。すべて前期後半（諸磯式）に位置づけられる。5は浮線文系の土器である。

＜包含層出土土器＞（第53図6～11）

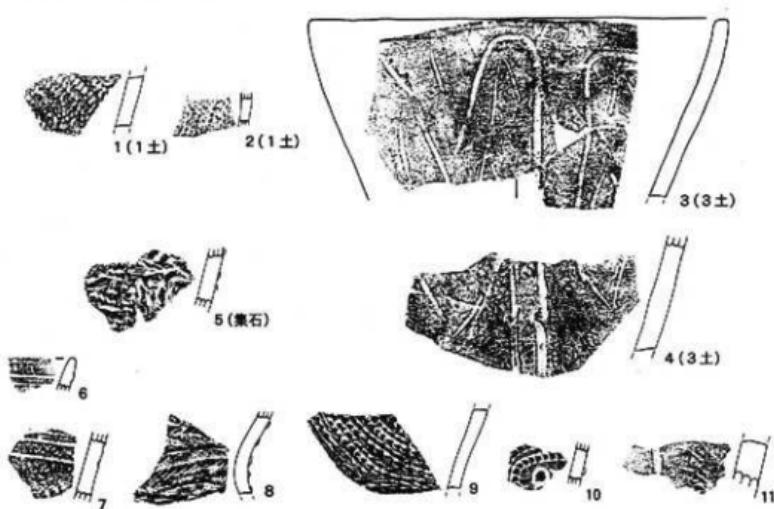
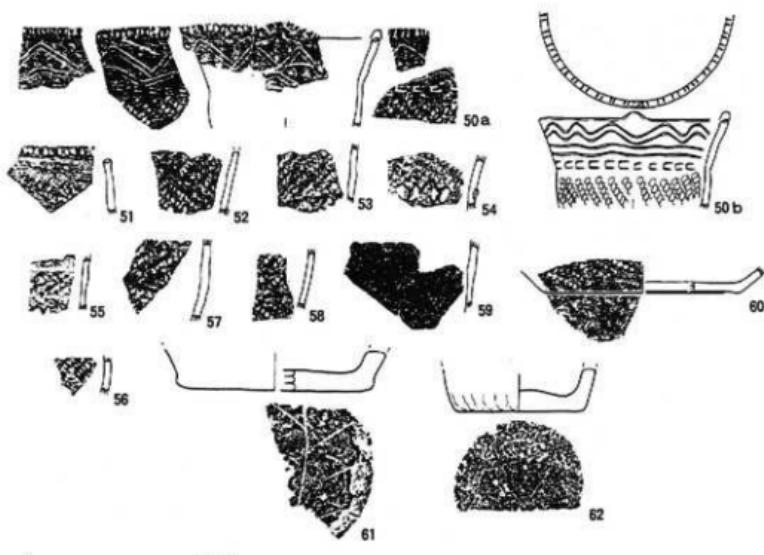
包含層からの縄文土器の出土は少なく、前期中葉～後葉が37片（437.6g）、中期後半10片（193.8g）と時期不詳の無文土器8片（59.2g）である。6・7は諸磯a～b式の沈線文系の土器である。8は諸磯b式の浮線文系で浮線上はヘラ状工具による刻みがある。9・10は諸磯c式の結節沈線文の施文された土器であり、10にはボタン状貼付文が付されている。11は無節L縄文施文後に垂下直状沈線の施文されたものであり、加曾利E4式に位置づけられる。



第51図 2号住居跡出土土器 (1) (1/3)



第52図 2号住居跡出土土器 (2) (1/3)



第53図 2号住居跡出土土器 (3), 1~3号土坑, 包含層出土土器 (1/3)

## 2) 縄文・古墳時代の石器（第54～57図、第3表）

### ＜1号住居跡出土石器＞（第57図）

36は砂岩製の磨石である。表・裏面ともに半分以上に長軸方向の磨り痕が残る。さらに、表面上端部に右上から左下方向に斜めの磨り痕がみられる。

39は層灰岩製の砥石である。断面が台形状で、表裏面・両側面は長軸方向の磨り痕が見られる。各面とも中央部がやや凹んでいて、多くの線状の傷がみられる。この傷は左側面以外では長軸方向に伸びており、左側面ではこのほかに短軸方向の傷もみられる。

40は黒曜石製の搔器である。住居内の1号土坑から出土。刃部は右側のみで、やや内湾気味に細かい剥離が入っている。刃部角は約50°。下部は欠損している。表面左側に残る素材面には、剥離に失敗した打点のあとがいくつか残っている。

37は安山岩製の磨石である。上部欠損。表面下端部の剥離は古く、剥離部分に長軸方向の磨り痕がみられる。また側面下部にわずかに敲打痕が残る。

38は安山岩製の凹石である。表裏面ともに2つの凹みがあり、その周辺には磨り痕がみられる。凹みの深さは最深部で平均5mm。両側面にも長軸方向の磨り痕が見られる。

1号住居内からは、このほかに黒曜石製の剥片1点、頁岩製の剥片2点が出土している。

### ＜2号住居跡出土石器＞（第54～56図）

1～5は黒曜石製の凹基の石鎚である。1は右脚部を裏面からの加撃で欠損している。抉り長は推定3mm。2は先端部を上部からの加撃により欠損。周辺加工で、素材の剥片の打面を基部側にしていることが分かる。抉り長は5mm。3は先端部を裏面からの加撃で、右脚部を表面からの加撃により欠損。抉り長は推定4mm。4は本地区出土の石鎚の中ではもっとも幅が広く、側縁が大きく外湾している。抉り長は5mm。5は先端部を裏面からの加撃により欠損している。側縁部の調整が粗く不均一で、裏面には素材の剥片の厚みが残っている。抉りも浅く、抉り長は2mm程度である。

6は黒曜石製の石鎚未成品である。素材に対して粗い調整を求心的に加えたあと、側縁部に当たる部分にわずかに細かい調整を加えている。

7・8・16・17はスクレイパーである。7は右側縁部から下端部にかけて刃部とする搔器で、黒曜石製である。左側縁部上半を表面からの加撃により欠損。側縁部の刃部には磨滅がみられる。また欠損部の裏面側に細かい剥離が見られ、この部分にも著しい磨滅がみられる。刃部角は側縁部が45°、先端部が41°。8は黒曜石製の搔器である。右側縁部から先端部までを刃部とする。表面には礫面を残し、裏面にもほとんど調整がみられない。側縁部全体に刃部の磨滅がみられる。刃部角は50°。16は珪質頁岩製の搔器である。礫面を残す剥片の一部を粗く加工して利用している。表面下端部の刃部は、刃部角47°をはかる。17は黒曜石製の削器である。下端部を表面からの加撃により欠損。刃部は右側縁部で、刃部角は51°をはかる。左側縁部中央には、幅11.0mmで2.5mmの抉りが入っている。また、上端部にみられる左右からの加工は、石匙のつまみ部を作出

しようとしたものともみることができ、石匙未成品の可能性も残る。

9から14は石匙である。9は黒曜石製の横型の石匙である。右側縁部を下からの加撃により欠損。周辺加工でつまみ部には自然面が残る。刃部の平面形態は外湾、立体形態は直線である。10は黒曜石製の横型の石匙である。剥片素材で、つまみ部を中心に周辺加工がなされている。刃部の平面形態は外湾、立体形態は直線である。11は黒曜石製の横型の石匙である。剥片素材に周辺加工がされ、裏面はつまみ部にだけ調整がなされている。刃部は平面・立体形態とも直線で、磨滅が著しい。12は珪質頁岩製の縦型の石匙である。下端部を表面からの加撃により欠損。横長剝片を素材として、素材打面を横にして利用している。裏面に残る穂面は、素材作出時の打面になっている。表面は周辺加工で、つまみ部には加工が少ない。裏面には調整が見られない。13は珪質頁岩製の縦型の石匙である。表面は周辺加工がなされ、穂面を残している。裏面はつまみ部と下端部のみに調整が入っている。剝片を素材とし、素材打面をつまみ部側にして使用している。下端部には、抉り長3mmの抉りが入っている。左側縁部には磨滅がみられるが、右側縁部・抉り部にはみられない。14は頁岩製の横型の石匙である。周辺加工で、表裏面ともに素材面を残す。刃部裏面に調整はみられない。刃部の平面形態は直線で、立体形態は湾曲している。

15は黒曜石製の石核である。

18・19はビエスエスキューである。18はチャート製で、上下端部に細かい剝離がみられる。19は黒曜石製で、上下端部と左側縁部に細かい剝離がみられる。

20から24は磨石である。20は多孔質安山岩製で、上部を表面からの加撃で欠損。表面・両側面は長軸方向の磨り痕がみられる。裏面は右上から左下の方向の磨り痕が全面にみられる。下端部には、わずかに敲打痕がみられる。21は多孔質安山岩製で、表裏面・左側面に長軸方向の磨り痕がみられる。22は安山岩製で、表裏面・両側面に長軸方向の磨り痕が見られ、特に左側面は著しい。23は安山岩製で、上部を表面からの加撃により欠損。両側面に磨り痕がみられる。また、下端部に平坦な磨り痕がみられる。24は安山岩製で、表面上端部・右側面に長軸方向の磨り痕がみられる。また上端部にはわずかに敲打痕がみられる。

25から27は凹石である。25は多孔質安山岩製で、表面に2つ、右側面に3つの凹みがある。左側面には、短軸方向に伸びるわずかな凹みがある。表面周縁部には磨り痕があり、裏面は全面に磨り痕がみられる。凹みの深さは平均約2mmと浅い。26は安山岩製で、表面に2つの凹みがある。凹みの深さは3mm、表面の凹みの周辺・上下端部・右側面に磨り痕がみられる。27は安山岩製で、表裏面ともに3つの凹みがある。凹みは最深部で6mm、平均約3mm。左側面上部にわずかに磨り痕がみられる。

28は敲石である。安山岩製。裏面にみられる敲打痕の周辺の剝離は、敲打の際に生じたものとみられる。表裏面にはともに凹みがみられる。

29・30は磨製石斧である。29は蛇紋岩製で、撥形をしている。基部に敲打のような痕が残る。30は蛇紋岩製で、短冊形をしている。基部は裏面からの加撃により欠損。磨き残しあるいは磨き

後の傷が多くみられる。

31は層灰岩製の打製石斧である。短冊形の形態で、刃部は斜めになっている。右側縁部は節理面で剥離してしまっている。

32は粘板岩製の礫器である。偏平な様に大きく2回器形の調整を加え、3方向から細かく調整している。表裏面とも礫面が残る。刃部の磨滅はみられない。

33は安山岩製の敲石である。敲打痕の周辺には敲打の際に生じたと思われる剥離がいくつかみられる。両側面には、長軸方向の磨り痕が著しくみられ、左側面には磨り痕よりも新しい剥離がみられる。

34・35は安山岩製の磨石である。断面形は三角形をなす。ともに稜磨石といわれるもので、側面に、長軸方向の著しい磨り痕がみられる。この磨り面は、いずれも断面三角形の最短辺の対角にあり、磨ったことによって平坦な面が形成されたものである。

2号住居跡からは、このほかに黒曜石製の剥片90点・使用痕ある剥片4点・加工痕ある剥片25点・砂片11点、チャート製の剥片7点・使用痕ある剥片1点、メノウ製の加工痕ある剥片1点、珪質頁岩製の剥片9点・加工痕ある剥片4点・ホルンフェルス製の剥片3点が出土している。

#### <1号溝出土石器> (第57図)

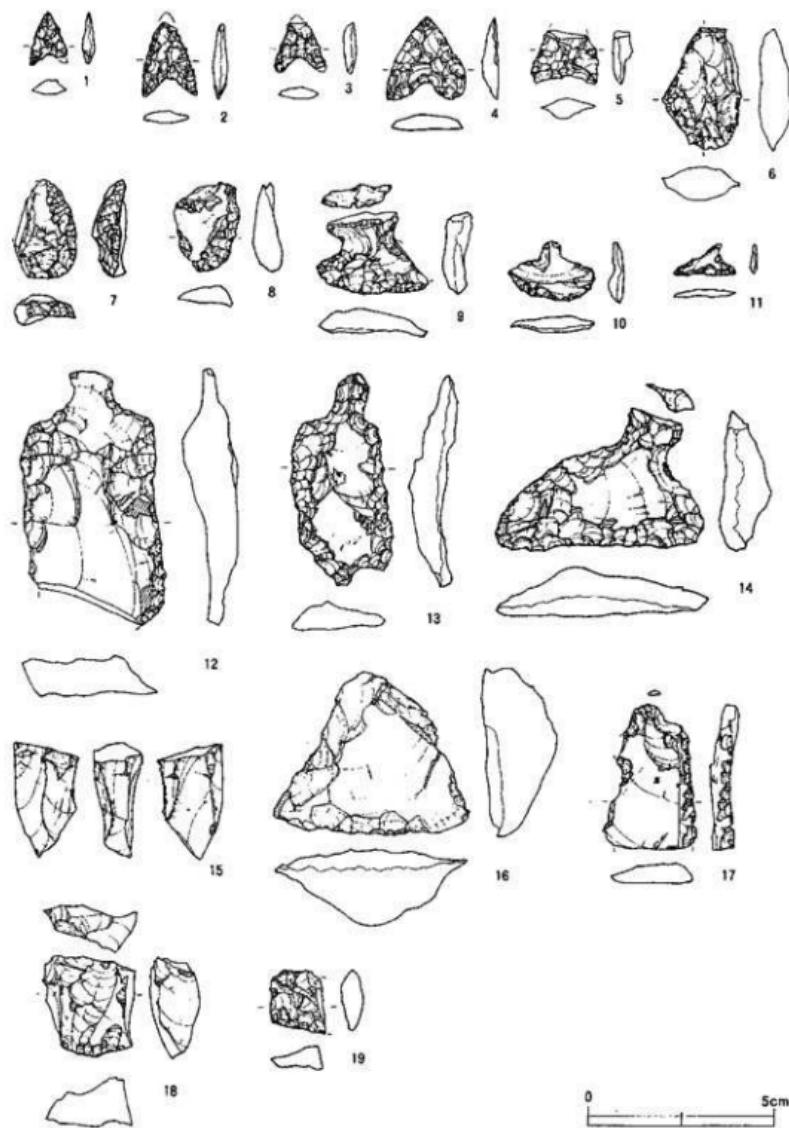
41は安山岩製の磨石である。上部欠損。

#### <2号溝出土石器> (第57図)

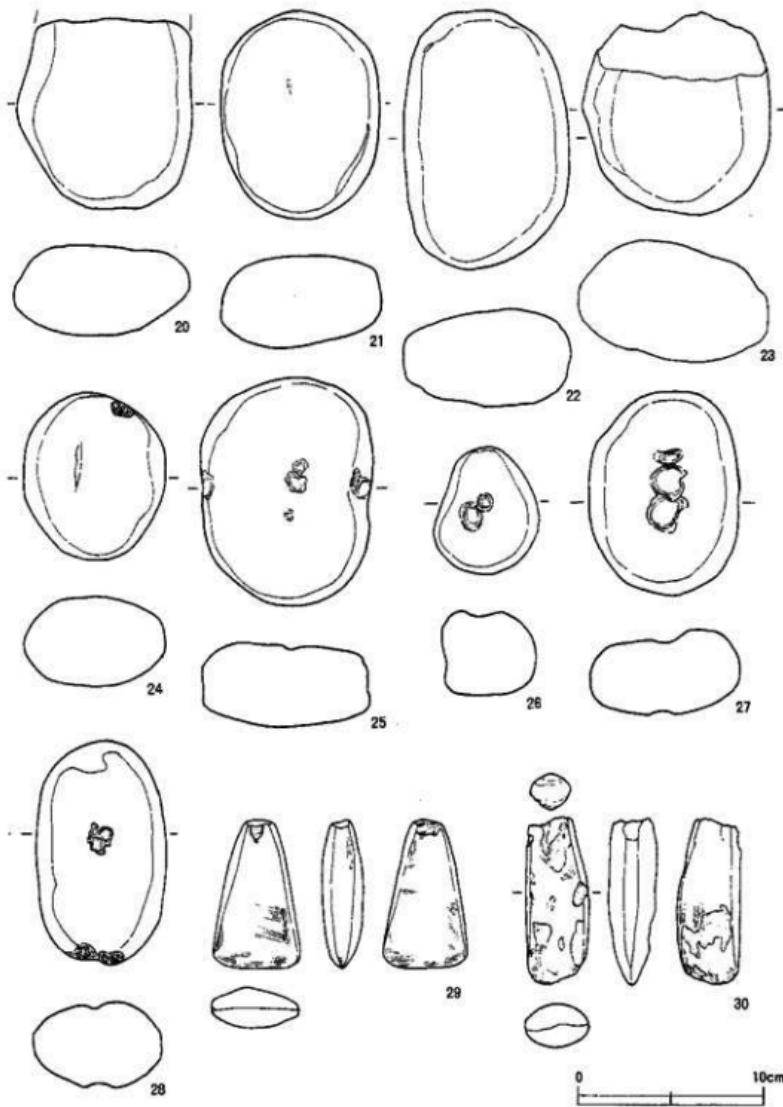
42は層灰岩製の砥石である。上下両端部を欠損。表面下半部・裏面上半部・両側面部は長軸方向、表面上半部・裏面下半部は左上から右下の方向で、摩擦痕および線状の深い傷がはいっている。

43はチャート製の石礫未成品である。2号溝内の3号土坑から出土している。凹基無茎の石礫の未成品と思われ、調整は右半分と基部の抉りのみに入っている。剥片素材で、素材の打面を基部側にしている。裏面中央部は、素材の剥片の厚みが残っている。

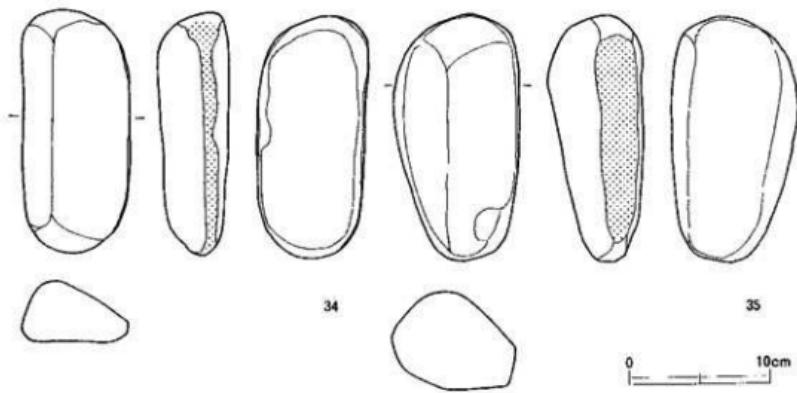
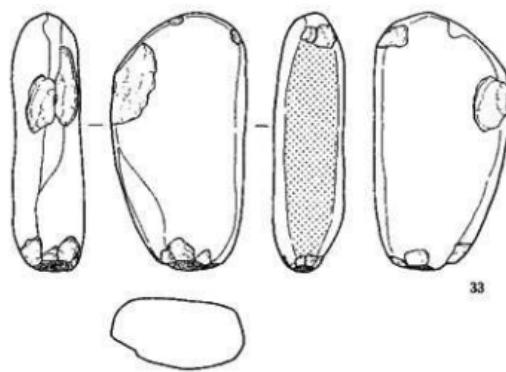
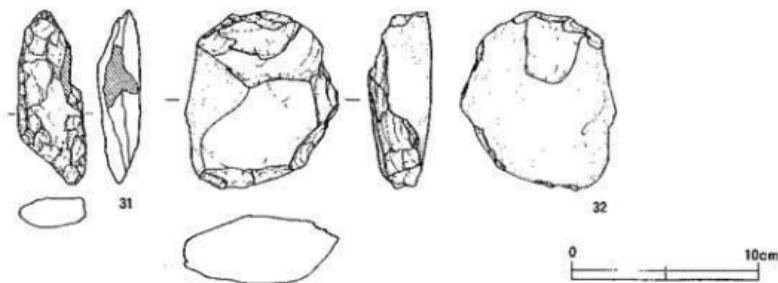
2号溝からは、このほかに溝内3号土坑から黒曜石製の剥片が1点出土している。



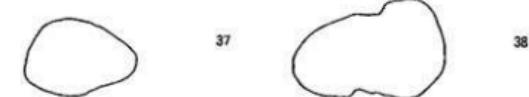
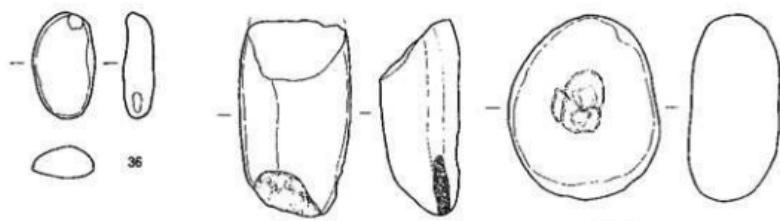
第54図 2号住居跡出土石器 (1) (2/3)



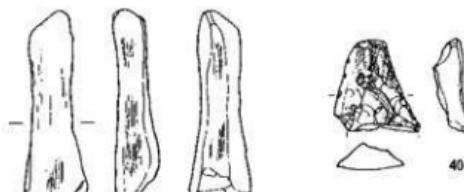
第55図 2号住居跡出土石器 (2) (1/3)



第56図 2号住居跡出土石器 (3) (31・32 1/3, 33～35 1/4)

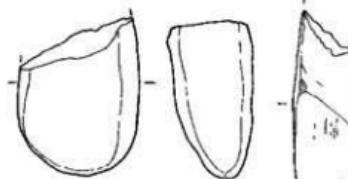


0 10cm



39      40

0 5cm



41

0

10cm

0 5cm



43

第57図 1号住居跡, 1号・2号溝出土石器 (36~38·41·42 1/3, 39·40·43 2/3)

圖 No.	地點 No.	器	材	出土地点	高さ(mm)	幅さ(mm)	厚さ(mm)	備考
54	1	石	石	2 号 壁 穴	14	9	3.5	石面に自然面す
	2	S-15	4	石	2 号 壁 穴	20	15	3.5
	3	4	S-02	5	石	2 号 壁 穴	13	3.5
	4	5	10	石	2 号 壁 穴	22	21.5	0.4
	5	6	石	2 号 壁 穴	14	18	6	先端部右側面欠
	6	7	5	石	2 号 壁 穴	23	21	9
	8	25	浦	石	2 号 壁 穴	17	9	5.3
	9	9	8	石	2 号 壁 穴	24	17.5	3.3
	10	10	3	石	2 号 壁 穴	23	30	5.5
	11	11	7	石	2 号 壁 穴	8	17	6
	12	12	5	石	2 号 壁 穴	16	22.5	4
	13	S-01	1	石	2 号 壁 穴	68	38	0.9
	14	14	11	石	2 号 壁 穴	57	24.5	4
	15	15	13	石	2 号 壁 穴	37	55	30.9
	16	16	13	石	2 号 壁 穴	39	25	14
	17	17	24	石	2 号 壁 穴	45	53.5	20
	18	18	17	石	2 号 壁 穴	31	17.5	30
	19	19	18	石	2 号 壁 穴	27	24.5	4.8
	20	20	19	石	2 号 壁 穴	17	14.5	12.5
	21	21	20	石	2 号 壁 穴	140	93	9.2
	22	22	20	石	2 号 壁 穴	113	85	4.5
	23	23	21	石	2 号 壁 穴	141	90	5.2
	24	24	21	石	2 号 壁 穴	110	101	5.2
	25	25	21	石	2 号 壁 穴	90	77	4.8
	26	26	21	石	2 号 壁 穴	124	92	4.5
	27	27	S-18	石	2 号 壁 穴	69	67	2.5
	28	28	S-16	石	2 号 壁 穴	110	80	4.5
	29	29	S-06	石	2 号 壁 穴	121	69	5.5
	30	30	S-07	石	2 号 壁 穴	80	47	5.5
	31	56	15	石	2 号 壁 穴	90	34	120
	32	32	S-05	石	2 号 壁 穴	93	36	120
	33	33	S-10	石	2 号 壁 穴	182	83	72.9
	34	34	S-09	石	2 号 壁 穴	96	51	72.9
	35	35	S-12	石	2 号 壁 穴	173	76	45
	36	57	S-4	石	2 号 壁 穴	175	89	500
	37	37	S-2	石	2 号 壁 穴	75	45	140
	38	38	S-3	石	2 号 壁 穴	105	60.5	120
	39	39	S-1	石	2 号 壁 穴	100	82	100
	40	40	21	石	2 号 壁 穴	51	16.5	53
	41	41	19	石	1 号 土 壁	25	22.5	480
	42	42	20	石	1 号 土 壁	25	7	3.1
	43	43	22	石	1 号 土 壁	94	46.5	300
	-	-	9	石	1 号 土 壁	94	22	6
	-	-	16	石	1 号 土 壁	35	23	2.4
	-	-	S-11	石	1 号 土 壁	99	15	10
	-	-	42	石	1 号 土 壁	60	26.5	200
	-	-	43	石	1 号 土 壁	13	22	3
	-	-	9	石	1 号 土 壁	114	88	80

第3表 天神前地区出土石器一览

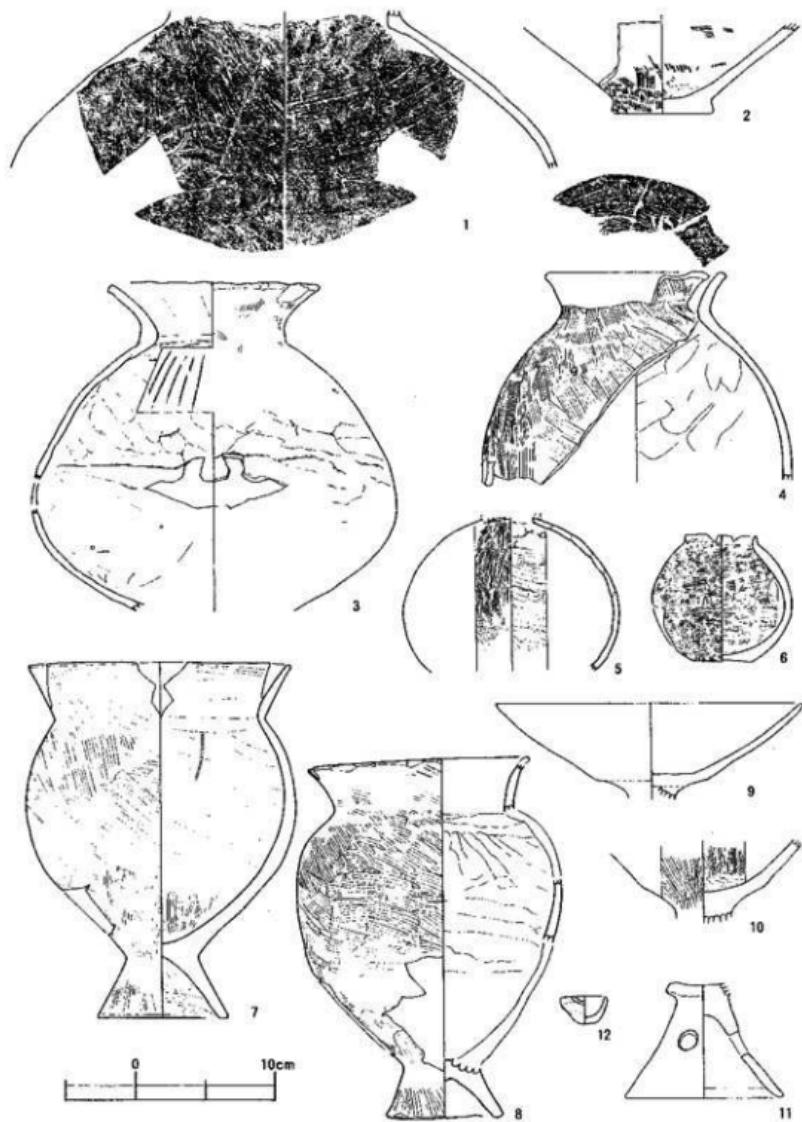
## 3) 古墳時代の土器 (第58図、第4表)

古墳時代の遺物は土器が主体でそのほとんどが1号住居跡からの出土となっている。石器に関しては前項で述べたので、以下1号住居跡出土遺物として一覧表に土器の観察をまとめた。

第4表 1号住居跡出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調 (内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径	—			
1	土師器	壺	—, —, —	白・赤・黒色粒子を含む	にぶい橙色 ～にぶい褐色	内面～ヘラ撫で 外面～胸部に斜位刷毛目 脚部破片	
2	土師器	壺	—, —, 7.0	砂粒を含む	にぶい橙色	内面～彎曲状工具とヘラにより整形 外面～彎曲状工具とヘラにより整形した後ヘラ撫で 底部～ハラ削り 底部破片	
3	土師器	壺	—, 14.6, —	雲母・白・赤・黒色粒子を含む	橙色、一部に にぶい黄褐色 橙色～赤褐色、 一部黒変	内面～横擦で 外面～口縁部は刷毛整形の後横擦で 脚部に継続沈線あり 1/2残	
4	土師器	壺	—, 12.0, —	雲母・白・赤・黒色粒子を含む	にぶい橙色 にぶい褐色	内面～ヘラ撫で 外面～斜位刷毛目 口縁部～脚部破片	
5	土師器	壺	—, —, —	雲母・白・赤・黒色粒子を含む	橙色 橙色、一部黒變	内面～脚部は、上部指痕族？中間部横刷毛目、下部斜位刷毛目が施されている 外面～脚部は上部と下部に横か内、中間部縱方向の丁寧な磨き 1/2残	
6	土師器	小壺	8.9, 5.0, 4.0	白・黒・赤色粒子を含む	橙色	内面～磨き、脚部中ほどに指痕族 がみられる 外面～丁寧な磨き 1/2残	
7	土師器	台付壺	25.1, 18.4, 9.1	雲母・白・赤・黒色粒子を含む	橙色、一部赤色、黒色	内面～脚部横擦で、みこみ部に縱刷毛目、脚台部は横刷毛目 外面～縦～斜め方向の刷毛目 2/5残	
8	土師器	台付壺	25.3, 15.4, 8.3	雲母・白・黒色粒子を含む	橙色、一部黒變	内外面～口縁部横擦で 内面～撫で 外面～斜め刷毛目 2/3残	
9	土師器	高坏	—, 21.8, —	砂粒を含む	にぶい橙色	内面～細かい刷毛目で調整後磨き 外面～磨き、脚部は荒削り後磨き 脚部欠損	
10	土師器	高坏	—, —, —	細かな砂粒を含む	黒褐色 にぶい橙色 一部黒變	内外面～磨き 脚部欠損	
11	土師器	高坏	—, —, 11.0	細かな砂粒を含む	明褐色	内面～削り、脚部縁は撫でられている 外面～撫で、磨きで仕上げられているが 磨滅により不明瞭 脚部に3孔があく 脚部欠損	
12	小型 捏土 器	手型 捏土 器	2.0, 3.0, 1.0	金色雲母・砂粒を含む	にぶい黄橙色	手こねでつくる 口縁部若干欠損	



第58図 1号住居跡出土遺物 (1/4)

### 3節 坂井天神前遺跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

坂井天神前遺跡の1号住居跡（弥生時代末～古墳時代前期）は、焼失家屋であり、住居構築材と考えられる炭化材が出土している。一方、2号住居跡からも、用途の詳細は不明であるが、炭化材が出土している。2号住居跡は、炭化材と同レベルから出土した土器から、縄文時代前期中葉～後葉の可能性がある。

本報告書では、これらの炭化材について樹種を明らかにし、用材選択等に関する資料を得る。

#### 1. 試 料

試料は、1号住居跡から出土した炭化材10点（炭-1～10）と2号住居跡から出土した炭化材1点（炭化物-1～11）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

#### 2. 方 法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

#### 3. 結 果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、広葉樹5種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・カエデ属・ムクロジ）とイネ科タケ亜科に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

- ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* secl. *Cerris*) ブナ科 環孔材で孔隙部は1～2列、孔隙外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。
- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* secl. *Prinus*) ブナ科 環孔材で孔隙部は1～4列、孔隙外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。
- ・クリ (*Castanea crenata* Sied. et Zucc.) ブナ科クリ属 環孔材で孔隙部は1～4列、孔隙外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

第5表 樹種同定結果

遺構名	時代・時期	試料名	用途など	樹種
1号住居跡	弥生時代末～古墳時代前期	炭-1	住居構築材	カエデ属
		炭-2	住居構築材	ムクロジ
		炭-3	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		炭-4	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		炭-5	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		炭-6	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		炭-7	住居構築材	カエデ属
		炭-8	住居構築材	イネ科タケ亜科
		炭-9	住居構築材	イネ科タケ亜科
		炭-10	住居構築材	イネ科タケ亜科
2号住居跡	縄文時代前期中～後葉	炭化物-1	不明	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		炭化物-2	クリ	
		炭化物-3	クリ	
		炭化物-4	クリ	
		炭化物-5	クリ	
		炭化物-6	クリ	
		炭化物-7	クリ	
		炭化物-8	クリ	
		炭化物-9	クリ	
		炭化物-10	クリ	
		炭化物-11	クリ	

・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った梢円形、単独および2～3個が複合、晚材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～30細胞高。細胞壁の厚さが異なる2種類の木織維が木口面において不規則な紋様をなす。

・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科

環孔材で孔隔壁部は1～4列、孔隔壁で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状～連合翼状、帶状およびターミナル状。

・イネ科タケ亜科 (Gramineae subfam. Bambusoideae)

雜管束が基本組織の中に散材する不齊中心柱をもつ。

タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

#### 4. 考察

1号住居跡の住居構築材と考えられる炭化材には、4種類の広葉樹とタケ亜科が認められた。このうち、タケ亜科は材質や出土位置を考慮すれば屋根を葺くのに用いたと考えられる。その他

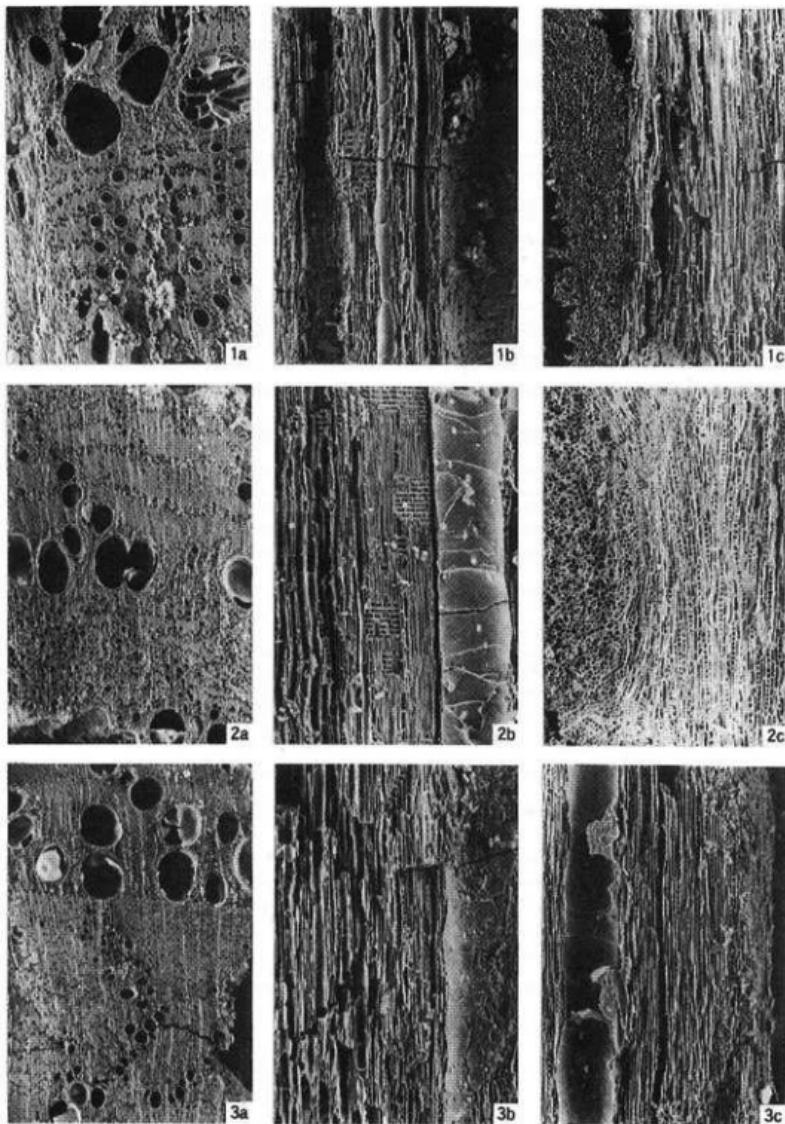
の部材は、住居の中央に向かって倒れているものが多いことから、垂木などの部位が残存したものと考えられる。樹種同定結果から、これらの部位にはクヌギ節を中心とした落葉広葉樹が用いられていたことが推定される。県内で同時期の住居構築材について樹種同定を行った例はほとんど知られていない。しかし、市内の半繩田遺跡や堂の前遺跡、長坂町の健康村遺跡で行われた調査でもクヌギ節やコナラ節が住居構築材に多く利用されている（高橋、1987；パリノ・サーヴェイ株式会社、1994；未公表資料）。これらの事例や今回の結果から、少なくとも弥生時代以降、これらの種類が住居構築材として県内で利用されていたことが推定される。このような住居構築材は、遺跡周辺から入手していたと考えられており（高橋・植木、1994）、本遺跡周辺にクヌギ節やコナラ節などの落葉広葉樹が生育する植生が見られたことが推定される。

一方、2号住居跡から出土した炭化材は、1点がコナラ節であったが、他は全てクリであった。炭化材の用途については詳細が不明であるが、炭化物2~11は比較的まとまって、遺構の中央に向かって倒れたような状況で出土している。このことから、炭化材は遺構の上屋の構造材等の可能性がある。多く利用されているクリは、これまで県内で行われた縄文時代の住居構築材などにも多く確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993；植木、1997）。隣接する関東地方でも縄文時代にクリが多く確認されているが、古墳時代では全くほとんど確認できないことから、時代によって用材に違いがあったことが指摘されている（高橋・植木、1994）。今回の結果でも、1号住居跡ではクリが全く検出されていないことから、時代によって用材が異なっていた可能性がある。しかし、2号住居跡の炭化材の用途の詳細が不明なため、用途による用材の違いを示している可能性もある。そのため、今後同様の炭化物についてさらに資料を蓄積して、用材の傾向などを明らかにしたい。

#### <引用文献>

- パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）上北田遺跡から出土した炭化材および炭化種子の同定。  
「山梨県北巨摩郡白州町 上北田遺跡 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」，  
p.1-5，白州町教育委員会・峠北土地改良事務所。
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1994）健康村遺跡自然科学分析調査報告。「山梨県北巨摩郡長坂  
町 健康村遺跡 -（仮称）東京都新宿区区民健康村建設事業に伴う発掘調査報告書-」，p.  
116-128，新宿区区民健康村遺跡調査団。
- 高橋利彦（1987）炭化材について。「山梨県韮崎市 中本田遺跡・堂の前遺跡」，p.56-60，  
韮崎市教育委員会・峠北土地改良事務所。
- 高橋 敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択。PALYNO, 2, P.5-18.
- 植木弥生（1997）社口遺跡から出土した炭化材の樹種。「社口遺跡第3次調査報告書」，p.194  
-198，山梨県北巨摩郡高根町教育委員会・社口遺跡発掘調査団。

図版 I 炭化材(1)



1.コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (1号住 炭-6)

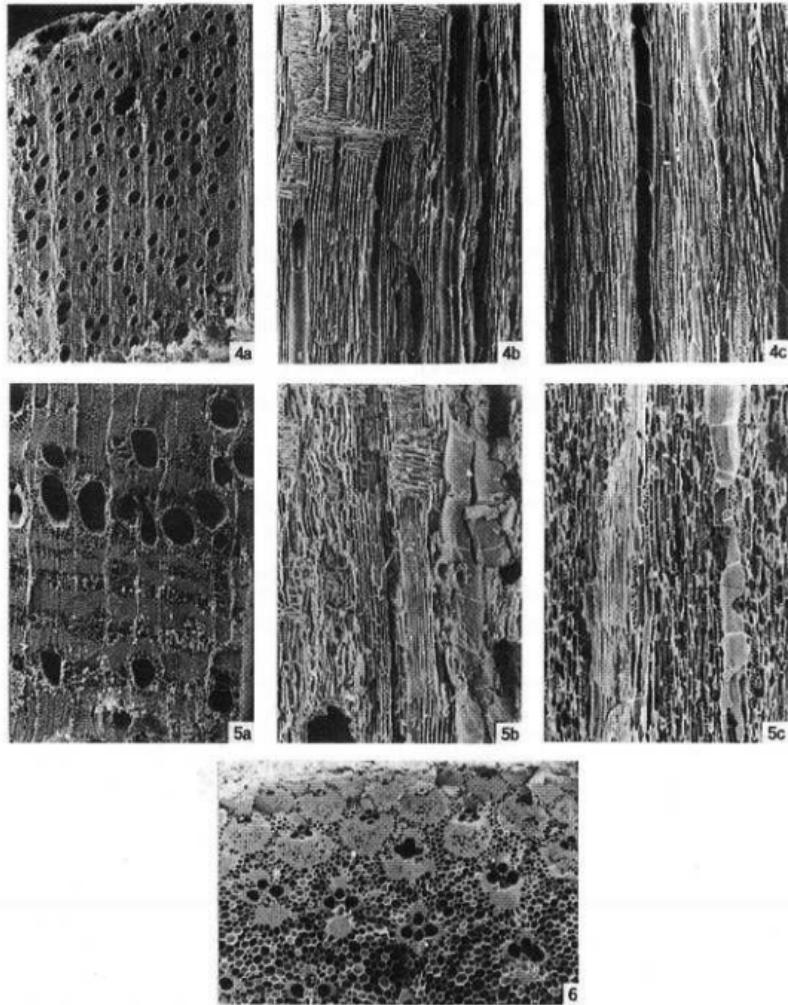
2.コナラ属コナラ亜属コナラ節 (1号住 炭-5)

3.クリ (2号住居跡 炭-8)

a : 横断面, b : 放射断面, c : 接線断面

— 200  $\mu$ m : a  
— 200  $\mu$ m : b, c

図版II 炭化材(2)



4. カエデ属 (1号住 炭-1)

5. ムクロジ (1号住 炭-2)

6. イネ科タケ本科 (1号住 炭-10)

a : 横断面, b : 放射断面, c : 接線断面

— 200  $\mu$ m : 4-5a, 6  
— 200  $\mu$ m : 4-5b, c

#### 4 節 遺構・遺物の検討

##### 縄文時代

本調査区からは前期中葉の住居跡1軒、前期後半の集石土坑1基と中期後半の土坑1基を検出した。ここでは、2号住居跡の住居構造及び出土した石器について若干の検討を行う。

##### 1) 2号住居跡について（第59・60図）

2号住居跡は、柱穴の配置から2軒の重複の可能性が高い。1軒は、第59図で新主柱穴（P1～P6）としたピットで構築された、長軸5.62m・短軸4.58mのほぼ円形の竪穴住居である。炉と考えられる焼土や大型扁平礫（「固定式石皿」）の確認位置から、この竪穴住居の方が新しく構築されたことがわかる。その前段階には、旧主柱穴（P7～P10）の4本主柱穴と壁柱穴（P11～P20）で構築された、長軸3.64m・短軸2.82mの稍円形の竪穴住居がある。旧段階の竪穴住居跡の覆土はほとんどなく、遺物は出土していないのでその所属時期を決める要素がほとんどない。しかし、白州町上北田遺跡では同様の構造を持つ竪穴住居跡が多数確認され、出土遺物から前期中葉（中越～神ノ木式期）に位置付けられていることから、旧段階の竪穴住居は概ねこの時期の所産であろう。新段階の竪穴住居は床面から下層にかけて出土する土器から検討すると前期中葉（神ノ木～有尾式期）の所産である。新段階の竪穴住居には壁際と竪穴中央付近に南北に並ぶ直径40～50cmの扁平な大型礫（固定式石皿）が床面にほぼ接して確認された。固定式石皿は中越～神ノ木式期に多く見られるものであることが長野県阿久遺跡の調査の中で指摘されている（石上1982）。北巨摩地域では白州町板橋遺跡2号住居跡、上北田8・17・18号住居跡（杉本他1993）等で確認されているがいずれも中越～神ノ木式期のものであり、本例がやや新しい時期のことがわかる。また、固定式石皿の出土量は住居1軒に1個であることが多く、本例のように3個あるものは管見の限りでは阿久遺跡住居跡24のみであり、特異であることを指摘できる。

##### 引用・参考文献

石上周蔵1982『第4章第3節3-(19)固定式石皿』『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報

告書—原村その5 昭和51・52・53年度—〈阿久遺跡〉本文編』

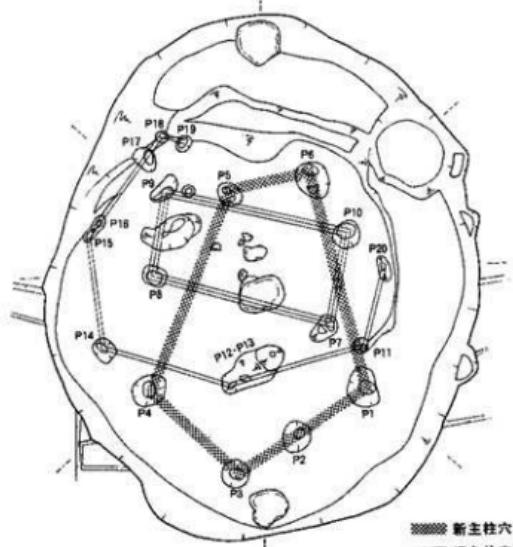
杉本充・武藤雄六1993『上北田遺跡』白州町教育委員会

##### 2) 出土石器について（第60・61図）

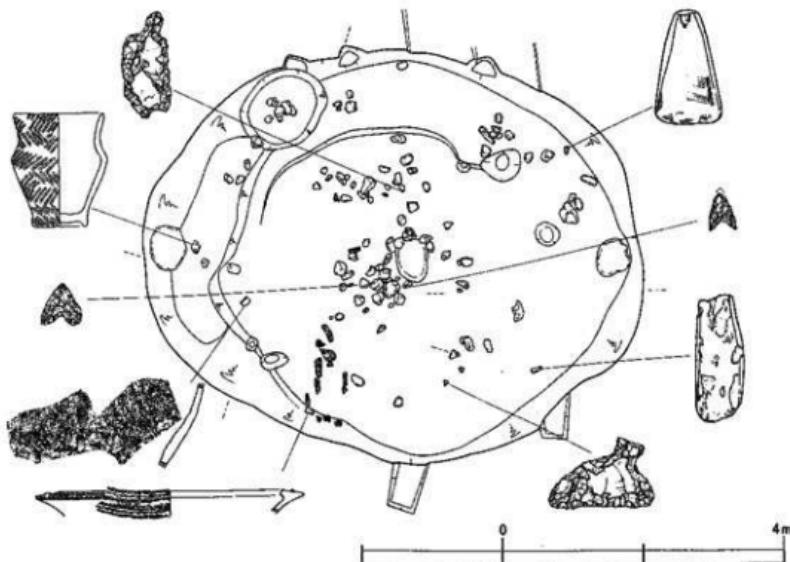
2号住居跡出土石器の特徴として、まず側面だけに著しい磨り痕がみられる稜磨石の出土があげられる。これは縄文時代前期にみられる器種で、本地區の2号住居跡からは3点出土している。また、出土している石器がすべて凹基盤で粗製のものがみあたらない。さらに石匙未成品の可能性のあるものも含めると、全石匙に占める縦型石匙の割合が約43%と多くなっている。これらの要素から、この住居跡が縄文時代前期のものである可能性が高いといえよう。

次に出土状況についてであるが、遺物は第60図にみられるように上下2層に分かれたかたちで出土している。しかしこの状況について、出土石器からは時期差の有無を確定することはできない。

次に、器種別にその特徴をみてみる。稜磨石の3点については、形態、大きさ、磨り面の場所に齊一性がみられる。断面三角形で、磨り面は断面の最短辺の対角にあたり、いずれも磨ったこ

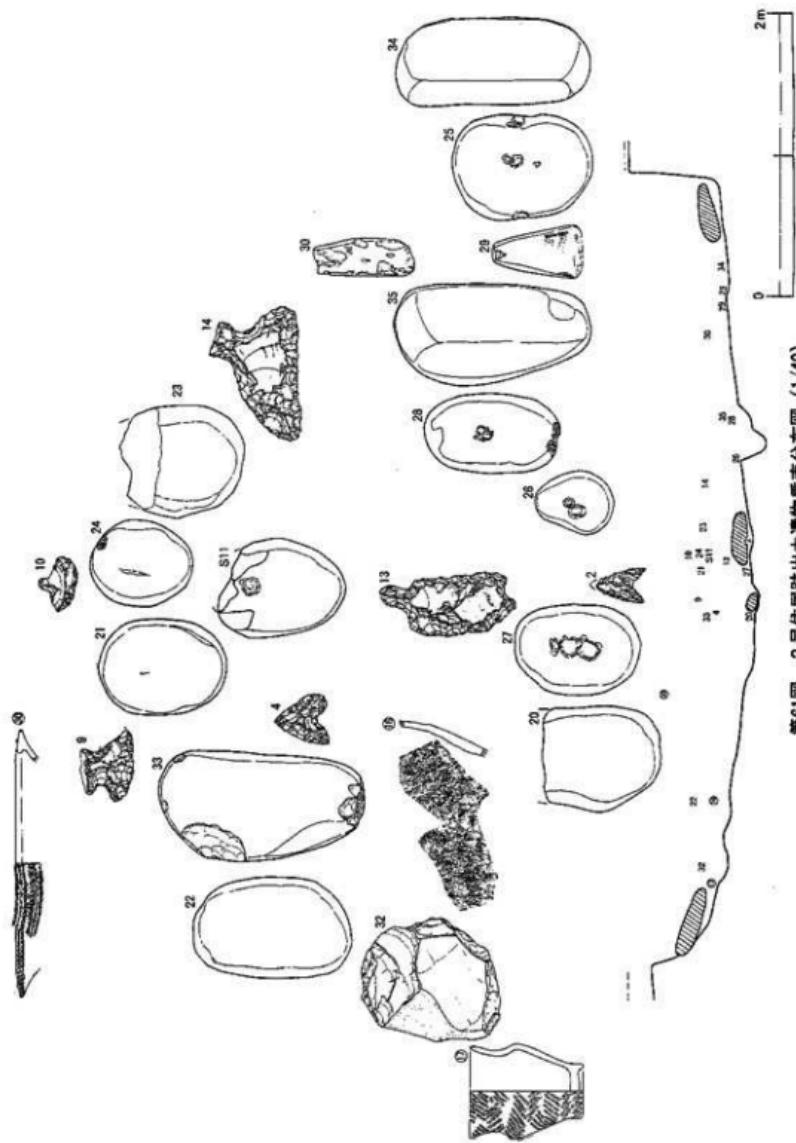


第59図 2号住居跡柱穴配置図 (1/60)



第60図 2号住居跡出土状況平面図 (1/80)

第61圖 2號住居跡出土遺物垂直分布圖 (1/40)



とで平坦な面が形成されたとおもわれる。これは本遺跡の特徴であるといえよう。また、13の縦型石匙は、先端部が抉れている点が注目される。この抉りには著しい使用痕が見られない。石匙に関して、2号住居跡出土の縦型の石匙はいずれも大形で、2点が非黒曜石製で、やや小さめの未成品の1点だけが黒曜石製である。対して横型の石匙は3点が小形の黒曜石製で、1点が大形の頁岩製である。大形の石匙は、縦型で非黒曜石製である傾向がみられる。

### 3)志村氏調査区と本調査区の関係

志村淹蔵氏による天神前遺跡の調査は昭和29年の嚴寒の2月に行われた。その結果、諸磯式期の竪穴住居跡およびそれに関連する遺物が出土したことが『坂井』の中で報告されている。その地籍については、藤井町上野区小字天神前405番地であることが触れられているが、遺構検出位置の細かい図面は『坂井』の中では掲載されておらず、405番地内のどこであるかは不明であった。しかし、「坂井遺跡管理委託契約書」という書類の中で、竪穴住居跡の場所について詳細な図面が別添されていた。それをもとにして作成したのが第62図である。

本書の「遺跡の立地」で触れたとおり、志村氏調査区と本調査区は沢を挟むとともに距離も200m程度離れている。そのような地点の違いはあるものの出土資料に関しては共通点が多い。志村氏調査区からは諸磯式土器が中心となって出土し、数量は1片ではあるが織維土器が出土している。本調査区は既に述べたように織維土器を作った時期と諸磯式期が出土している。両地区とも前期中葉から後葉以外の遺物は極端に少なく、両地区（天神前地区）は前期中葉から後葉を中心に生活活動が行われたものと考えられる。



第62図 志村氏調査区と本調査区の位置 (1/10000)

## 古墳時代

本地区から発見された古墳時代の住居は1号住居跡1軒のみであるが、土器の出土は比較的良好であり、それらの出土状況や構成を概観し、土器群の編年的位置付けを考えてみたい。あわせて住居跡の形態を含め同時代の大集落である坂井南遺跡とのかかわりにも少し触れてみることにする。

### 1) 土器出土状況（第44図）

1号住居跡の遺物の出土状況はどちらかというと住居内東側よりも西側に多く散在の傾向が認められる。遺物は住居中央や壁際といった特定の場所にかかわらず全体的に床面上乃至床面より若干浮上して出土しており、それらは住居廃絶後に堆積した埋没土の傾斜に沿って転げ落ちた状況ではなく、埋没土は土層断面観察では火災とともに一気に埋まつたものと判断されるので、火災と同時に廃棄されたものがあるいは直後に廃棄されたものと考えられ、ほぼ同様な時期のものであろう。土器の接合関係では、まとまりをもった破片が接合したものと、散乱した破片が接合したものとがあり、土器廃棄の時間的な差が窺えるが、住居の壁高が10cm前後と浅いので豊穴本来の深さがわからず、火災による住居埋没・廃絶以降の埋没状態を知り得ない現状では、これらはやはり同一時期の一括遺物ととらえておきたい。

### 2) 土器について（第58図）

出土した土器の器種構成は、壺・小型壺・台付甕・高坏・小型手捏ね土器となっている。器形の推定できる土器で特色をみると、壺は単純口縁のものが主体であり（3・4）、小型壺は器面を丁寧に磨き胎土が密な精製されたもので（5・6）、6のような口縁部が僅かに立つだけの短頸壺は珍しい。台付甕は単純口縁のみで（7・8）、有刻口縁やS字状口縁のものは無い。高坏は坏部下端に稜を有するもの（9）、坏部が楕形に近いもの（10）などがある。このほかに器台が無いことも特筆される。

「II章 茅林地区」においても記したが、山梨県内における弥生時代後半から古墳時代前期にかけての土器様相は、近年中山誠二氏（「甲斐弥生土器編年の現状と課題 時間軸の設定」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 1993年）、と小林健二氏（「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993年）により大きな成果がもたらされており、これを参考に天神前地区の土器の編年上の位置を検討してみたい。なお茅林地区を含め土器に関しては小林健二氏にご教示をいただいた。

壺3・4は頸部が比較的強く屈曲し、台付甕7・8においても頸部の屈曲は強く、中山編年6期B相の壺・台付甕の特徴に重なる。6期B相以降台付甕は器壁が薄くなる傾向が認められるが、7・8は若干厚手となっている。小型壺5は口縁部が欠損しているがヒサゴ壺の類いかも知れず、特徴的な小型壺6などを含め、これら新器種の出現は小林編年2b期に置かれている。高坏11は器壁が厚く楕形を呈しや古い様相ではあるが、高坏9は小林編年3期に位置付けた坏部が大き

く開き脚部が朝顔状に外反する形態のものと類似している。しかし高坏IIの脚部は直線的に開き脚部が僅かに内湾気味になり端部でやや外反しており、小林編年3期高坏脚部とは形態を異にしている。少々乱暴ではあるが高坏9とIIを合体させて、脚部が直線的に開き脚部下端に稜を有し大きく開く形態の高坏ということで考えてみると、同様のものは八田村大塚遺跡に類例がある（『大塚遺跡』山梨県教育委員会 1997年）。発掘調査を行った新津健氏の分析では当該高坏は小林編年2b期段階に比定されており、脚部が東海地方西部濃尾平野の影響下にあり新しい要素をもっているのに脚部が「伏椀状」の古い様相を呈することから、2b期を細分可能としている。大塚遺跡の高坏を細かく見ると「伏椀状」脚部は端部が本地区例のように外反していないことに気づく。となれば本地区的高坏は大塚遺跡例よりも小林編年3期段階の高坏により近いことになる。ここでは本地区出土土器を小林編年2b期に相当するものとし、高坏の特徴によりそのなかでも新しい段階として位置付けておくことにする。なお、器台がみられない点も大塚遺跡と共通しており時間的に近似するものといえよう。

ところで、古墳時代前期の土器の時間的推移を考える上で指標となるのは、東海地方西部の伊勢湾沿岸地域濃尾平野に淵源をもつ特徴的な口縁部形態のS字状口縁台付壺であり、小林氏の編年も基本的にはこのS字状口縁台付壺の変遷を基軸として組み立てられている。しかしながら今回は破片を含め、遺構はもとより遺構外についててもS字状口縁台付壺は全く出土していない。器種構成のなかで東海地方の影響が認められるのは高坏9で、台付壺は単純口縁のいわゆる在地系のもので占められる。壺に關しても、肩部に装飾的な継方向の沈線文が施される壺3の系譜が問題となってくるが、基本的には在地のものであろう。さらに北陸系の土器もみられない。大塚遺跡では北陸系土器は存在しないものの、S字状口縁台付壺が他の台付壺を数量的に圧倒しており異ったあり方を示している。本地区から南東に800m程離れた坂井南遺跡においても、S字状口縁台付壺は普遍的である。在地系土器が主体でS字状口縁台付壺や北陸系土器を伴わないという特徴は、本地区的遺跡の性格を物語るものと言えることができる。

### 3)住居形態と遺跡の景観

古墳時代前期の住居跡平面形態に関して中山誠二氏は、隅円長方形・小判形・方形・不整方形の4つにわけて、小林氏の編年に沿って、隅円長方形は弥生時代の中北部高地型櫛描文の住居跡に多くみられ1期以降には小判型と交じり合い、小判形は1期から2a期にみられ、2期から3期にかけては小判形から方形・長方形に変化し、S字状口縁台付壺の出現時期には方形となる、という傾向をとらえてる（『山梨県域における集落・墳墓の概要』『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993年）。1号住居跡の平面形態は隅円長方形であり、時期的には2b期であるので中山氏の住居跡平面形態推移のなかに当てはまっている。また、中山氏は火災住居にも言及しており、火災を受けた住居が2期に集中することから、その背景に単純な住居廃棄行動とは異なった戦闘などの社会的現象の影響を考えている。1号住居跡も明らかに火災を受けており、周辺部に調査が及んでおらず詳しいことは言えないが、戦闘による被災も考えられることになろう。

本地区の土器は古墳時代初頭に位置付けられ、坂井南遺跡・大塚遺跡におけるS字状口縁台付甕の出現時期に重なる。にもかかわらずS字状口縁台付甕は土器はおろか破片すらも出土していない。このことはどのように理解すれば良いのであろう。S字状口縁台付甕は外来系の土器であり、山梨県内の古墳時代前期にあってはこの外来系土器が大きなかかわりをもち、弥生時代末から当該時期にかけて在地系土器中心の集団から外来系土器を有する集団へと変化していくものと認識されている（小林健二「第6節 弥生土器・古式土師器について」『東山北遺跡－第1次～第3次調査－』山梨県教育委員会 1993年）。坂井南遺跡においても小林編年2b期にS字状口縁台付甕の住居が出現し、3期～5期にはS字状口縁台付甕をともなう住居は拡大し安定した集落が営まれ、外来系土器をもった集団の発展が窺える。ただし小林氏も指摘するように（「外来系から在来系へ－甲斐のS字甕の変遷－」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 1993年）、3期以降すべてS字状口縁台付甕に変わるのはではなく、割合は低くなるものの単純口縁の台付甕など在地の土器はそのなかに残存している。こういった集落の形成・発展過程は当然モノだけの移動ばかりではなく、それを使用した人間の動きがあり、在地の集団を外来の集団が凌駕していく動きととらえることが可能である。1軒だけの調査例から論を展開することは当然無理なことと言えるが、あえて想像をめぐらしてみれば、この地域では伝統的となる弥生時代以来の平面形態の住居をつくり在地の土器を使用していた天神前地区の集落と、方形の住居を構え外来の土器を持ち込んだ坂井南遺跡の集落はほぼ同時期に形成されたが、緊迫した社会状況のなかある時両集落の間に戦闘が起り、天神前地区集落は坂井南集落の攻撃をうけ住居等集落を焼かれてしまった。以後坂井南集落は拡大発展し安定した経営が行われるが、天神前地区集落はその後の復興・発展はなく廃絶してしまった、ということが言えようか。本地区を性格付けるS字状口縁台付甕の不在や在地系土器の多さなどの特徴の背景には、このような変遷過程があったのかもしれない。推測の域を出ない。

さて、本地区的立地を眺めてみると、当該地区は北方に突出したような舌状台地となっており、西側と東側には小さな窪地が入り込み、北側の西から東へかけては沢がある。調査区域は台地の北辺にあたり、台地は南側の茅林地区・村ノ前地区まで続いている。発見された住居跡は台地の縁辺部につくられており、調査が及んでおらず周辺部分の状況が把握できないが、遺跡の広がりは南側に展開するものと思われる。本地区から北側は約70mで沢となり、沢には湧水地があり、その近くの日当たりの良い高台が居住区域として選ばれた可能性は高い。志村龍藏『坂井』（地方書院 1965年）によれば、本地区周辺では字村ノ前・字茅林で弥生式土器の発見が報告されている。遺物の詳細はやや不明瞭ながら、それらは台付甕・甕・瓶・器台・高坏等で弥生時代末～古墳時代前期のものといえる。これまでみてきたように天神前地区の古墳時代初頭の遺構と遺物は大きな問題を提起するもので、今回調査した茅林地区を含め弥生時代末～古墳時代初頭における時代の画期を考える上で坂井遺跡の重要性を再認識する必要があろう。

## [おわりに]

坂井遺跡が世に知られるようになってから70年の歳月が経った今日まで、志村滝蔵氏により昭和17年（1942年）、同23年、同25年、同29年、同31年に実施された発掘調査以外は、遺跡の組織的な発掘調査は行われなかった。坂井遺跡は天神前を含めると坂井集落西側から新府城跡南側までの約800mに及ぶ広大な遺跡であり、22カ所の竪穴住居跡や炉跡などが発見されて縄文時代中期の標識的な遺跡として巷間にその存在を認められてはいたものの、遺跡の詳細や全体像はいまだ明らかになっていない。それは志村家の努力によって遺跡が守られ、開発の波がこの地に及ばなかったことと無関係ではあるまい。発掘調査によって遺跡の全貌を明らかにすることは、反面遺跡の破壊を免れない。何千年の時を経て地下に埋没した貴重な遺跡に対する保存のひとつのあり方を坂井遺跡は示しているようにも思える。

さて、今回は送電線鉄塔建設工事にともない鉄塔建設予定地3カ所の調査を実施したが、広い坂井遺跡の3カ所に試掘坑を入れたような形での発掘調査となった。これらの内容は前項まで述べてきた通りであり、調査面積が狭い範囲であったにもかかわらず大きな成果がもたらされている。以下、重複するが遺跡の概観を述べまとめてみたい。

村ノ前地区はかつて志村滝蔵氏の調査により住居跡が発見された地域で、今回はその南辺に調査が及んだことになった。住居跡は確認されなかつたが縄文時代中期後半の土坑13基、中期前半の土坑1基が検出され、墓制研究に貴重な発見となつた。土坑から出土した遺物は土器が主体であるが、石皿等の石器も見られ土器・石器研究の貴重な資料となる。茅林地区からは今回の調査地区とは違う場所において弥生時代の土器の発見が報じられており、弥生時代末期の方形周溝墓2基の発見は当該地域に集落の存在を予見させる。天神前地区は天神前遺跡として新府城跡南側において縄文時代前期後半諸磯期の住居跡が報告された地域で、今回の調査地区は沢を挟んだ南側において行われ、縄文時代前期中葉～後葉の住居跡1軒、前期後半の土坑1基・集石土坑1基、中期後半の土坑1基、古墳時代初頭の住居跡1軒などが発見された。縄文時代前期の住居跡からは特に前期中葉の土器やそれに伴う石器が出土し良好な一括資料としてとらえられた。該期の住居跡の存在は本地域に前期の集落が形成されていた可能性をより鮮明にした発見であったと言え、古墳時代初頭の住居の存在は坂井南遺跡とのかかわりで注目されよう。

坂井遺跡の発掘調査で発見された遺構並びに遺物は、縄文時代前期・中期、弥生時代末期、古墳時代初頭のもので、これらは当時の社会を解明する上で貴重であり、地域の歴史を復元する上でも非常に重要である。調査によってもたらされた資料は、土器研究・石器研究・集落研究・墓制研究等々、考古学・歴史学に資するものとなろう。ただし今回の報告は限られた作業のなかでなされたもので、不十分な点も多々あると思われ憂慮している。ともあれ本報告書が今後の調査・研究に活用されれば望外の喜びである。

## 付編 坂井遺跡表面採集品について

### 1. はじめに

本資料は、山梨県韮崎市藤井町坂井茅林719において表面採集された尖頭器と土玉である。1996年、志村富三氏が桑の抜根をしている際に、同じ畑から発見した。今回坂井遺跡の報告をするにあたって、志村富三氏のご厚意により、周辺から採集されたこの2点についてもあわせて資料紹介させていただけたこととなったので、ここに紹介する。

### 2. 採集地の立地（第1図）

採集地は坂井遺跡内で、現在調査当時のまま保存されている住居跡の北側の畑にあたる。本編で述べたとおり、小円頂丘の東緩斜面に位置しており、標高は約455mをはかる。採集地の北側は浅い谷頭になっていて、東側にむかって谷が続いている。この北から東につづく谷筋では、現在でも湧水が点在している。西側は小円頂丘の微高地で、約60mほどで七里岩の急峻な崖となる。また東側と南側はなだらかに低くなっている、一面に日当たりがよく見通しのきく緩斜面となっている。



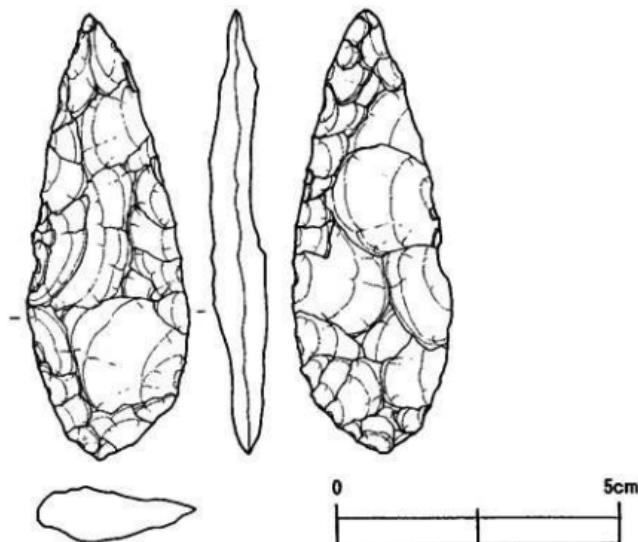
第1図 坂井遺跡表面採集品の採集地点 (1/5000)

### 3. 採集された尖頭器について

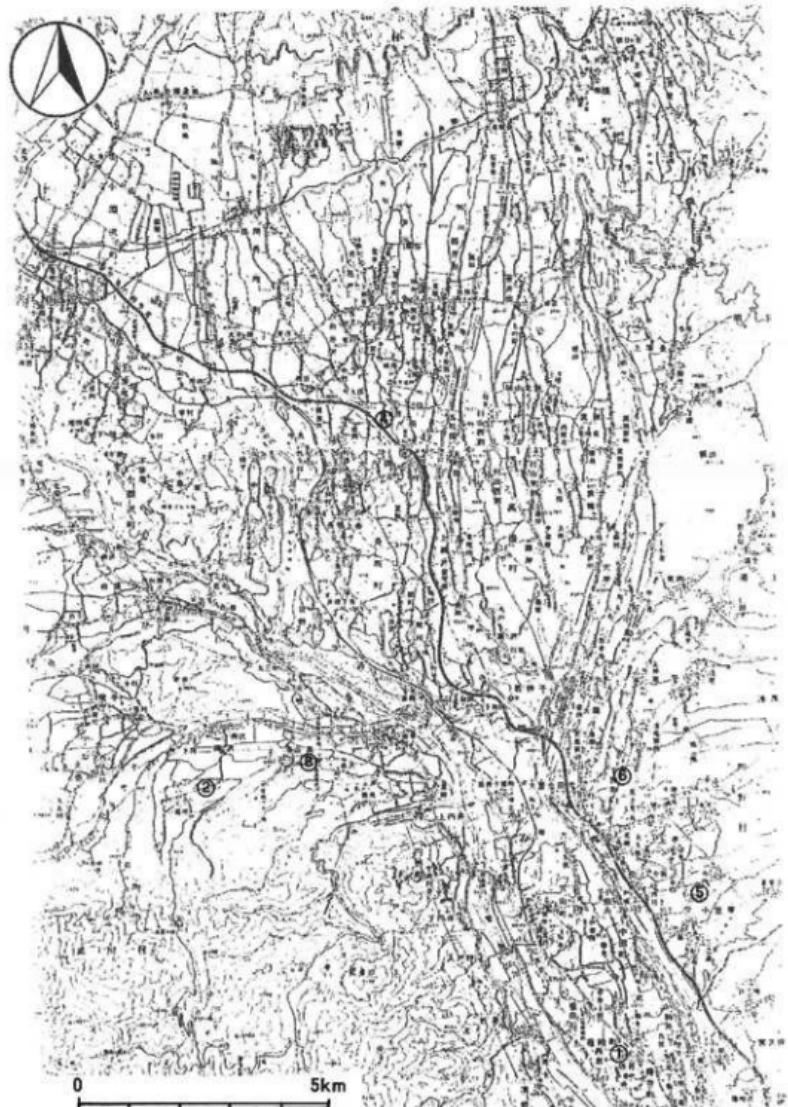
尖頭器は、最大長が7.9cm、幅2.9cm、厚さ1.0cmを測る（第2図）。表裏面とも側縁部の中央に新しい欠損がわずかにみられるものの、全体の形状は損なわれておらず、ほぼ完形である。頁岩製で表面は全体的に風化が著しく、一面に白色化している。この風化によって剥離の状態はかなり見えにくくなっているが、調整は表裏面ともにやや粗く、剥離の大きさに均一性はみられない。とくに裏面の左側縁部などには、細かい調整がほとんどなされていない。また厚さについても、表裏面にみられるいくつかの大きな剥離によって大幅に減じられ、不均一になっている。

この資料はその形態的特徴から、縄文時代草創期初頭にみられる尖頭器であるといえよう。坂井遺跡のある山梨県韮崎市・北巨摩郡地区では、縄文時代草創期の資料はそう多くはなく（第3図・第1表）、なかでも本資料のように最大幅が基部寄りにある尖頭器の類例は、現在のところこの地区では発見されていない。県内で当該期の尖頭器がまとまって出土した遺跡として、北巨摩郡明野村神取遺跡が知られているが、この神取遺跡からも本資料の類例は出土していない。今回の採集品は、神取遺跡の形成時期には併行せず、その前段階の時期に相当するものと考えられる。

周辺の地域で発見された尖頭器は、いずれも河川に隣接した台地縁辺部付近から発見されている。それに対して坂井遺跡の尖頭器は、湧水地に隣接し、なだらかな緩斜面上から発見されている。この立地の差はあるいは時期的な差であるかもしれないが、資料が少なく、断定はできない。今後、この地域での類例がさらに増加すれば、当該期の八ヶ岳・茅ヶ岳山麓地域での遺跡の広がりがわかってくるであろう。



第2図 坂井遺跡表面採集の尖頭器（原寸）



第3図 坂井遺跡と周辺の草創期遺跡

No.	遺跡名	所 在 地	出 土・探集品
①	坂井遺跡	蓮崎市藤井町坂井字茅林719	尖頭器(探集品)
②	眞原A遺跡	武川村山高字眞原3567-35外	有茎尖頭器1点(探集品)
③	東原A遺跡 <sup>註1)</sup>	武川村山高字東原2828外	有茎尖頭器1点(探集品)
④	小屋敷遺跡	長坂町大八田字小屋敷外	有茎尖頭器1点
⑤	下大内遺跡	明野村小笠原字大内3137外	有茎尖頭器1点
⑥	神取遺跡	明野村下神取字神取外	尖頭器25点、有茎尖頭器4点、微隆起線文土器1点ほか

第1表 周辺の草創期の遺跡

なお、本資料の紹介にあたって、北巨摩郡各町村の埋蔵文化財調査担当者の方々には、快く資料実見・掲載の許可をいただきました。ここに記して感謝するとともに、お礼申し上げます。

(秋山圭子)

註1) 本資料は、これまで武川村実原B遺跡出土石器と報告されてきたが、武川村教育委員会竹田真人氏によって東原A遺跡出土であると修正されている。

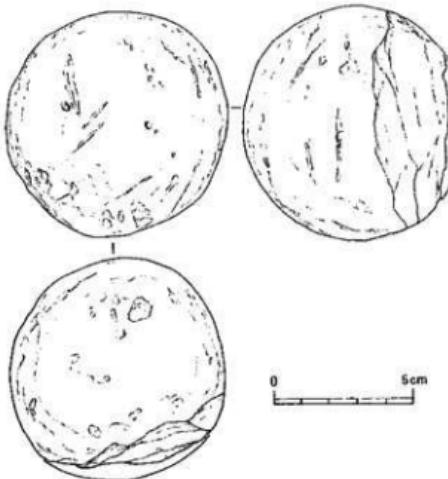
#### 参考文献

- 小宮山隆 1997『小屋敷遺跡』長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第13集  
 佐野 隆 1997『下大内遺跡・屋敷添第2遺跡・中原遺跡』明野村文化財調査報告11  
 武川村教育委員会 1989『遺跡詳細分布調査報告書』

#### 4. 土 玉

土玉は直径7.7cmの球状で、重量は340g。未焼成と思われるが、相当低い火力による焼成の可能性もないわけではない。また、ときどき住居跡内や土坑中から出土する粘性を残した粘土とも異なり、完全に乾燥した状態である。表面は風化が進行し、表面の仕上げ状況がわかりにくくなっているが、全面的にナデが行われている。またところどころに縦横の短いスサ状の圧痕が見られる。圧痕は内部には及んでいないので、スサとは違う。一見、葉脈状であり、土器製作と同様に広葉樹などの葉の上で製作した際の痕跡の可能性が高い。一部は皮を剥いだように表面が剥離して破損しているが、発見当初は完存であったようである。他の遺物同様に桑の抜根中に出土したということで、詳細な出土状況は不明ではあるが、表面採集品ではなく、地中のやや深いところからの出土であることは確かである。時期は全く不明といわざるを得ないが、周辺の遺跡や過去の遺物出土状況から古代以前の遺物であろうと思われる。

胎土には白色・黒色・赤色小粒子、雲母、小礫を含む。とくに雲母が見られることから七里岩



第4図 坂井遺跡表面採集の土玉 (1/2)

台地上で採取された粘土ではないだろうと考えられる。X線で内部の観察を行ったところ、空洞部はなかったが、中央部に核となるような物質が認められた。大きさは3cm程度で、環状あるいは孔のあいた形状である。X線の通り方によると物質は石や鉄ではなく、粘土に近いと思われ、土製品や土器の突起などの一部ではないかと考えられる。X線観察ではどうしても限界があるので、今後荒削りするなどして内部の物質を破損しないよう、また外形の球状が復元できるような措置を講じる必要があろう。

この遺物は球状の未焼成粘土塊である点が最大の特徴で、管見では類例は知らない。ただ粘土塊、または焼成粘土塊であれば繩文以降、各地に類例はあるが、それらはたいてい不整形である。球状で内部に何かを入れるという点に注目すると、繩文中期の土鈴に類似する。ただ通常の土鈴よりもひとまわり大きく、全く異質なものであることは言うまでもない。粘土を乾燥させただけという点では、古代から中世初頭に貴族や武士など上流階級の間で流行した泥塔が思い浮かぶ。泥塔は平安時代に宝塔形であったのが、鎌倉時代になると五輪塔形になり、焼成された資料がときどき発見されるが、大半は「泥塔」という字が示すとおり、未焼成であったと推測されている。本資料は五輪塔の水輪に似てはいるものの、上下をつなぐ孔はなく、また泥塔であれば積み重ねた場合、上下が扁平になるはずであろうが、そうした状況はない。

このような遺物が土に同化せず発見されたということは稀であり、また調査でもなかなか類例のない資料ではある。しかしこうした未焼成品も存在するという事実を念頭に置いて、今後の調査にあたる必要はあるだろう。

(樋原功一)

# 写 真 図 版



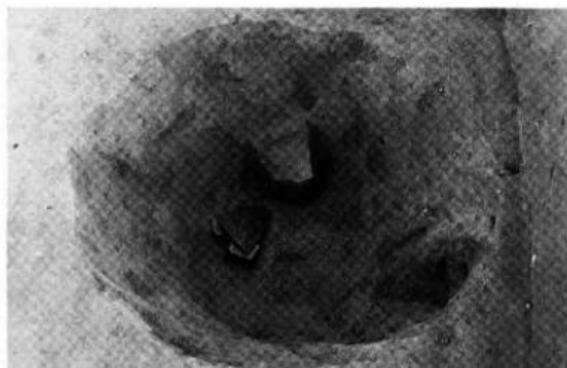
坂井遺跡航空写真



村ノ前地区発掘風景



村ノ前地区 1号土坑



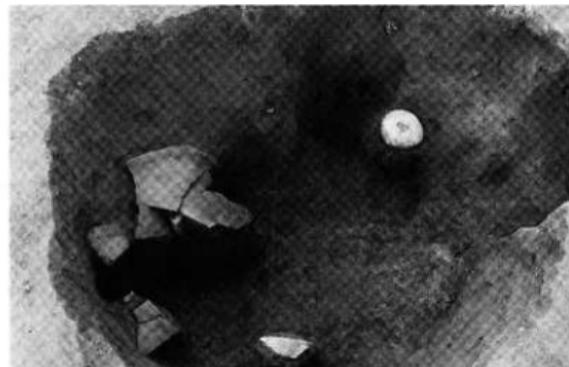
村ノ前地区 2号土坑



村ノ前地区 3号土坑



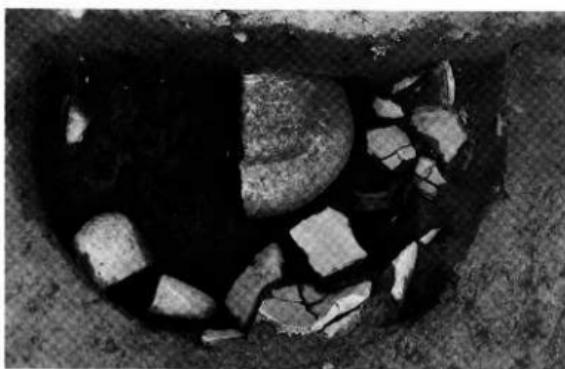
村ノ前地区 4号土坑



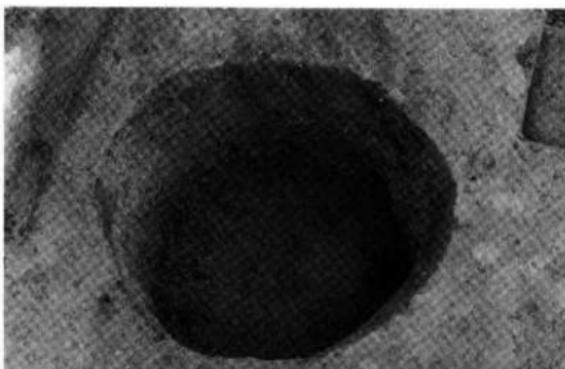
村ノ前地区 5号土坑



村ノ前地区 6号土坑



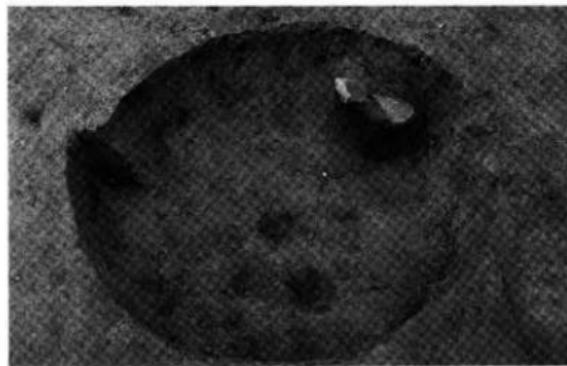
村ノ前地区 7号土坑



村ノ前地区 8号土坑



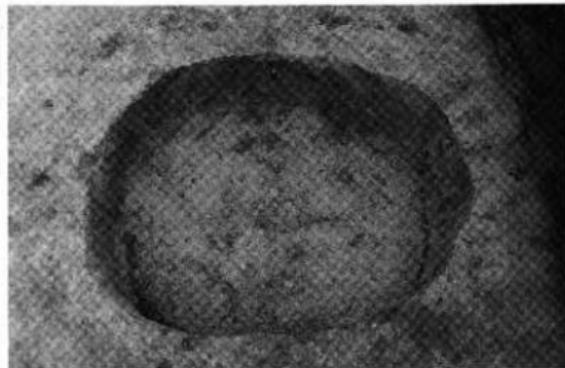
村ノ前地区10号土坑



村ノ前地区11号土坑



村ノ前地区12号土坑



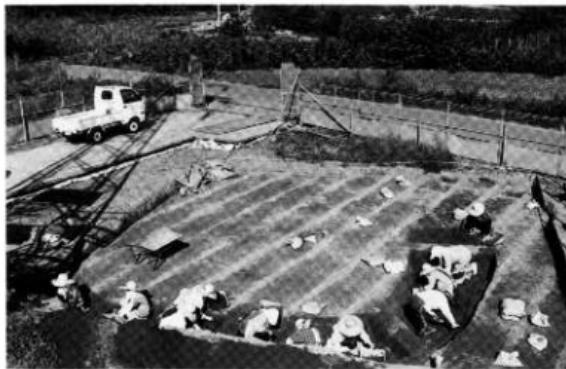
村ノ前地区13号土坑



村ノ前地区14号土坑



村ノ前地区近景



茅林地区堯掘風景



茅林地区近景



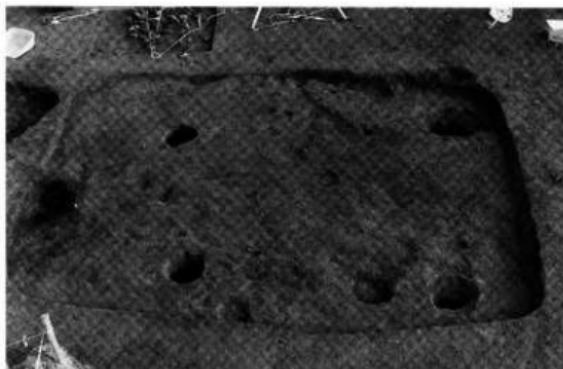
茅林地区周溝基



天神前地区発掘風景



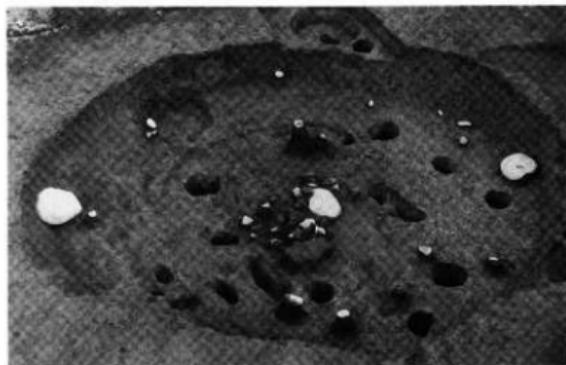
天神前地区  
1号居住跡遺物出土状況



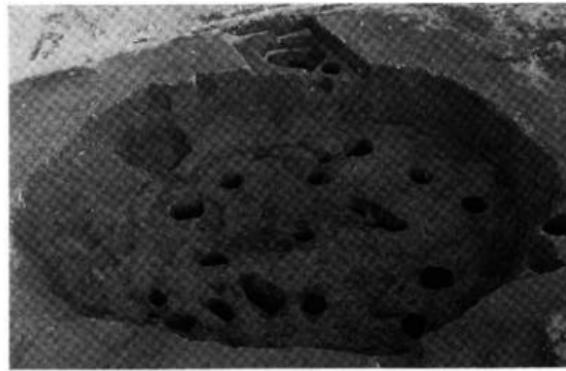
天神前地区 1号居住跡



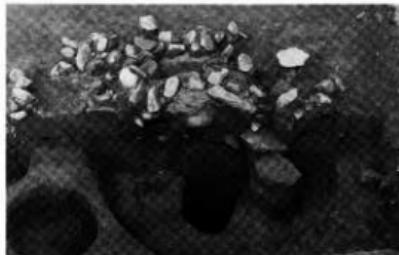
天神前地区  
2号竖穴住居跡遺物出土状况



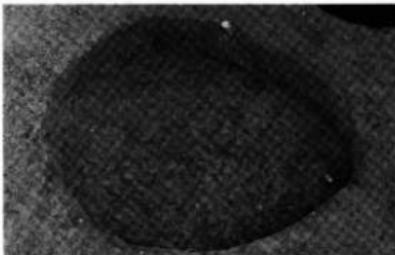
天神前地区  
2号竖穴住居跡石器出土状况



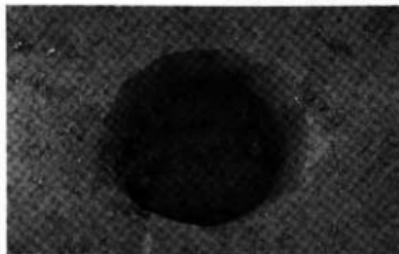
天神前地区 2号竖穴住居跡



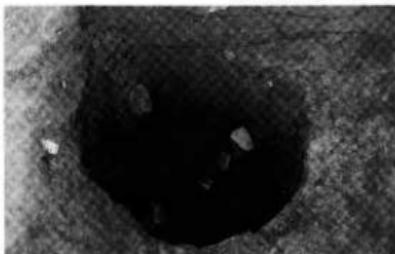
天神前地区集石土坑



天神前地区 1 号土坑



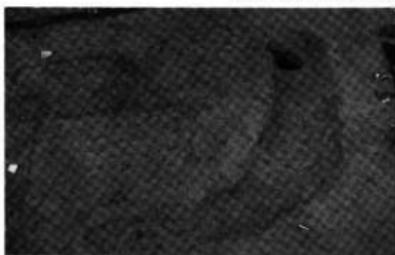
天神前地区 2 号土坑



天神前地区 3 号土坑



天神前地区 1 号沟



天神前地区 2 号沟



天神前地区遗跡近景



坂井村ノ前地区 7号・10号土坑出土土器



坂井村ノ前地区  
4号土坑出土土器



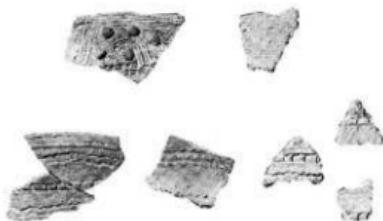
坂井村ノ前地区  
6号土坑出土土器



坂井村ノ前地区  
包含層出土土器



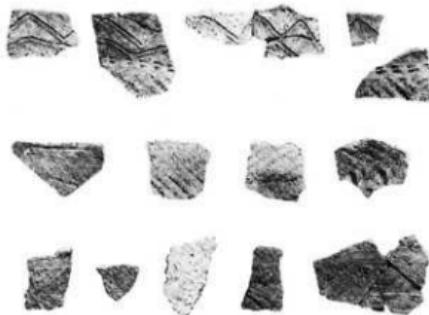
坂井村ノ前地区  
包含層出土土器



天神前地区  
2号住居跡出土土器(1)



天神前地区  
2号住居跡出土土器(2)



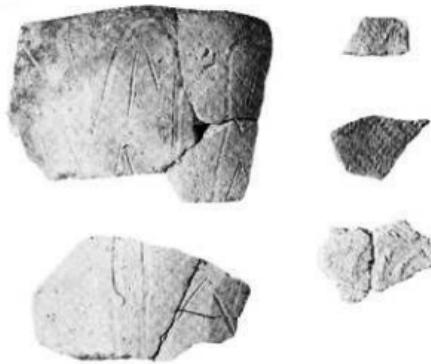
天神前地区  
2号住居跡出土土器(3)



天神前地区  
2号住居跡出土土器(4)



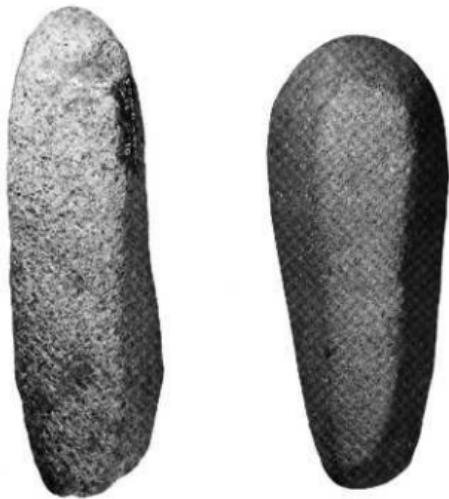
天神前地区  
2号住居跡出土土器(5)



天神前地区  
1~3号・集石土坑出土土器



天神前地区 2 号住居跡出土石器



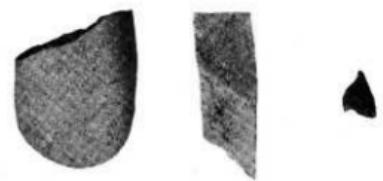
天神前地区 2 号住居跡出土石器



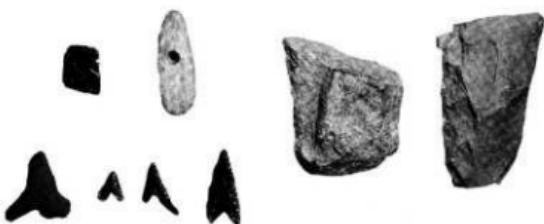
天神前地区  
2号住居跡出土石器



天神前地区  
1号住居跡出土石器



天神前地区  
1号・2号溝出土石器



村ノ前地区出土石器



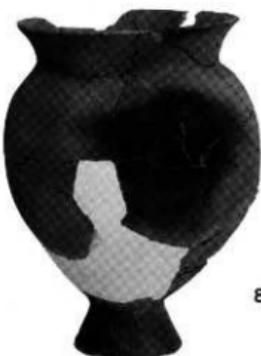
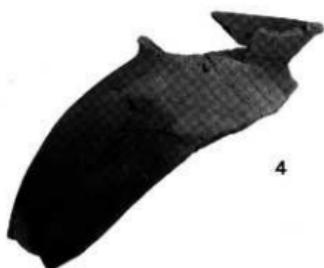
村ノ前地区7号土坑出土石皿（接合資料）



村ノ前地区出土石器



茅林地区 2 号周溝墓出土土器



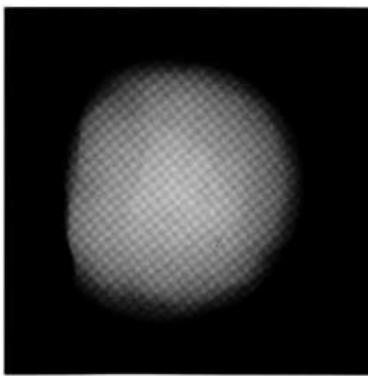
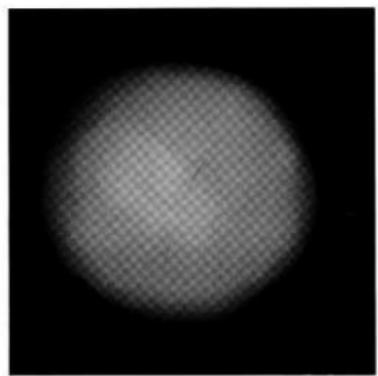
天神前地区 1 号住居跡出土土器



尖頭器



土玉



土玉X線写真  
(撮影: 帝京大学山梨文化財  
研究所 鈴木 稔)

---

## 坂井遺跡

送電線鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成10年(1998年)6月30日

編集・発行 茅崎市遺跡調査会  
茅崎市教育委員会

〒407-8501

山梨県茅崎市水神一丁目3番1号  
TEL 0551-22-1111(代)

印刷 有限会社 タクト/印刷・デザイン

---

